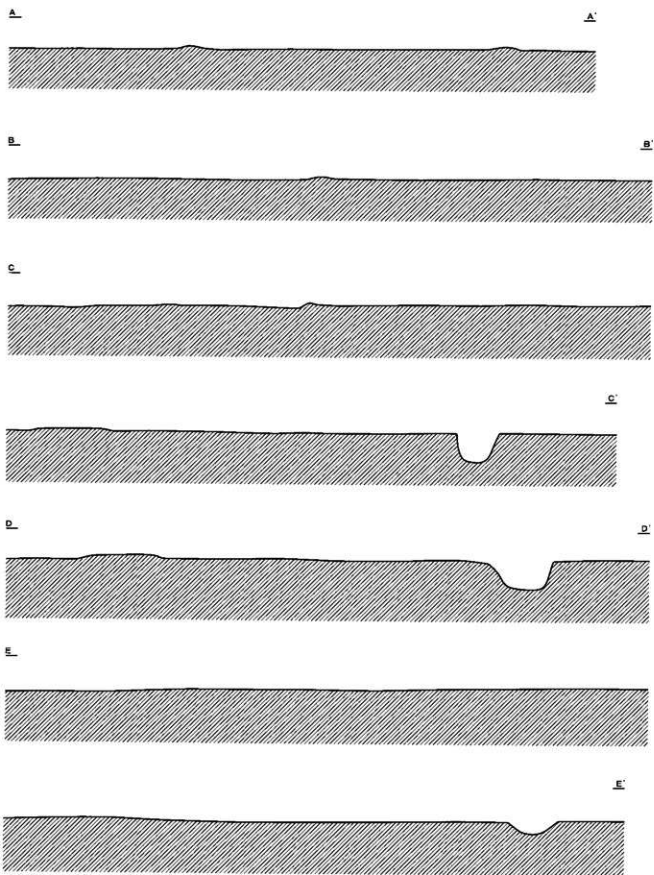


A L

3 2

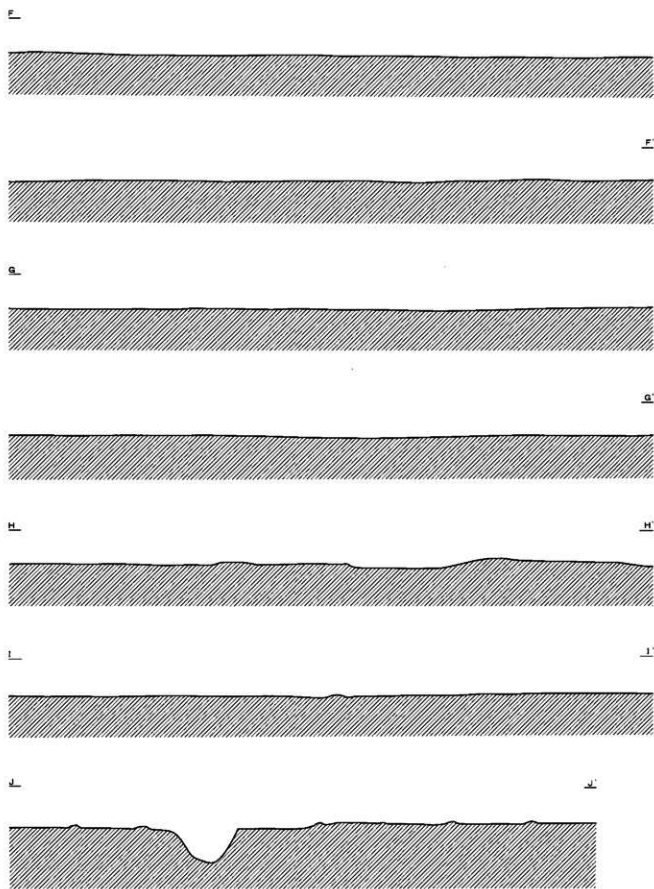


第260图 C区水田跡(21)



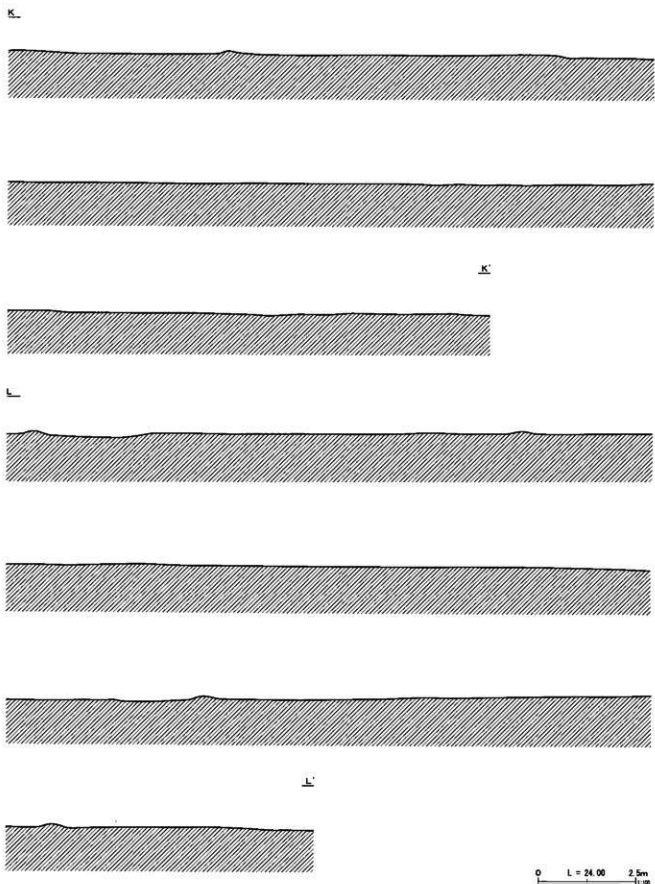
0 L = 24.00 2.5m

第261図 C区水田跡エレベーション図(1)



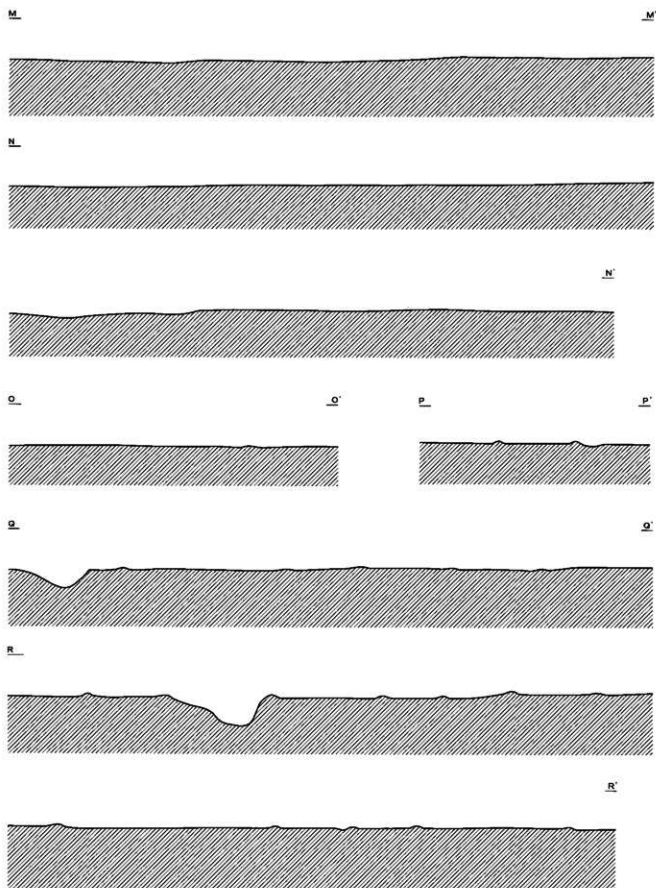
第262図 C区水田跡エレベーション図(2)

0 L = 24.00 2.5m



第263図 C区水田跡エレベーション図 (3)





第264図 C区水田跡エレベーション図 (4)

0 L = 24.00 2.5m  
1/100

能性がある。

第43区画：大畦と合流すべき、幅広の畦の南に位置している。規模は、東西13.6m、南北1.2m、面積16.3㎡である。東西に主軸をもち、形状は非常に細長い短冊形を呈する。これは、第28・59・65区画と同様に、2本の畦に挟まれているという制約によるものと考えられる。主軸方向はN-79°-Wを指す。

第50区画：大畦と合流すべき、幅広の畦の北に位置している。規模は、東西7.4m、南北は東畦3.3m、西畦1.3m、面積(17.0)㎡である。東西に主軸をもち、形状は台形を呈する。これは、第37・58区画と同様に、幅広な畦がN-80°-Wの方位を指していることからくる制約に起因すると考えられる。

第51区画：大畦と合流すべき、幅広の畦の南に位置している。規模は、東西5.4m、南北は東畦(2.1)m、西畦4.0m、面積(16.5)㎡である。東西に主軸をもち、形状は台形を呈する。これは、第28・43・65区画と同様に、2本の畦に挟まれているという制約によるものと考えられる。

第59区画：大畦と合流すべき、幅広の畦の南に位置している。規模は、東西11.4m、南北(1.2)m、面積(13.7)㎡である。東西に主軸をもち、形状は非常

に細長い短冊形を呈する。これは、第28・43・65区画と同様に、2本の畦に挟まれているという制約によるものと考えられる。主軸方向はN-69°-Wを指す。

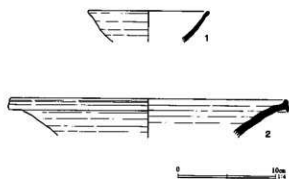
第60区画：大畦と合流すべき、幅広の畦の南に位置している。規模は、東西5.6m、南北は東畦(3.6)m、西畦5.6m、面積(25.8)㎡である。東西に主軸をもち、形状は台形を呈する。これは、第28・43・65区画と同様に、2本の畦に挟まれているという制約によるものと考えられる。

第62・63区画：大畦と、これと合流すべき幅広の畦に挟まれる形で、南北に並んでいる。両水田区画の、境界となる東西畦が検出されていないため、南北規模と面積は不明である。東西規模は、共に7.2mを測る。第51・60・66・67区画と同様に、2本の畦に挟まれているという制約によるものと考えられる。

第67区画：大畦と合流すべき、幅広の畦の南に位置している。規模は、東西(4.2)m、南北(3.2)m、面積(13.4)㎡である。東西に主軸をもち、形状は正方形に近い長方形を呈する。これは、第28・43・65区画と同様に、2本の畦に挟まれているという制約によるものと考えられる。

第69区画：大畦と合流すべき、幅広の畦の南に位置している。規模は、東西(3.6)m、南北(5.5)m、面積(19.8)㎡である。東西に主軸をもち、形状は台形を呈する。これは、第28・43・65区画と同様に、2本の畦に挟まれているという制約によるものと考えられる。

第70区画：大畦と合流すべき、幅広の畦の南に位置している。規模は、東西(5.0)m、南北(3.3)m、面積(16.5)㎡である。東西に主軸をもち、形状は台形を呈する。これは、第28・43・65区画と同様に、



第265図 C区B水田出土遺物

第33表 C区B水田跡出土遺物観察表 (第265図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵坏	(12.2)	3.2		E F	Ⅱ	灰色	10	南比企産 風化著しい
2	須恵甕	(28.0)	4.0		E F	Ⅱ	灰色	10	南比企産

2本の畦に挟まれているという制約によるものと考えられる。

第74区画：規模は、東西5.7m、南北3.6m、面積20.5㎡である。東西に主軸をもち、形状は長方形を呈するが、短冊形程の長短比ではない。主軸方向はN-73°-Wを指す。

第74・76区画：第74区画の北と南に隣接する水田規格である。共に南北規模は不明であるが、東西規模は5.7mで第74区画と共通している。

第78区画：第75区画の西に隣接する水田規格である。東西規模は不明であるが、南北規模は3.6mで

第75区画と共通している。

第28・43・51・59・60・62・63・65～67・69～73区画は、2本の畦に挟まれた範囲内に水田を区画したために、変則的な形状となっている。

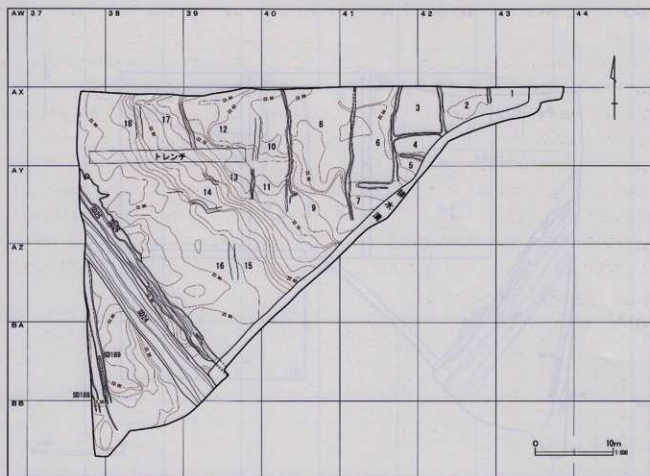
面積の算出には及ばないものの、東西規模または南北規模の推定できるものを眺めていきたい。

東西規模の推定できるものは、第30区画=(4.6)m、第38区画=(3.6)m、第52区画=(5.9)m、第53区画=(5.8)m、第61区画=(5.0)m、第64区画=(9.9)m、第68区画=(10.0)mである。

南北規模の推定できるものは、第40区画=(4.4)

第34表 C区水田跡計測表(第237～265区)

水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(㎡)	水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(㎡)	水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(㎡)
1	6.0	-	-	45	(5.5)	-	-	89	4.2	1.2	5.0
2	9.2	5.8	53.4	46	7.0	-	-	90	4.1	1.2	4.9
3	5.0	-	-	47	6.2	3.2	19.8	91	3.4	1.7	5.8
4	-	-	-	48	(9.2)	(6.0)	(55.2)	92	2.0	-	-
5	3.5	-	-	49	(13.0)	(5.8)	(75.4)	93	2.2	2.0	4.4
6	-	-	-	50	5.3	-	-	94	2.4	1.8	4.3
7	-	-	-	51	4.8	-	-	95	1.6	1.6	2.6
8	-	-	-	52	7.0	-	-	96	1.6	1.2	1.9
9	-	-	-	53	4.2	-	-	97	1.8	1.0	1.8
10	3.1	-	-	54	4.4	-	-	98	1.6	-	-
11	-	-	-	55	-	-	-	99	1.4	-	-
12	10.8	-	-	56	-	-	-	100	1.8	1.6	2.9
13	12.5	11.5	143.8	57	12.0	-	-	101	1.6	1.4	2.2
14	-	-	-	58	13.6	-	-	102	1.6	1.6	2.6
15	5.2	-	-	59	6.2	-	-	103	1.8	1.4	2.5
16	-	-	-	60	14.8	-	-	104	2.2	1.4	3.1
17	-	-	-	61	6.0	-	-	105	2.4	-	-
18	7.8	-	-	62	(2.0)	-	-	106	-	-	-
19	10.3	-	-	63	(2.4)	-	-	107	1.8	-	-
20	9.2	-	-	64	(4.0)	-	-	108	2.0	-	-
21	-	-	-	65	-	-	-	109	5.4	1.8	9.7
22	8.8	8.0	70.4	66	-	-	-	110	5.6	1.6	9.0
23	7.6	3.0	22.8	67	1.6	-	-	111	5.8	1.8	10.4
24	-	-	-	68	1.8	-	-	112	5.4	-	-
25	6.0	-	-	69	-	-	-	113	-	-	-
26	-	-	-	70	3.6	-	-	114	1.6	-	-
27	(2.3)	-	-	71	3.8	1.4	5.3	115	1.6	-	-
28	-	-	-	72	4.1	1.4	5.7	116	4.2	1.8	7.6
29	(14.6)	-	-	73	4.1	-	-	117	-	-	-
30	14.2	-	-	74	-	-	-	118	1.0	1.0	-
31	12.6	-	-	75	1.6	-	-	119	-	-	-
32	-	-	-	76	2.4	-	-	120	4.6	-	-
33	8.5	-	-	77	2.0	-	-	121	4.8	0.9	4.3
34	7.6	4.8	36.5	78	1.2	-	-	122	5.0	-	-
35	-	-	-	79	1.0	1.0	-	123	-	-	-
36	(4.5)	-	-	80	0.8	-	-	124	3.2	1.2	3.8
37	(6.0)	-	-	81	-	-	-	125	3.2	-	-
38	-	-	-	82	3.6	2.8	10.1	126	1.6	1.5	2.4
39	(13.5)	-	-	83	3.8	1.4	5.3	127	1.5	-	-
40	(14.4)	-	-	84	4.2	1.6	6.7	128	4.6	1.6	7.4
41	(5.4)	-	-	85	4.8	2.2	10.6	129	2.0	-	-
42	(6.0)	-	-	86	4.4	-	-	130	2.4	-	-
43	-	-	-	87	4.2	2.3	9.7	131	-	-	-
44	1.3	-	-	88	4.2	1.7	7.1	132	-	-	-



第266図 D区一面水田跡等高線図

m、第35区画=(4.0)m、第65区画=(1.4)mである。

#### B区水田跡 (第215~236区画)

第17地点西側で検出された。B区で検出された水田区画は104区画である。水田面の検出標高は22.70~23.28mである。標高の、最高地点から最低地点までの距離は32m、高低差58cm、傾斜率は1.6%である。

因みに、二面A区水田面では1.1%、B区では0.9%、一面での各水田面の傾斜率は、A区1.5%、C区0.5%と0.7%で全体的には1.1%、D区0.95%、E区0.8%である。一面A区の傾斜率は、二面A区と同様に、傾斜率が高いといえる。

B区は、地形的には概ね西から東へと緩やかに下っていく。畦の遺存状況にはばらつきがあるが、B区全城が水田域であったことが読み取れる。

調査区としては1つであるが、すべてを通して調

査したのではなく、工程上3回に分けての調査となった。即ち、第1~11・15・16区画で1回、第12~14・17~81区画で1回、第82~104区画で1回である。

各回での水田面の検出標高は、第1~11・15・16区画の場合が22.48~22.74m、第12~14・17~81区画の場合が22.90~23.20m、第82~104区画の場合が23.12~23.28mであった。

B区全体を見渡すと、東側と西側では、畦の検出状況が異なるが、基本的には畦の方位や、水田区画の形状・規模は共通しているといえよう。

南北方向の畦は、北側のC区、その南側E区にみられる畦の通りともほぼ一致していると表現できよう。具体的に、B区の南北方向の畦の方位をみると、B区東半部では、N-0°~3°-Wを主としているが、N-4°-E・N-6°-Eといったように、東



第267図 D区一面水田跡遺構全体図

に振れる例が1例ずつみられる。このような差異は認められるものの、やや西に振れた南北方向に整然と配されているといえる。

これに対して、B区西端部に近い第90～92区画西畦の方位は $N-5^{\circ}-W$ を指し、坪界溝と推定される第40号溝跡の $N-3^{\circ}-W$ に近似する。

東西方向の畦については、B区内では位置的に通っているといえる。東に位置するA区では、東西方向の畦が検出されたのが南側であったため、北側で検出されたC区の水田区画とは、畦の通りが良いか否かを判断することは困難である。遺存状況にも差があるため断定は出来ないものの、概ねA区の大畦以北の水田区画と南北幅が近いといえよう。

水田区画の形状は、縦長・横長といったタイプではなく、大半は正方形に近い長方形を呈している。長辺は4～6m、短辺は2～4m、面積は15～30 $m^2$

規模の水田区画が多数を占めている。

南北方向の畦は、検出された長さには差はあるものの、概ね同様の方位を指している。これに対して、第74～79区画に伴う畦については、東西方向・南北方向が直行するものの、各々 $N-73^{\circ}-W$ 、 $N-25^{\circ}-E$ を指し、東に振れている。

第75区画から、22m程の距離にある第84区画の西畦も、これらの水田区画と近い方位を指している。逆に、僅か4mの位置にある第80区画の西畦は、ほぼ南北を指す大部分の南北畦と同様である。

同じ遺構確認面で検出されているものの、東に振れている一群の水田区画は、時期の異なるものであろうか。

B区南に位置する第101・102・104区画は、A区の大畦以北にみられた、東西に細長い水田区画に近い形状・規模で、東西に長い短冊形を呈している。



第268図 D区一面水田跡区割図

これらの区画は、第7・11号坪型区画跡の坪界溝と推定される第40号溝跡に沿う形となっている。そして、C区内の南に位置する第74号溝跡は、第3・7号坪型区画跡の坪界溝と推定される遺構である。そのため、この溝跡の南に位置する第117・118・120～124・128区画は、B区内の水田と同じ坪型区画(第7号坪型区画跡)に属していると考えられる。そこで、これらの水田区画を眺めてみたい。これらの水田区画の共通点としては、

- 1：坪界溝に沿う位置にある
  - 2：主軸方向は、坪界溝の方位と並行する
  - 3：東西方向に短冊形を呈する
- ということになる。

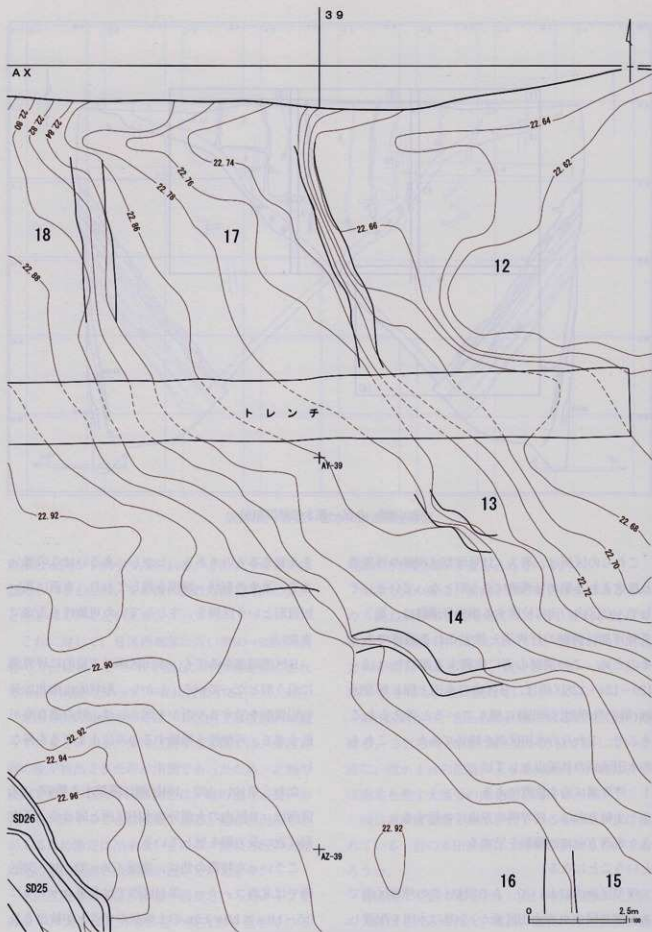
坪型区画内において、ある規格(この坪型区画であればB区中央の水田区画か)を基に水田を配置し、誤差の部分の帳尻を合わせるために短冊形とした感

さえ覚えるものもある。しかし、あるいはこの部分こそ、本来の形状・規模を残しており、東西に長い短冊形という区画を、主としていた可能性も否定できない。

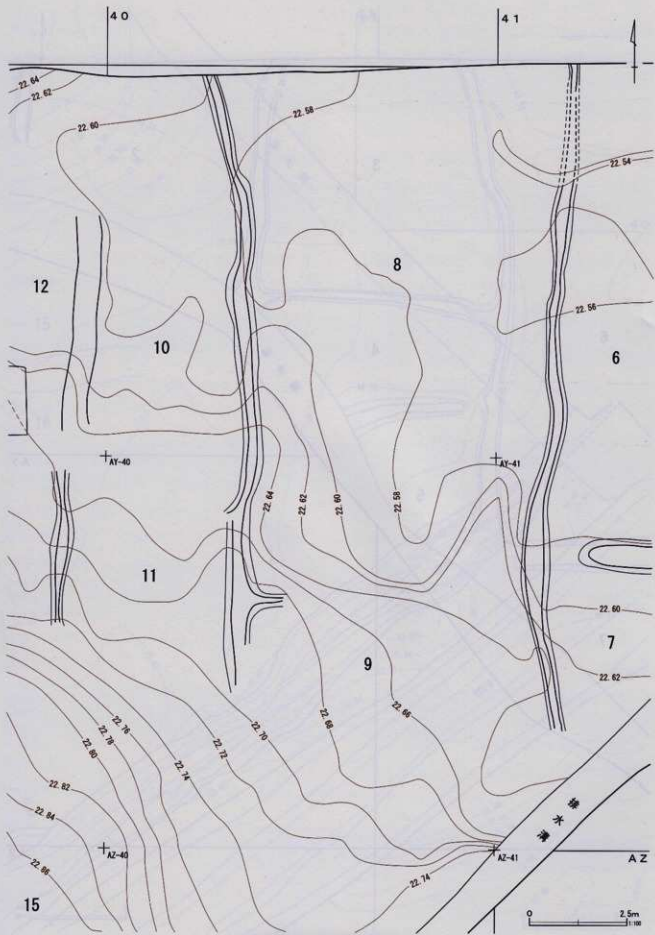
B区西端部をみても、水田区画は方位的に坪界溝に沿う形となっている。しかし、形状的に南北に長い短冊形を呈するか否かを問うには、畦の遺存度が低すぎる。可能性を指摘するのみに止まざるを得ない。

なお、第101・102・104区画に隣接する第97～100区画は、B区内の大部分の水田区画と同じく、正方形に近い長方形を呈している。

こういった特徴の他に、第28・30・32・34・36区画では北西コーナー、第44区画では北東コーナーに0.5～1.0m×1.0～1.5mの土壌状のプランが検出された。調査区全体にわたって、畦と水田耕作土表面と



第269図 D区水田跡 (1)

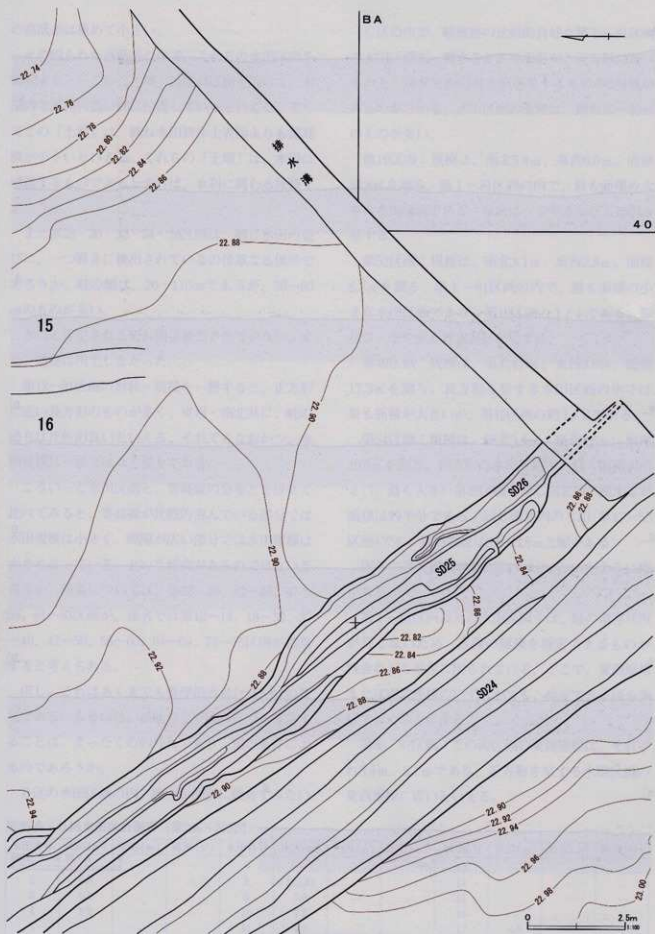


第270图 D区水田跡(2)

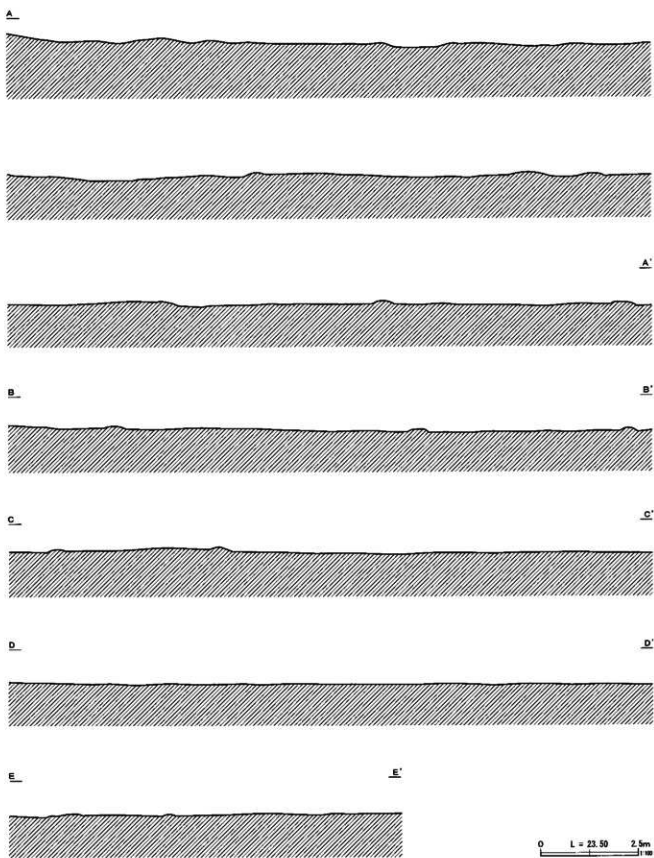




第271图 D区水田跡 (3)



第272图 D区水田跡 (4)



第273図 D区水田跡エレベーション図

の高低差は極めて小さい。

その限られた高低差の中で、これらの水田区画を観察すると、この「土壌」は第44区画を除いて、水田内で標高の高い側に位置しているといえる。そしてこの「土壌」は、概ね水田耕作土表面よりも標高値が小さいといえる。これらの「土壌」は、水田に帰属するものであるとすれば、水利に関わる施設であろうか。

また第28・30・32・34・36区画は、同じ水田の並びに、一つ置きに検出されているのは単なる偶然であろうか。畦の幅は、20～110cmであるが、30～60cmのものが多い。

水口と推定される切れ間は検出されていない。また、遺物は出土しなかった。

第12～81区画の形状・規模を一瞥すると、正方形に近い長方形のものが多く、東西・南北共に、畦の通りは比較的良好といえる。それでもなおかつ、水田規模は一律ではなく様々である。

こういった水田区画と、等高線の分布とを併せて比べてみると、等高線が比較的混んでいる部分では水田規模は小さく、間隔が広い部分では水田規模が大きくなっている、という傾向があるのではないだろうか。前者については、第25・26、42～46、47～55、61～63区画が、後者では第12～14、18～32、37～40、47～50、56～60、64～69、71～75区画が該当すると考えられる。

但し、これはあくまでも整理担当者(=鈴木)の私見である。あるいは、高低差を要因の一つと推定することは、まったく的的外れであり、別の条件によるのであろうか。

B区の水田区画の内、幾つか個別に眺めてみたい。

C区の中で、畦痕跡の比較的良好な第1～81区画の水田区画を一瞥すると、平面形が、正方形に近いものと、南北方向の長方形を呈するものの2種類があるのが分かる。水田区画の面積は、概ね15～30㎡のものが多い。

第19区画：規模は、南北5.8m、東西6.0m、面積34.8㎡を測る。第1～81区画の中で、最も面積の大きな水田区画である。形状は、やや歪んだ正方形を呈する。

第52区画：規模は、南北3.1m、東西2.8m、面積8.7㎡を測る。第1～81区画の中で、最も面積の小さな水田区画であり、第19区画の1/4である。形状は、やや歪んだ正方形を呈する。

第49区画：規模は、南北4.8m、東西3.6m、面積17.3㎡を測る。長方形を呈する水田区画の中では、最も面積が大きいが、第19区画の約1/2である。

第54区画：規模は、南北3.8m、東西2.8m、面積10.6㎡を測る。長方形の水田区画中、最も面積が小さい。最も大きい第49区画と同じ南北列に属するが、面積は約半分である。同じ南北列の水田(第47～55区画)でも、東西規模は2.8～3.6mと幅がある。

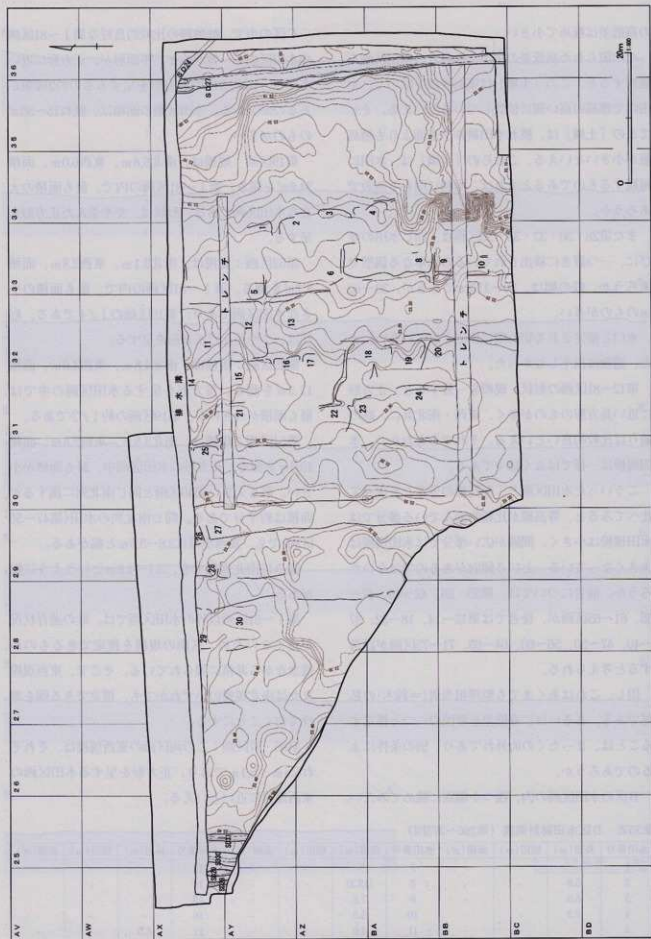
因みに南北規模でも、3.1～4.8mというように幅がある。

第1～81区画以外の水田区画では、畦の遺存状況が良くないため、区画の規模を推定できるものが、残念ながら非常に限られている。そこで、東西規模または南北規模のいずれかでも、推定できる例を挙げておくことにする。

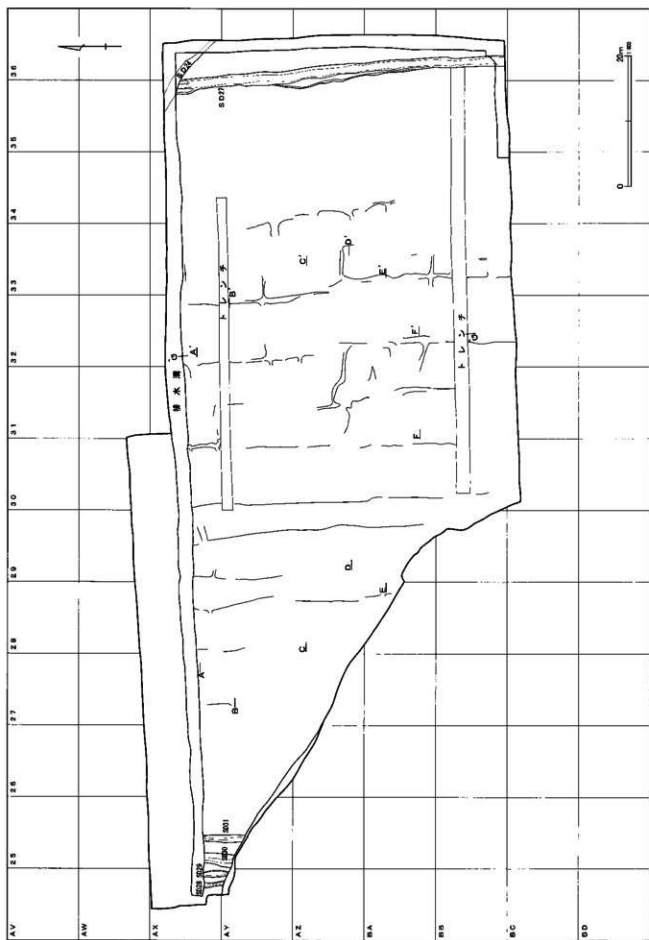
第86・87区画：この両区画の東西規模は、それぞれ5.5m、5.1mであり、正方形を呈する水田区画の東西規模に近いといえる。

第35表 D区水田跡計測表(第266～273区)

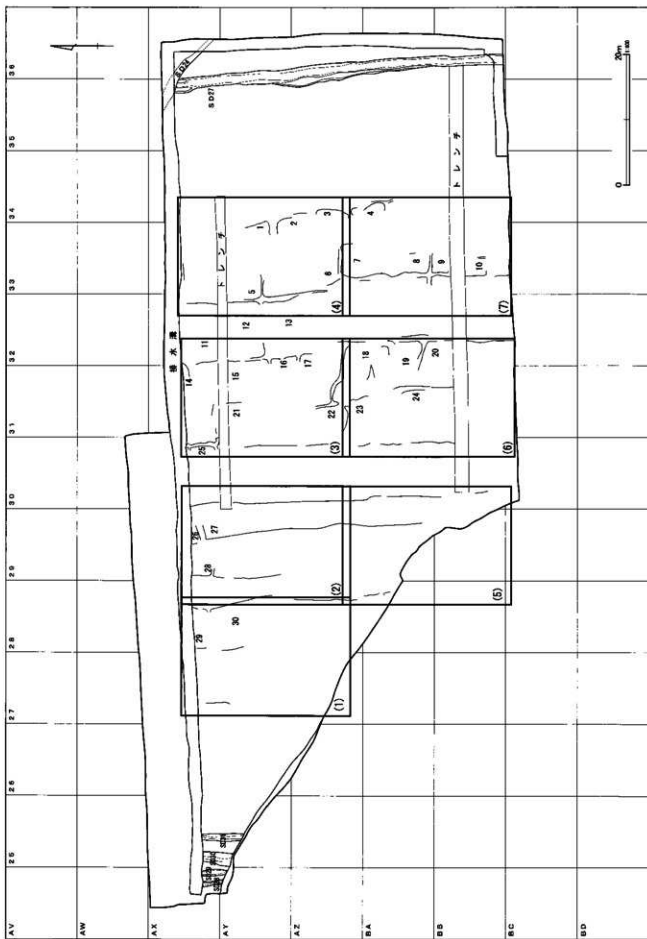
水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(㎡)	水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(㎡)	水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(㎡)
1	-	-	-	7	-	-	-	13	-	-	-
2	5.8	-	-	8	(13.2)	-	-	14	-	-	-
3	6.0	-	-	9	7.6	-	-	15	-	-	-
4	2.2	-	-	10	3.5	-	-	16	-	-	-
5	-	-	-	11	4.0	-	-	17	6.0	-	-
6	5.5	-	-	12	8.5	-	-	18	-	-	-



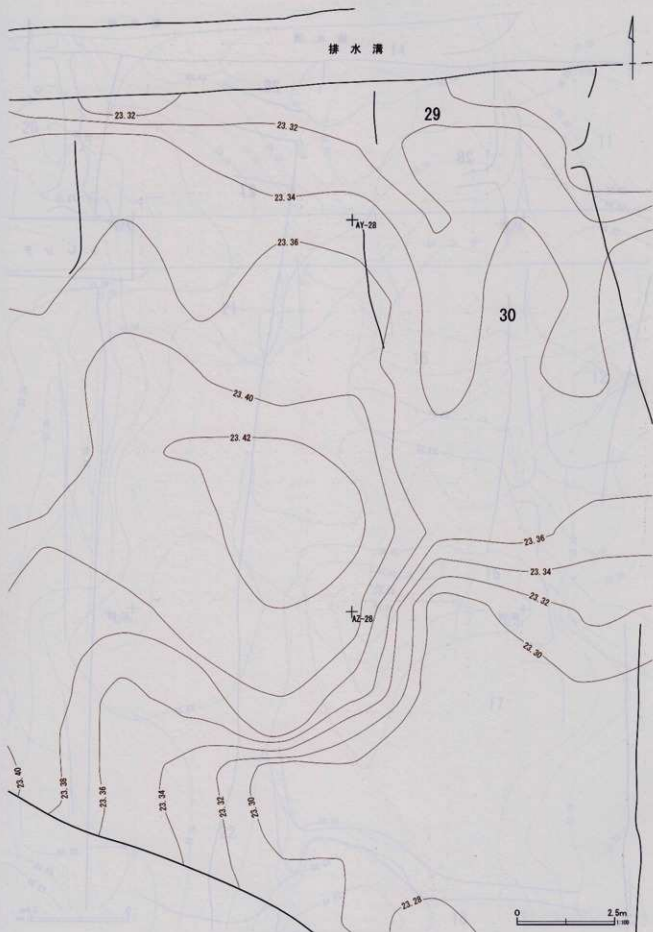
第274図 E区一面水田跡等高線図



第275図 E区一面水田跡遺構全体図

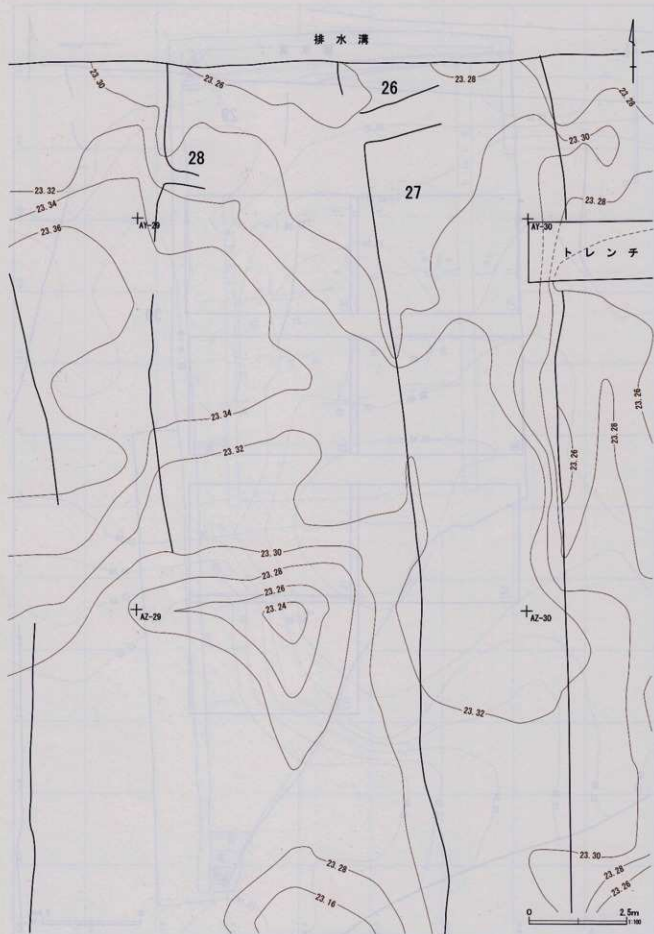


第276図 E区一面水田跡区劃図

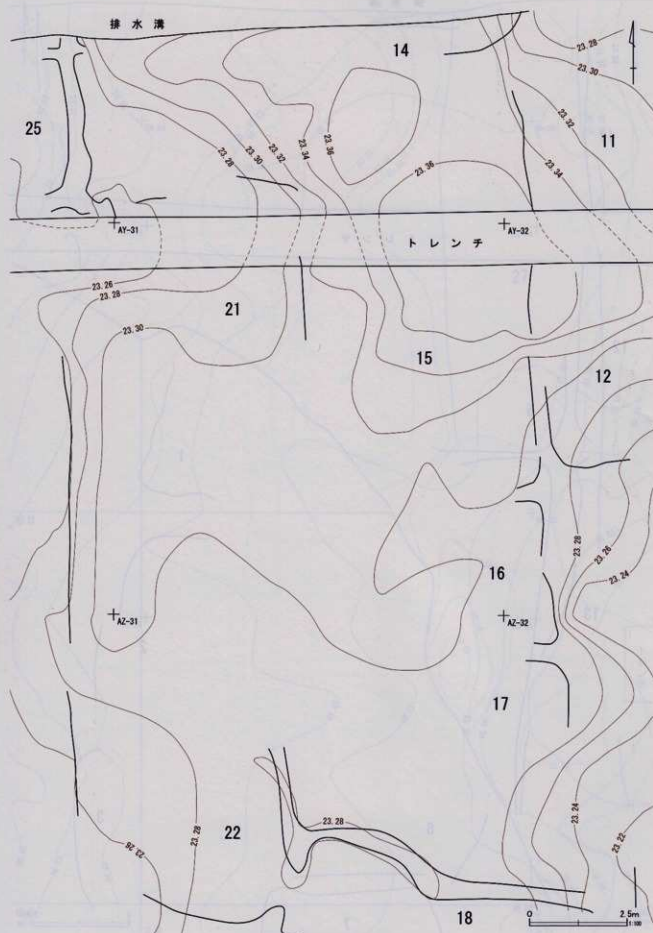


第277图 E 区水田跡 (1)

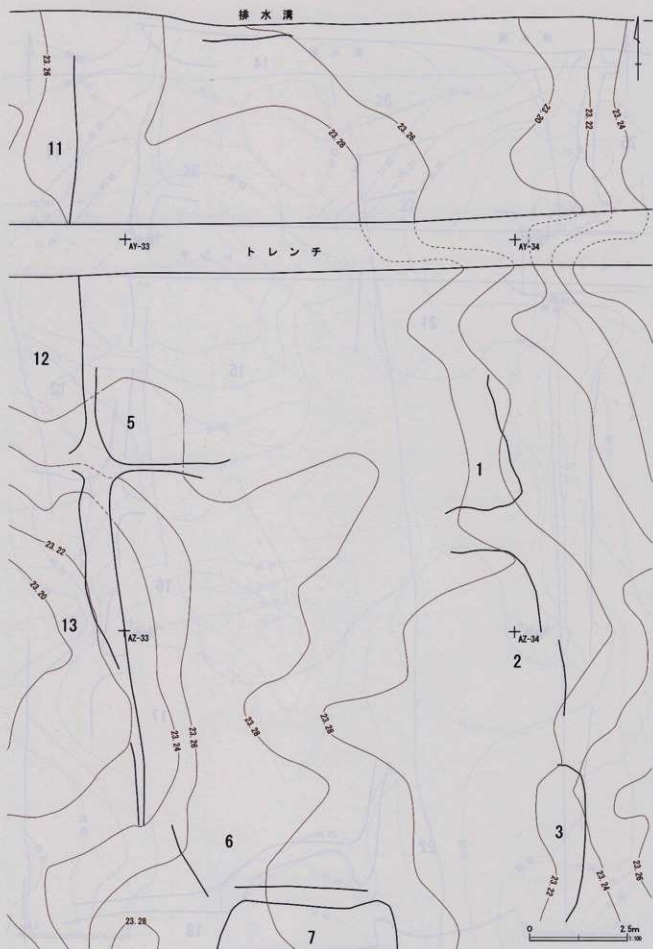




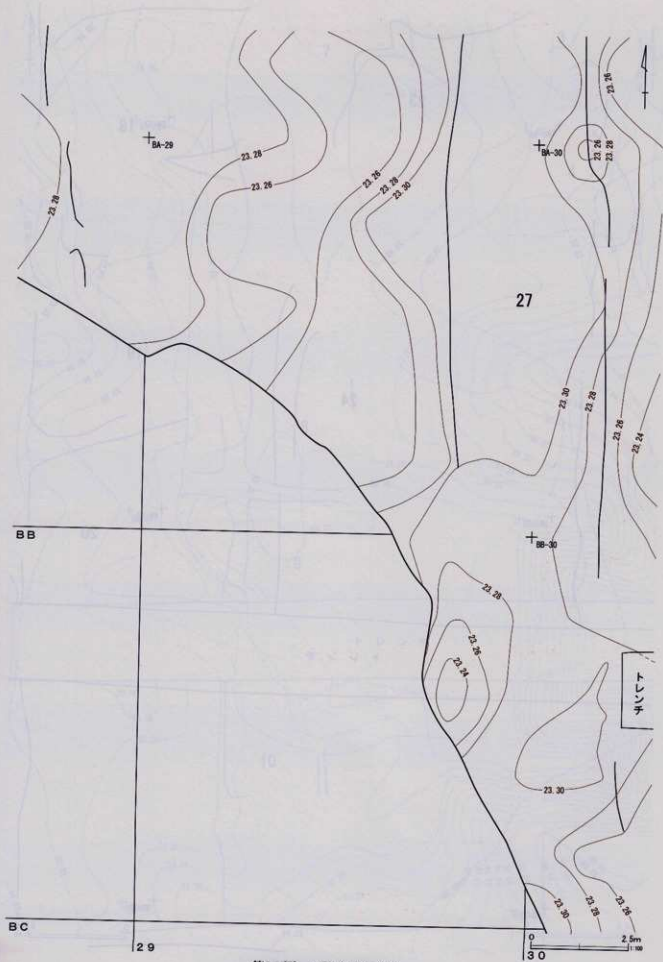
第278図 E区水田跡(2)



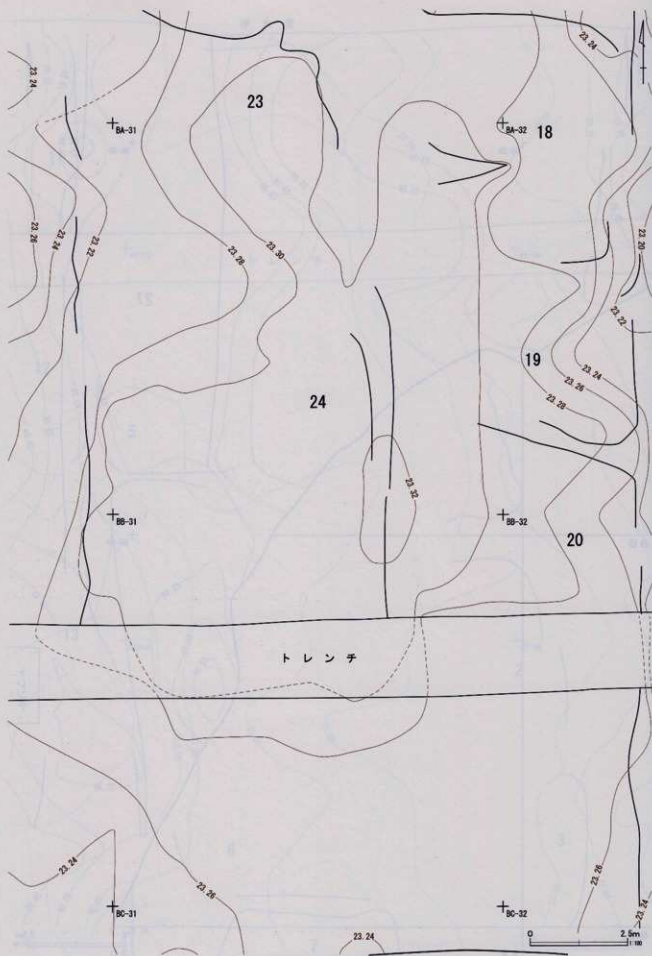
第279図 E区水田跡 (3)



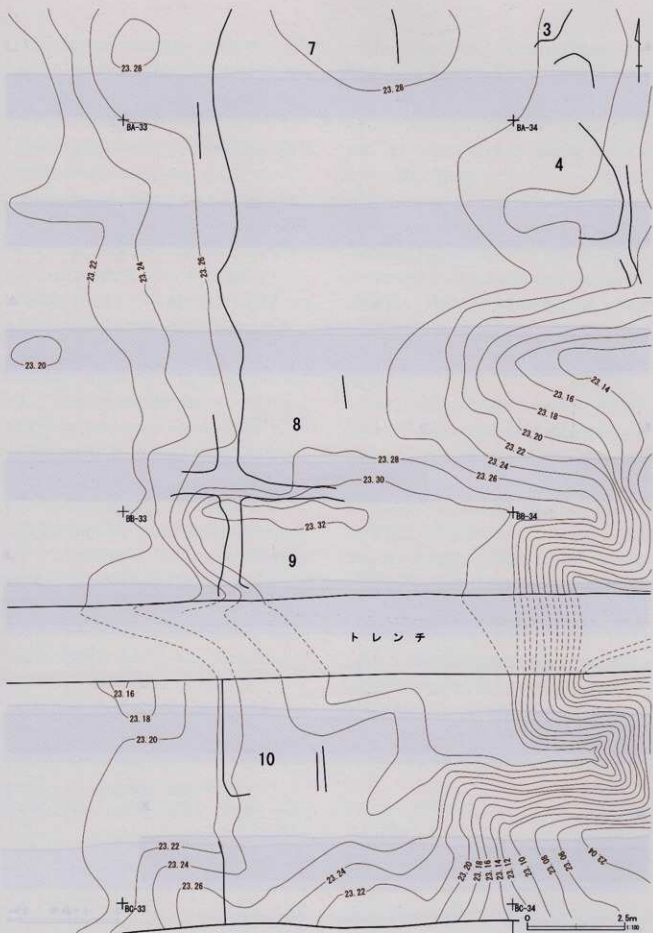
第280図 E区水田跡(4)



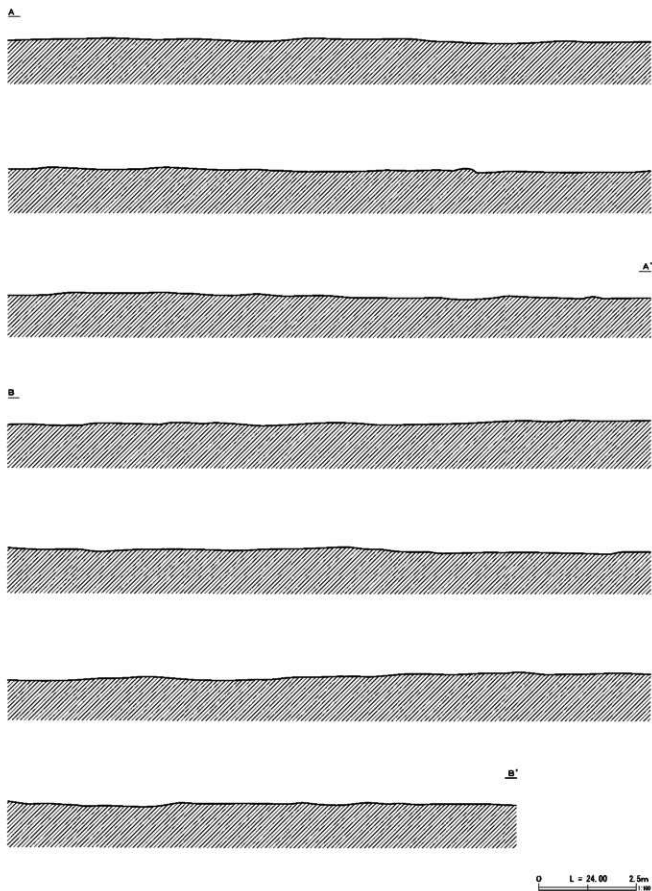
第281図 E区水田跡 (5)



第282図 E区水田跡(6)

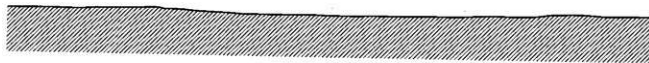


第283团 E区水田跡 (7)



第284図 E区水田跡エレベーション図(1)

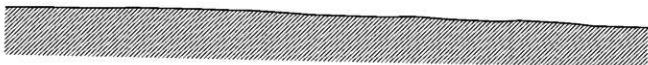
c



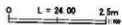
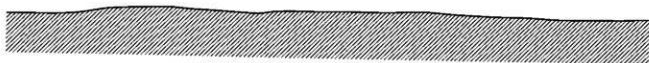
c'



D

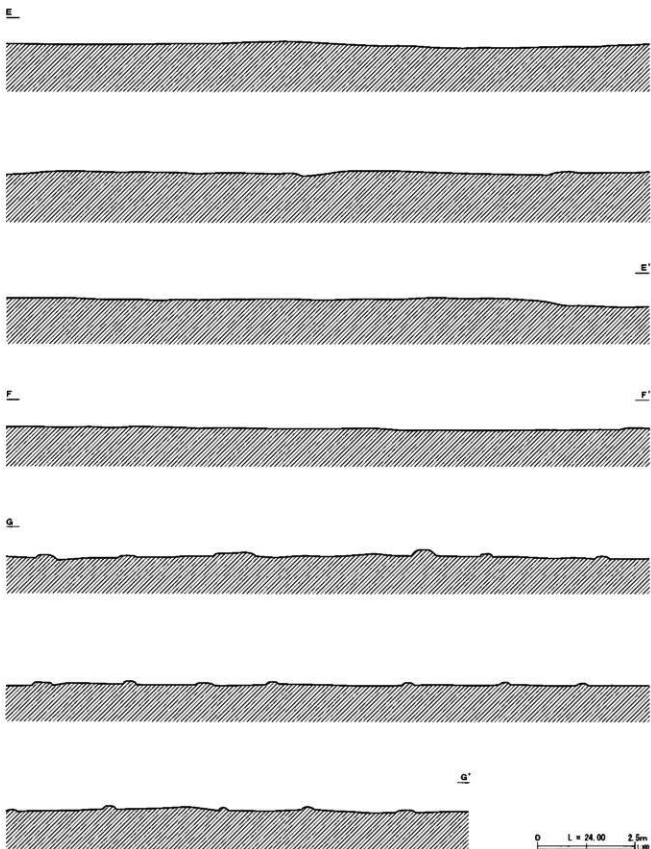


D'



第285図 E区水田跡エレベーション図(2)





第286図 E区水田跡エレベーション図 (3)

第82・89区画：この両区画の東西規模は、共に5.0mであり、こちらも正方形を呈する水田区画の南北規模に近いといえる。

#### C区水田跡(第237～265図)

第17地点北西側で検出された。C区で検出された水田区画は132区画である。

地形的には、概ね北西から南東へと緩やかに下っていく。区画は、地形的には概ね西から東へと緩やかに下っていく。畦の遺存状況にばらつきがあるが、C区全域が水田域であったことが読み取れる。

調査区としては1つであるが、すべてを通して調査したのではなく、工路上C区を2地点に分けての調査となった。即ち、第1～65、117～132区画で一地点、第66～116区画でもう一地点である。

前者での水田面の検出標高は、第1～65、117～132区画の調査時では23.0～23.24mである。ここでの、標高の最高地点と最低地点の距離は約46m、高低差は24cm、傾斜率は0.5%で、これは最も小さな値である。もう一地点での水田面の検出標高は22.92～23.08mである。標高の最高地点から最低地点までの距離は約22m、高低差16cmで、傾斜率は0.7%となり、2番目に小さな数値である。

試みに、この二地点を合わせての算定では、標高の最高地点から最低地点までの距離は58m、高低差は32cm、傾斜率は1.1%であり、中間的な数値となる。

因みに、二面A区水田面では1.1%、B区では0.9%、一面での各水田面の傾斜率は、A区1.5%、B区1.6%、D区0.95%、E区0.8%である。

第36表 E区水田跡計測表(第274～286図)

水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(m <sup>2</sup> )	水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(m <sup>2</sup> )	水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(m <sup>2</sup> )
1	-	-	-	11	(8.6)	(4.6)	(39.6)	21	-	-	-
2	-	-	-	12	8.2	-	-	22	(5.1)	-	-
3	(4.8)	-	-	13	(4.9)	-	-	23	(6.2)	-	-
4	(5.0)	-	-	14	(10.2)	-	-	24	(3.0)	-	-
5	-	-	-	15	(5.6)	-	-	25	(8.0)	-	-
6	(11.0)	-	-	16	(3.6)	-	-	26	-	-	-
7	(4.6)	-	-	17	(6.6)	(4.5)	(29.7)	27	(5.0)	-	-
8	(2.5)	-	-	18	(6.2)	-	-	28	(4.3)	-	-
9	(2.4)	-	-	19	(6.2)	-	-	29	(5.4)	-	-
10	(4.7)	-	-	20	(6.5)	-	-	30	(6.3)	-	-

AD～AG-34グリッドを南北に走る第70・71号溝跡と、AK-23～32グリッドを東西に走る第74号溝跡は、共に坪界溝であると推定されることから、C区は3つの坪型区画(第2・3・7坪型区画跡)に跨っているといえる。第74号溝跡以南の水田区画については、B区で扱ったため、ここではそれ以外を対象とする。

第66～116区画での検出状況は明瞭であるが、その他の部分では不明瞭であった。それでも、C区全体が水田域であったことは読み取ることができる。他の調査区と同様に、東西方向の畦よりも、南北方向の畦の方が、畦の痕跡が良くみえるという状況であった。そこで、まず東西方向の畦から眺めて行きたいと思う。

東西畦は、途中途切れはするものの、比較的長く検出されているため、畦の方位を推測することができる。

第10・13・14・17区画の東畦、第21～24区画の西畦、第36・39・41区画の東畦、第40・46・47区画の西畦の方位は、いずれもN-4°-Wを指し、南北方向の坪界溝である第70号溝跡の方位N-3°-Wに一致する。西の坪界溝である第74号溝跡(N-8°-W)と、これに沿う第60区画の西畦(N-15°-W)の方位には開きがある。

続いて、比較的明瞭に畦畔が確認できた、第66～116区画(第253・254・259・260図)を眺めてみたい。第76～80区画、第86～91区画、第99～105区画、第106～112区画のそれぞれ西畦は、いずれもN-3°-Eの方位を指しており、僅かに東に振れてい

る。先程みた水田区画の方位 $N-4^{\circ}-W$ とは、7度の開きがあることになる。これは、畦の遺存距離が短いため、畦の湾曲部分を計測している結果となっているのであろうか。畦の遺存状況の違いから生じる、誤差の範囲内に含まれることであろうか。

この三角形を呈する調査箇所では、水田区画の形状・規模を把握することができる。水田区画の規模は、南北方向は2m前後、東西方向は3.5～6m前後、面積 $10\text{m}^2$ 弱で、東西方向に長い短冊形のものが多い。しかし、第75・92～98区画といった南北の並びと、これらの西に隣接する第99～105区画の並びは、周囲の短冊形水田区画を二等分したかのような形状・規模である。

具体的規模は、2m前後 $\times$ 1.5m、面積 $3\text{m}^2$ 前後である。このことは、東西方向の坪界溝(第74号溝跡)の南に位置する、第126・127区画と第129区画(あるいは第130区画も)についても同様で、しかも南北の並びも同じである。

この部分の等高線(第253・254・259・260図)を観察すると、細分された水田区画の部分では、南に開く微細な谷状地形がみられる。今回検出された水田区画は、土圧で押し潰された状態であり、当時は現在より高低差があったと推定される。この小さな谷地形での標高的な高所と低所との距離は約5m、標高差は8cmであり、傾斜率は1.6%となる。

水田の水回りにおいて、適正な傾斜率がどの程度の数値となるかについては、水田やその周囲の立地・地形・水田城の規模、さらには河川などの水源からの距離、用水としての糸里溝との位置関係等々、多くの条件から導き出されるべきものであろう。ここでは、到底そこまで扱えるものではない。

局地的な谷地形での傾斜率1.6%が大きいものなのか否か判断できない。しかし、この小さな谷地形による傾斜を緩和するために、谷頭の部分から谷の中央部分を、短冊形区画を二分割していると考えられる。

この一画をみる限り、微地形的な制約がない部分

では、東西に長い短冊形区画で水田が配置されたと考えられる。しかし、これがこの坪型区画全体にいいのか否かについては、残念ながら不明である。

次に、南北に走る坪界溝(第70号溝跡)を挟んで、東側の坪型区画の水田跡を眺めてみる。C区内で検出された水田跡は9区画である。第8・9区画は、後代の第72号溝跡に切られており、東畦のみの検出である。ここでは東西方向の畦よりは、南北方向の畦の方が、検出度が高いといえよう。

第4・6区画の西畦、第1～3・5区画の西畦の方位は $N-4^{\circ}-W$ であり、これは坪界溝の $N-3^{\circ}-W$ 、そして既にもみたC区における多くの畦の方位( $N-4^{\circ}-W$ )と一致している。検出された畦の痕跡をみる限りでは、東西に長い短冊形とは思われないが、この部分についても水田の形状は判断できない。

畦の幅は、30～70cmであるが、40～50cmのものが多い。

なお、この坪型区画に相当するF区南部分では、東西に走る坪界溝(第133～136号溝跡)が確認されているが、水田跡は検出されなかった。C区では、凶化できる遺物が2点出土した。

C区の水田区画の内、幾つか個別に眺めてみたい。第83区画：規模は南北1.4m、東西3.8m、面積 $5.3\text{m}^2$ 。遺存状況の良い第66～132区画の中で、典型的な形状であるが、面積的には小振りな部類に入るものである。

第85区画：第83区画とは、同じ南北列に属する水田区画である。規模は南北2.2m、東西4.8m、面積 $10.6\text{m}^2$ 。これも第66～132区画の中で、典型的な形状であるといえるが、面積的には、第83区画の2倍である。西畦がやや東に振れている。

第111区画：規模は南北1.8m、東西5.8m、面積 $10.4\text{m}^2$ 。これも第66～132区画の中で、典型的な形状であるといえるが、形状的に細長い部類に入る水田区画である。面積的には、第85区画にほぼ等しいといえる。

第93区画：規模は南北2.2m、東西2.0m、面積4.4㎡。第83区画よりも2割ほど面積が少ない。第85・111区画には、1/2にも満たない小規模の水田区画である。形状も、正方形に近い長方形を呈する。この小規格については、地形の高低差に求めたのは既に述べたとおりである。この条件下における水田区画の内では、面積が最も大きなものといえる。

第96区画：第93区画とは、同じ南北列に属する水田区画である。規模は南北1.2m、東西1.6m、面積1.9㎡。第83区画の1/2、第85・111区画の1/5にも満たない。さらに、同じ条件下で小規格となったと考えられる第93区画の1/2にも満たない。

地形の高低差という制約の中で、小規格となった水田区画の内でも最小の部類に入るものである。形状は、正方形に近い長方形を呈する。

第126区画：第93・96区画とは、同じ南北列であるが、東西に走る坪界溝の南に位置しており、別の坪界区画に属する水田区画である。規模は南北1.6m、東西1.5m、面積2.4㎡。第83区画の1/2、第85・111区画の1/5にも満たない。さらに、同じ条件下で小規格となったと考えられる第96区画より僅かに大きいものの、第93区画の1/2強という面積である。形状は、ほぼ正方形を呈する。

第128区画：第126区画と同じく、東西に走る坪界溝の南に位置しており、別の坪界区画に属する水田区画である。規模は南北1.6m、東西4.6m、面積7.4㎡である。遺存状況の良い第66～132区画の中で、典型的な形状であるが、面積的には中間的な部類に入るものである。

第1～65区画は畦の遺存度が悪く、規模を算定できないものが多い。その中で、規模を推定できるものを挙げておく。

第23区画：規模は南北(3.0)m、東西(7.6)m、面積(22.8)㎡。東西に長い短冊形を呈する。

第34区画：規模は南北4.8m、東西(7.6)mで、面積は(36.5)㎡となる。しかし、東側にある第106～116区画と比べてみると、この水田区画は4区画分

であり、内側の畦が失われている可能性が考えられる。

第44区画：規模は南北(1.8)m、東西(5.6)m、面積(10.1)㎡。形状は、東西に長い短冊形を呈する。形状・規模共に、東側に位置する短冊形水田規格と共通している。

第46区画：規模は南北(2.8)m、東西(7.2)m、面積(20.2)㎡。形状は、東西に長い短冊形を呈するが、形状・規模共に、東側に位置する短冊形水田規格のほぼ2倍である。あるいは水田2規格分であろうか。

第47区画：第46区画の南隣に位置する。規模は南北(3.2)m、東西(6.2)m、面積(19.8)㎡。東西に長い短冊形を呈するが、形状・規模共に、東側に位置する短冊形水田規格のほぼ2倍である。これも水田2規格分であろうか。

#### D区水田跡 (第266～273区)

第17地点南東側で検出された。D区で検出された水田区画は18区画である。D区全域が水田域であったことが読み取れる。

D区は、地形的にC区からA区、さらに第18地点方向へと下っていく谷地形の、南側斜面部に相当している。そのためD区内の地形は、南西から北東へと下っていく形となる。

D区の水田跡は、A区の大畦以南の水田跡と同じ坪型区画に属するといえよう。

水田面の検出標高は、22.54～22.92mである。標高の最高所から最低所までの距離は約40m、高低差38cm、全体的な傾斜率は0.95%である。因みに、二面A区水田面では1.1%、B区では0.9%、一面での各水田面の傾斜率は、A区1.5%、C区0.5%と0.7%で全体的には1.1%、E区0.8%である。一面E区の傾斜率は、数値的には小さめである。

D区においても畦の遺存状況は悪いが、僅かな高低差ではあるものの、畦の上場・下場を表現できる部分もあった。検出された畦は、南北方向が主なものである。その南北方向の畦の方位は、第1・8・9区画の西畦がN-4°-W、第2・4・5・17区

画の西畦がN-6°-W、12区画の西畦がN-16°-W、第6・7区画の西畦がN-2°-E、第10・11区画の西畦がN-5°-E等である。

水田区画の形状・規模を留めている可能性が高いのは、第4区画のみである。南東コーナー部分が失われているが、概略を知ることが可能である。規模は東西5.6m、南北2.2m、面積12.3㎡で、平面形は東西に長い短冊形を呈する。畦幅は30～50cmである。南西コーナー付近で畦が途切れているが、水口の切れ間であろうか。

この水田区画の形状・規模は、C区で検出された短冊形の水田跡と共通している。C・D区的位置する坪型区画の水田は、この形状・規模を基本としたものであろうか。畦の幅は、30～50cmであるが、40cm前後のものが多い。

水口を推定させるものは検出されていない。また、遺物は出土しなかった。

D区の水田区画の内、幾つか個別に眺めてみたい。

第83区画：規模は南北1.4m、東西3.8m、面積5.3㎡。遺存状況の良い第66～132区画の中で、典型的な形状であるが、面積的には小振りな部類に入るのである。

第2・3・6・8・9・11区画：この6区画は、南北規模については推し測りようもないが、東西規模を推定できるものである。規模は番号順に、5.8m、4.4～5.8m、(5.1)～5.4m、6.9～8.7m、7.6m、4.0mを測る。

#### E区水田跡(第274～286区)

第17地点南西側で検出された。E区で検出された水田区画は30区画である。E区全域が水田域であったことが読み取れる。

E区は地形的な概要としては、北西・北東から、中央部南に向かって下っていく谷地形といえるであろうか。そのため、D区内の地形は、南西から北東

へと下っていく形となる。

水田面の検出標高は、23.16～23.42mで、高低差は26cmである。西側での、最高所から最低所までの距離は約16m、高低差は26cm、傾斜率は1.6%である。東側での、最高地点から最低地点までの距離は約24m、高低差は20cm、傾斜率は0.8%である。

因みに、二面A区水田面では1.1%、B区では0.9%、一面での各水田面の傾斜率は、A区1.5%、C区0.5%と0.7%で全体的には1.1%、D区0.8%である。一面E区の傾斜率は、数値的には小さめである。

畦の遺存度は低く、僅かに検出できた畦の痕跡は、他の調査区と同じように、南北方向がほとんどである。南北畦の方位は、第12～14区画西畦・第24区画東畦～第25区画西畦・第24区画西畦がN-0°-W、第27区画西畦がN-3°-W、第12・13区画西畦・第16～18区画東畦がN-5°-W等がある。

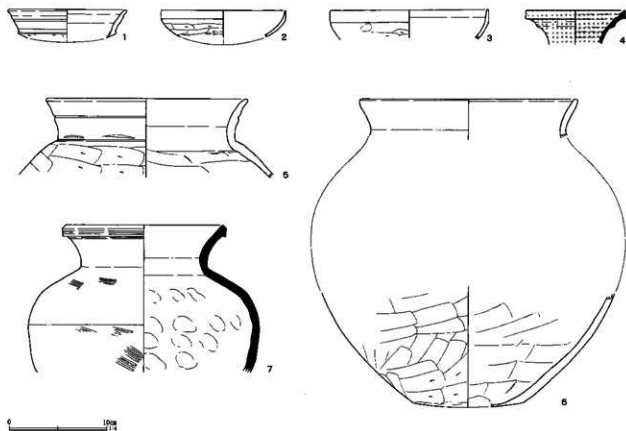
東西方向の畦は、南北畦との交点で検出できたものが多い。第10・11・17・24区画で、僅かに南北規模を推定することができる。その規模はそれぞれ(4.7)m、(4.6)m、(4.5)m、(3.0)mの可能性を考えたい。東西は7～9m程であろうか。

畦の幅は、20～60cmであるが、50cm前後のものが多い。

E区の水田区画の畦痕跡をみる限り、東西規模は3.6～11mであるが、6m前後のものが多い。しかし、この数値が、各水田区画の東西規模を表しているとは明言できない。

第10・17・20・24区画：この4区画は、東西規模については推し測りようもないが、南北規模を推定できるものである。規模は番号順に、4.7m、4.5m、3.7m、2.8mを測る。この南北規模から推すと、水田区画の形状は、東西に長い短冊形を呈するものであろうか。

## 9. B区南側包含層・グリッド・表面採集遺物



第287図 B区南側包含層出土遺物

第37表 B区南側包含層出土遺物観察表 (第287図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師環	(11.8)	2.9		A D E	Ⅱ	暗褐色	25	
2	土師環	(12.5)	2.8		D E H	I	橙褐色	20	風化している
3	土師環	(16.0)	3.0		D E H K	Ⅲ	淡褐色	10	
4	須恵長頸瓶	(10.0)	3.5		H L	I	灰色	25	泉投または湖西産
5	土師壺	(20.3)	8.0		A D E	Ⅱ	淡橙褐色	70	
6	土師壺	(21.7)	(31.5)	(11.2)	A H J	Ⅱ	黄灰白色	35	口縁と底部接合しない 黒皮あり
7	須恵壺	(16.0)	15.2		E F	I	明灰色	20	南比企産

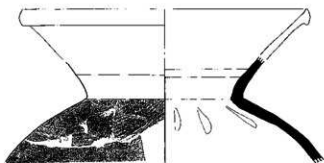
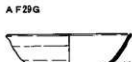
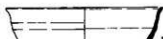
AD32G



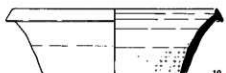
0 5cm



AD33G



AF34G



19



AF41G



AF40G



1~4 AD32G  
5~6 AD33G  
7~9 AD34G

10~11 AE35G  
12~13 AE40G  
14 AF29G

15~18 AF32G  
19 AF34G  
20 AF35G  
21 AF40G

22 AF41G

第288図 グリッド・表採出土遺物 (1)

0 10cm

A G 26 G



23



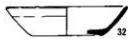
A G 41 G



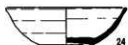
26



A G 43 G



32



24



27



A G 40 G



30

A H 29 G



35



25



28



33

A G 33 G



29



34

23~28 A G 26 G

31 A G 41 G

29 A G 33 G

32~34 A G 43 G

30 A G 40 G

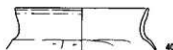
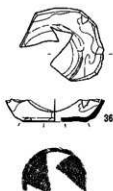
35 A H 29 G



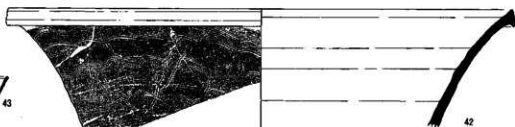
第289図 グリッド・表採出土遺物 (2)



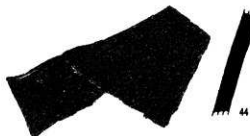
AH42G



A 142G



A 144G



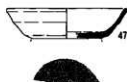
A L44G



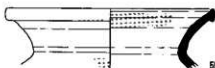
A J43G



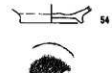
A K45G



A L45G



A S27G



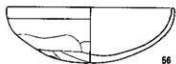
36~42 AH42G  
43・44 A 142G  
45 A 144G  
46 A J43G

47 AK45G  
48~52 AL44G  
53 AL45G  
54・55 AS27G

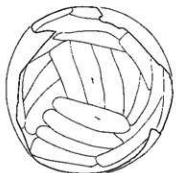


第290図 グリッド・表採出土遺物 (3)

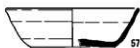
A J 24 G



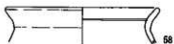
56



A T 27 G



57



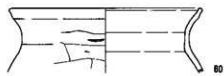
58



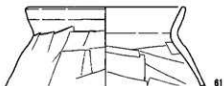
63



59



60



61

A U 27 G



64



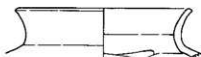
66



68



62



表裏



69



70

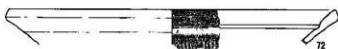


71

A X 32 G



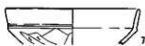
67



72



73



74

56 A J 24 G

57~63 A T 27 G

64~66 A U 27 G

67 A X 32 G

68~75 表裏



75



第291図 グリッド・表探出土遺物 (4)

第38表 グリッド・表採出土遺物観察表 (第288・289・290図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	須恵環	(11.4)	4.1	(5.8)	F	I	青灰色	45	A D - 32 G 南比企産 底部B0手法	
2	土師環	(14.0)	4.1	(9.6)	DEH	II	褐色	25	A D - 32 G 体部+底部ヘラケズリ 口縁部風化	
3	平瓦				EF	II	灰色		A D - 32 G 西面木目瓦葺17本 葺材20本/3cm 凸面叩き	
4	礫石						乳灰色		A D - 32 G 長さ5.2cm 幅2.1cm 厚さ1.8cm 重量31.2g	
5	須恵環	(12.8)	3.9	(6.2)	E I	II	明灰色	30	A D - 33 G 木野産 底部B0手法 底部厚減	
6	須恵壺		1.8	(7.0)	EF	II	灰色	40	A D - 33 G 南比企産 底部B3b手法	
7	須恵環		2.4	6.0	EF	II	淡青灰色	70	A D - 34 G 南比企産 底部B0手法 底部外面に墨痕	
8	須恵壺		10.9		EF	I	暗灰色	35	A D - 34 G 南比企産 胴部外面平行叩き	
9	須恵壺		11.5	(13.0)	FH	II	黒灰色	20	A D - 34 G 南比企産 外面平行叩き後ナデ	
10	須恵環		11.8	3.7	6.8	CE F	II	暗灰色	70	A E - 35 G 一括 南比企産 底部B3a手法
11	須恵蓋	(12.4)	3.1		EF	II	灰色	30	A E - 35 G 一括 南比企産	
12	須恵環	(12.2)	3.4	6.5	EF	II	暗灰色	75	A E - 40 G 南比企産 底部B0手法	
13	須恵壺	(16.0)	3.8		EF	II	暗灰色	5	A E - 40 G 南比企産	
14	須恵環	(12.6)	3.6		EF	II	明灰色	30	A F - 29 G 南比企産 軽量感がある	
15	須恵環	(13.3)	3.0		EF	II	灰色	15	A F - 32 G 南比企産	
16	須恵環		2.3	(6.8)	EF	II	明灰色	20	A F - 32 G 南比企産 底部B3b手法	
17	須恵蓋		1.7		CF	I	暗灰色	45	A F - 32 G No1 南比企産	
18	土師台付甕		3.7		BDH	II	橙褐色	80	A F - 32 G No2 内面は風化し鋳物粒が浮き出ている	
19	須恵壺	(20.8)	7.2		E I	II	灰色	8	A F - 34 G 木野産 内外面に部分的に自然釉	
20	須恵蓋	(17.2)	3.1		EF	II	明灰色	45	A F - 35 G 南比企産	
21	須恵環	(12.4)	3.4		EF	II	青灰色	10	A F - 40 G 南比企産	
22	須恵環	(11.4)	3.8	6.5	EF	II	暗灰色	45	A F - 41 G No1 南比企産 底部B3b手法	
23	須恵環	12.2	3.4	6.1	C I	II	暗灰色	80	A G - 26 G 南比企産 底部B0手法	
24	須恵環	(12.2)	3.9	5.6	CF	II	灰色	30	A G - 26 G 南比企産 底部B0手法	
25	須恵環	(11.4)	4.1	6.0	EF	II	明灰色	30	A G - 26 G 南比企産 底部B0手法	
26	須恵環		11.9	3.3	6.0	EF	II	50	A G - 26 G 南比企産 底部B0手法 体部外面に墨書「煎」?	
27	須恵環		0.8	6.0	EF	I	暗灰色	80	A G - 26 G 南比企産 底部B0手法	
28	土師壺	(18.0)	5.0		ADE	I	橙黄色	15	A G - 26 G	
29	須恵壺		2.0	14.3	EF	I	暗紫色	80	A G - 33 G No1 南比企産	
30	須恵蓋	(17.4)	3.6		E I	II	明灰色	30	A G - 40 G 木野産 風化青しい	
31	須恵環		11.7	3.6	6.7	I	灰色	100	A G - 41 G 木野産 底部B3a手法 器面が風化	
32	須恵環	(12.4)	3.0	7.1	E I	II	灰色	20	A G - 43 G 木野産 底部B0手法 風化	
33	土師壺	(20.0)	5.1		DEH	II	褐色	15	A G - 43 G	
34	須恵壺				C	II	灰色		A G - 43 G 産地不明 外面には砂粒が付着 内面は褐色	
35	須恵高台埴		1.7	(6.6)	EF	II	暗灰色	10	A H - 29 G 南比企産 高台内径(接合面径5.6cm)	
36	須恵環		2.3	6.8	E	II	暗灰色	40	A H - 42 G 群馬産か 底部B3b手法 転用例か	
37	土師環	(12.2)	3.2		DEH	I	褐色	25	A H - 42 G	
38	須恵環		2.0	(5.6)	EF	II	暗灰色	30	A H - 42 G 南比企産 底部B0手法	
39	ロクロ土師環		3.3	(7.0)	BDEG	II	灰色	15	A H - 42 G 風化進む	
40	小型台付甕	(13.5)	4.3		ADE	II	明褐色	25	A H - 42 G	
41	灰輪長頸瓶		3.8	12.9	H	I	明灰色	90	A H - 42 G 東瀛産か 胎土精選	
42	須恵壺	(51.6)	12.2		CE F	II	暗灰色	15	A H - 42 G No2 南比企産 10本単位の纏結波状文3段	
43	須恵環	(12.2)	3.2		EF	II	明灰色	15	A I - 42 G 南比企産 軽量感あり	
44	須恵壺				C	I	暗紫色		A I - 42 G No1・2 群馬産か	
45	須恵環		0.6	(6.8)	EF	II	灰色	25	A I - 44 G 南比企産 底部B0手法 底部に墨書「見」	
46	須恵環		2.0	(6.0)	E I	II	灰褐色	35	A J - 43 G 木野産 底部B0手法か 底部厚減	
47	須恵環	(13.0)	3.1	(7.0)	FF	II	灰色	20	A K - 45 G 南比企産 底部B3a手法	
48	須恵環		0.9	5.4	EF	II	灰色	50	A L - 44 G 南比企産 底部B0手法 墨書「全」か	
49	須恵環		2.0	(6.0)	F	I	紫-青灰色	35	A L - 44 G 南比企産 底部B0手法	
50	ロクロ土師高台埴		3.0	(7.0)	DEH	II	橙褐色	80	A L - 44 G P11 内面風化 外面手持ちヘラケズリ	
51	須恵高台埴		2.5	(8.6)	E I J	II	明灰色	35	A L - 44 G 木野産 底部回転糸切り	
52	須恵壺				E I J	II	灰褐色		A L - 44 G 群馬(木野)産か 内面同心円文当具葺十カキ目	
53	須恵環		11.8	3.5	6.7	EFH	II	淡青灰色	100	A L - 45 G P11 No1 南比企産 底部B0手法 墨書「煎」
54	ロクロ土師高台埴		1.8	(6.2)	ABDEH	II	淡橙褐色	35	A S - 27 G 摩滅しており底部調整不明	
55	須恵壺	(21.0)	6.3		EF	I	暗灰色	25	A S - 27 G 南比企産 自然釉付着	

第39表 グリッド・表採出土遺物観察表 (第291図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
56	土師環(埴)	17.0	5.7		ADE	Ⅱ	橙褐色	70	AJ-24G No1 口縁部外側に一部黒斑あり
57	須恵環	(13.6)	4.0	(8.4)	EF	Ⅱ	明灰色	40	AT-27G 南比企産 底部B3a手法
58	土師甕	(15.3)	3.8		AEFH	I	赤褐色	30	AT-27G 器面は風化していて調整痕不明瞭
59	土師甕	(20.0)	7.2		DE	I	淡褐色	10	AT-27G 器面に新物粒が浮出す
60	土師甕	(19.2)	6.7		AEG	I	棕色	10	AT-27G 器面やや風化
61	土師甕	(16.4)	8.4		AGHN	Ⅱ	淡褐色	40	AT-27G
62	土師甕	(18.8)	9.8		ADH	Ⅱ	黄灰色	20	AT-27G
63	土師甕		3.4	6.7	DH	Ⅱ	黄灰白色	50	AT-27G
64	土師小型甕	(14.6)	3.7		BD	I	黒灰色	35	AU-27G
65	土師甕	(17.4)	5.1		AC	Ⅱ	淡褐色	30	AU-27G
66	土師甕		3.7	(6.6)	AE	Ⅱ	暗橙褐色	15	AU-27G
67	須恵甕	(23.2)	4.0		EI	I	暗灰色	5	AX-32G No15 木野産
68	磁器甕				M	I	白色		表採 南西照明灯一松原塚
69	須恵環		1.2	6.5	EF	Ⅱ	灰色	90	表採 南比企産 底部B0手法 墨書「綱」 内面摩滅
70	須恵高台環		1.8	(6.4)	F	Ⅱ	灰色	60	表採 C区 南比企産 底部B0手法
71	陶器中埴		3.0	(3.6)	M	I	30	表採 上幸立合・緑寿園東 京焼風	
72	常滑摺鉢	(33.4)	3.6		EF	Ⅱ	淡褐色	5	表採 A区 常滑産? 胎土の色調淡褐色
73	須恵甕		19.2		EF	Ⅱ	明灰色		表採 河川跡 南比企産
74	土師環	(13.5)	3.7		AD	I	棕色	10	表採 河川跡
75	陶器中皿	(16.8)	4.9	(5.8)	M	Ⅱ	黄白色	10	表採 C区大溝 肥前系京焼風 器形折縁形



第292図 グリッド出土鉄製品

第292図76は、鑿(タガネ)状鉄製品である。扇端部を欠損しているが、遺存度は比較的良好である。

現存長24.2cm、最大幅2.8cm、最大厚1.2cmを測る。残存率95%。古代以降の遺物と思われる。

第172図8は、F区河川跡から出土した横櫛である。現存横幅6.4cm、推定横幅11.0cm、長さ5.0cm、厚さ1.2cm、櫛目最大長3.6cmを測る。

蒲鉾型を呈する。櫛目は残存で41本。櫛歯先端は尖るが、頭部は平坦に面取りされ、柳葉状にはならない。持ち手の部分に瓜葉文状の透かしが設けられている。櫛目の切り込み線は、弧状を呈す。表面に黒漆の付着が認められる。

## V 発見された遺構と遺物

### 第18地点

試掘調査の結果、第17・18地点では、水田跡の存在が想定されたため、発掘調査に先立って土壌および土性層位の確認を行った。調査範囲が広域にわたったことから、同一の堆積状態ではなかったが、攪乱の少ない全域に耕作による攪乱が認められたため、攪乱の少ない火山灰や洪水砂など、特定の堆積土を上層にもつ層界と、土壌化の及んでいない層上で、遺構を精査することとした。

これを受けて、発掘調査は、平安時代の1108(天仁元)年に降った浅間山起源の火山灰(A s-B)を被った面(本報告書では一面と呼称、以下同じ)、この調査面を取り除いた面(二面)、古墳時代前期初頭の洪水砂層を取り除いた面(三面)、そして弥生時代中期の洪水砂層を取り除いた面(四面)の、4層界で行った。第17地点四面は、当事業団報告書第291集、三面は同報告書第303集で報告し、第一・二面および第18地点を、本報告書で報告する。

第18地点は、第17地点の南東に位置する。地形的には、北西に位置する第17地点からの、緩やかな傾斜が続いてくる低湿地であったと考えられる。

調査区の東部は、堆積層の状況からみて近世には、大きな河川もしくは沼地となっていたと考えられる。この河川もしくは沼地によって、平安時代の水田は削られたため、調査区東部では、水田跡が確認されなかったと考えられる。

換言するならば、第18地点は、全面が水田域であったと推定されるのである。

### 1. 溝跡(第293~312区)

#### 第1号溝跡(第296・297・306区)

A U-50~55グリッドに位置する。浅間A軽石の純層(第306区)をもつ、第2号溝跡を切っている。

検出し得た溝跡の長さは46.4m、上幅0.45~1.1m、下幅0.35~0.75m、深さ10~35cmである。

溝跡はN-89°-Wの方位で、やや蛇行するものの、概ね東西に走る。溝跡の流れとしては、西→東と推定される。土層断面図での第1層には、浅間A軽石が多量に混入していた。本遺構は、1783(天明3)年に降灰した浅間A軽石によって埋没した溝を、掘り直したものであろうか。

また、溝跡底面には、人の足跡が数箇所確認されている。溝跡の平面形は、湾曲するものの概ね直線状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈する。

A U-51グリッド内には、上径3.7~5.1m、下径1.6~3.3m、深さ9.0cmの、溜め井状の窪みがあり、大量の浅間A軽石が堆積していた。そしてこの窪みの底面からは、木製品や土器片が出土したが、図化に至る遺物はなかった。

#### 第2号溝跡(第293・296・297・306区)

A U-50~55グリッドに位置する。第1号溝跡に切られている。土層断面図(第306区)における4層は、浅間A軽石の純層である。

検出し得た溝跡の長さは46.4m、上幅1.2~2.3m、下幅0.6~0.75m、深さ45~75cmである。

溝跡はN-89°-Wの方位で、やや蛇行するものの、概ね東西に走る。溝跡の流れとしては、西→東と推定される。本遺構は、1783(天明3)年に降灰した浅間A軽石によってほぼ埋没したため、新たに掘り直されたのが、第1号溝跡であると推定される。

平面形は、概ね直線状、断面形は逆台形もしくは塊状を呈する。

第2号溝跡は、位置・形状から推して、第5・9号坪界区画跡の痕跡が江戸時代まで継続したものであろうか。

図化し得た遺物は3点であった。

#### 第3号溝跡(第296・297・306区)

A U・A V-51グリッドに位置する。第1号溝跡内にある溜め井状遺構と重複している。あるいは、

溜め井状遺構に水を流し込んでいたのであろうか。

検出し得た溝跡の長さは8.0m、上幅1.2m、下幅0.5m、深さ35~40cmである。溝跡の方位はN-10°-Wを指す。平面形は直線状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形に近い。遺物は出土しなかった。

#### 第4号溝跡 (第302・306図)

BD-46・47、BE・BF-47グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

検出し得た溝跡の長さは17.6m、上幅0.6~0.85m、下幅0.3~0.7m、深さ35~40cmである。溝跡の方位はN-4°-WとN-89°-Wを指す。平面形は、直線からなる北東にコーナーをもつL字状を呈し、93°

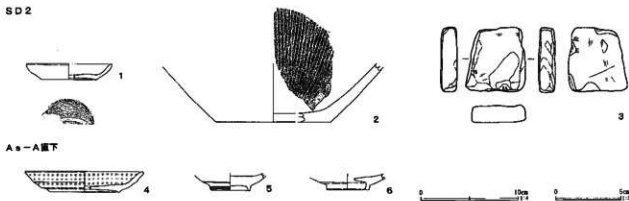
の角度で開く。断面形は、底面が比較的平坦な逆台形に近い。平安時代から続く溝跡と思われるが、浅間A軽石が堆積している箇所が確認された。遺物は出土しなかった。

#### 第5号溝跡 (第298・306図)

AW~AZ-46グリッドに位置する。検出し得た溝跡の長さは14.2m、上幅0.8m、下幅0.3m、深さ30cmである。溝跡の方位はN-2°-Eを指す。

平面形は直線状、断面形は塊状を呈する。水田との関係は不明であるが、平安時代の溝跡と思われる。遺物は出土しなかった。

S D 2



A a - A 裏下

第293図 第18地点出土遺物

第40表 第18地点出土遺物観察表 (第293図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師質小皿	(8.8)	1.6	(5.8)	A H J	Ⅲ	灰褐色	20	各方面とも磁ざり目はあまり見られない
2	炆器部鉢		6.0	(11.7)			橙色	10	
3	砥石	現存長4.8×幅4.5×厚1.3cm			重量42.5g	凝灰岩製			
4	灰釉高台付皿	(12.2)	2.1	(7.2)	A H	I	灰白色	15	
5	陶磁器碗		1.8	3.9		I	灰白色	20	
6	磁器碗		1.6	(4.3)		I	灰白色	15	

## 2. 水田跡 (第293~312図)

第18地点で検出された水田区画は、979区画である。便宜上、AW~BF-50グリッドに位置する排水溝の西側を西区、東側を東区と呼称していきたい。

西区・東区とも、水田区画は整然と配されているが、区画の様相が異なっている。西区の方が、各水

田区画の形状・規模が、より原形に近いと考えられるため、こちらを重点的にみていくことにしたい。

#### 西区水田跡 (第298・299・302・303・306図)

微地形的にみると、水田跡が失われている東区の南東部付近が、標高的に最も高くなっている。水田跡消失部分の標高は、22.44~22.62mである。標高

の最高地点と最低地点の距離は17m、高低差は18cm、傾斜率は1.1%で、第17地点の傾斜率に近い。

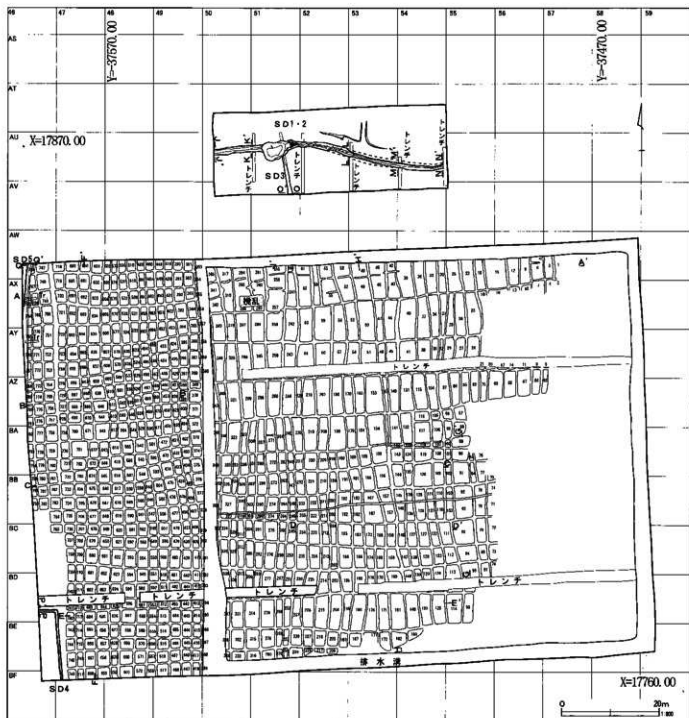
水田面の検出標高は、22.44~22.62mで、標高の最高地点から最低地点までの距離は約18m、高低差は18cmで、傾斜率は1.0%で、第17地点のものと近い数値である。

東区と同様に、第18地点の水田面の傾斜率は低く、

高低差は小さいといえよう。

西区では、東西36mの範囲内に、水田区画の南北列が17列、南北83mの範囲内に、水田区画の東西列が29列（445区画）検出された。

まず、畦の方位からみていきたいと思う。東西・南北ともに、畦はやや湾曲しているため、計測する箇所によって方位の数値に若干の差異が出るが、参



第294図 第18地点遺構全体図

考として記述する。全体的な傾向として、東に振れる(N-2~3°-E)ものが3例程あるが、概ね西に僅かに(N-1~4°-W)振れるものが大部分である。この数値は、第17地点の畦の方位とほぼ共通する。

東西方向の畦の方位については、南北方向の畦の方位と対応して、若干、南北に振れている。

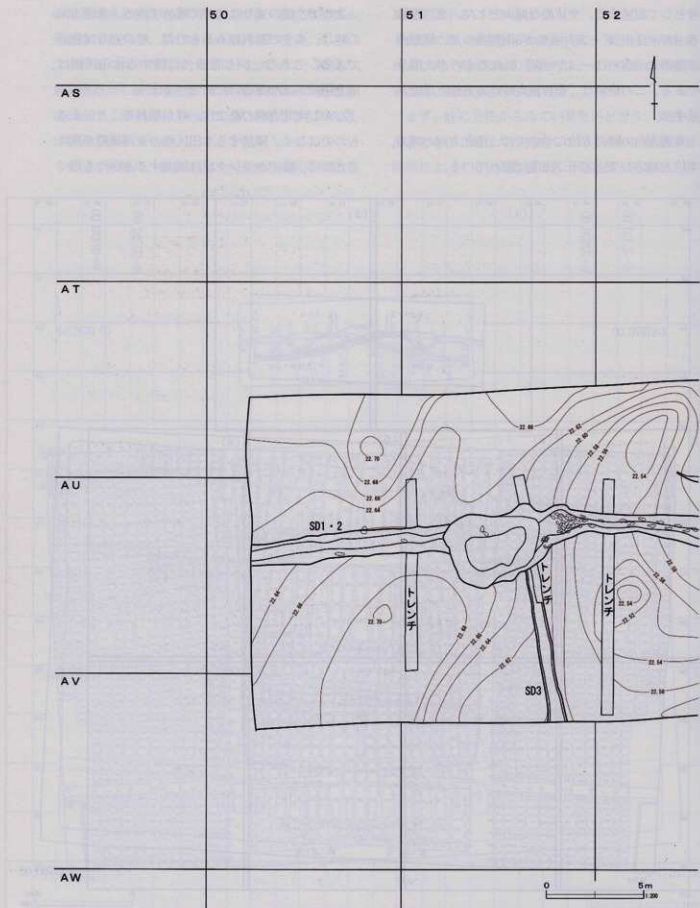
次いで、畦の通りについて眺めてみる。東西方向の畦は、多少の振れはあるものの、畦の通りは良好である。これは、同じ東西列に属する水田区画は、南北規模がほぼ等しいためといえよう。

しかし南北方向の畦では、畦が振れることによるものではなく、隣接する水田区画の東西規模が異なるために、畦がクランク状に屈曲するというもので

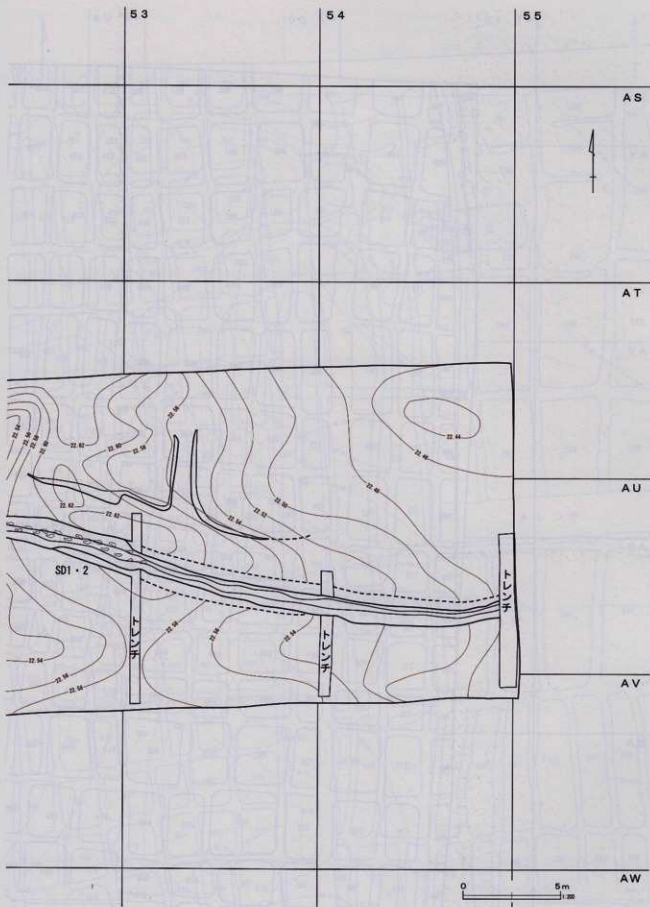


第295図 第18地点溝跡・水田跡区劃図





第296図 溝跡水田跡 (1)

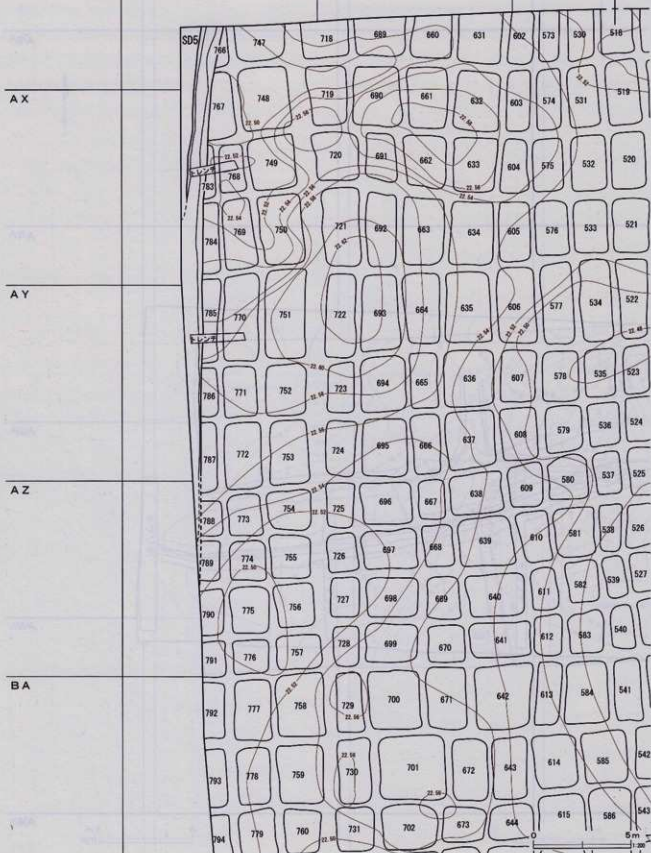


第297図 溝跡水田跡 (2)

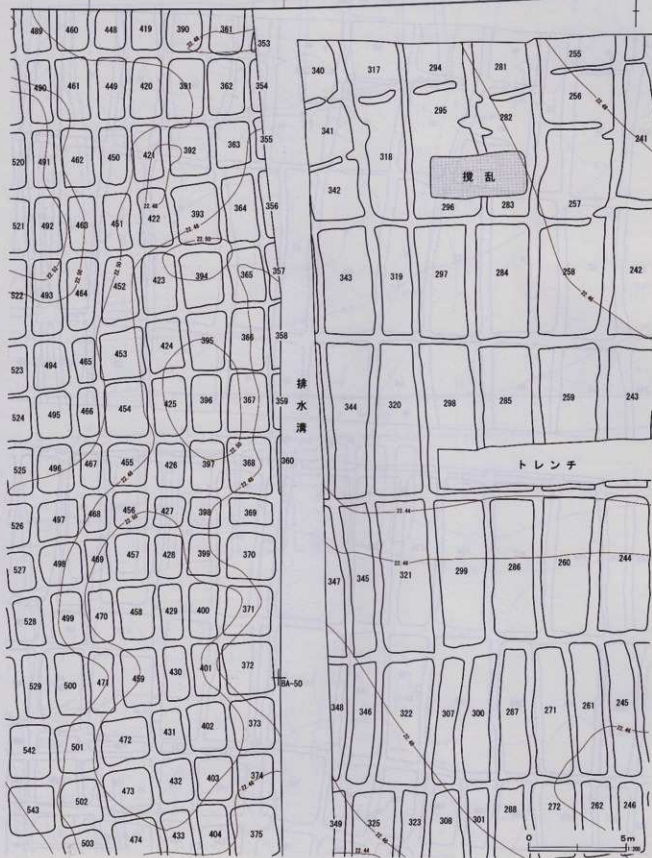
4 6

4 7

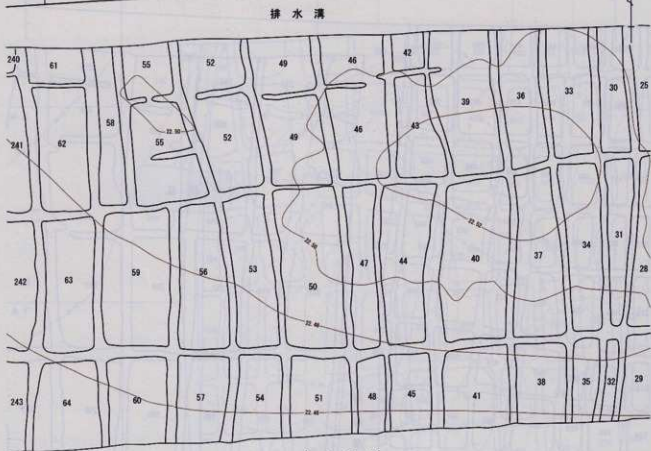
4 8



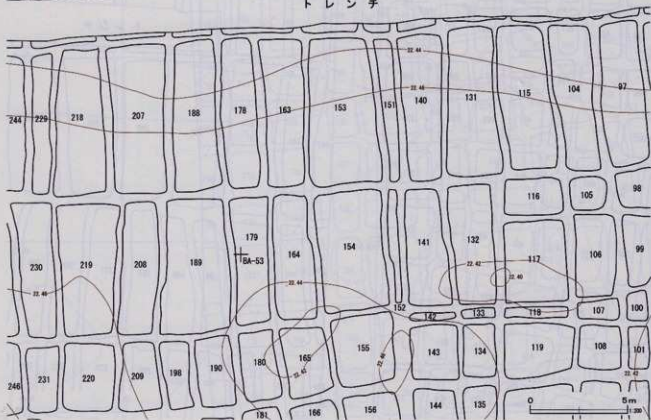
第298図 溝跡水田跡 (3)



第299図 溝跡水田跡 (4)



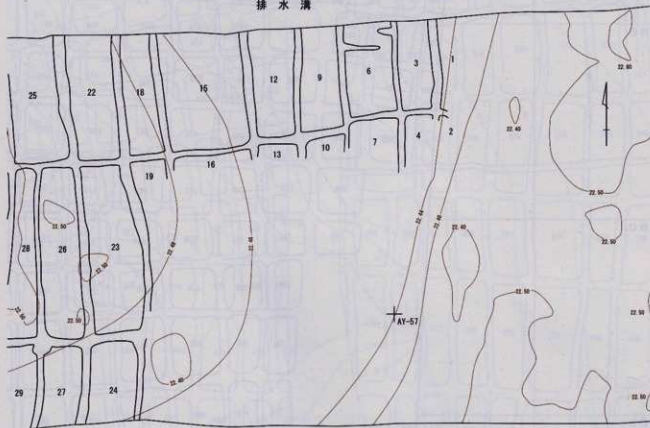
## トレンチ



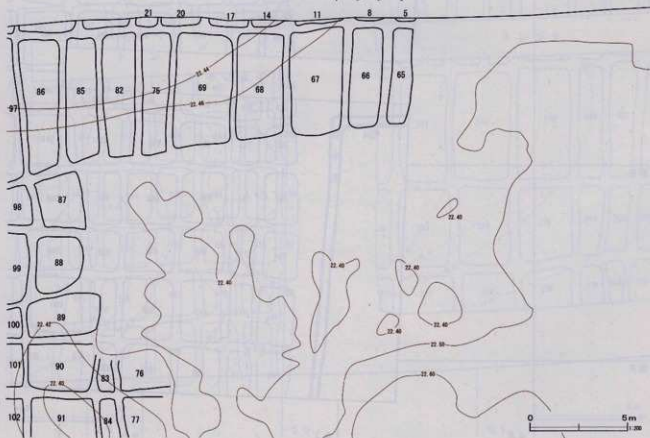
第300図 溝跡水田跡 (5)



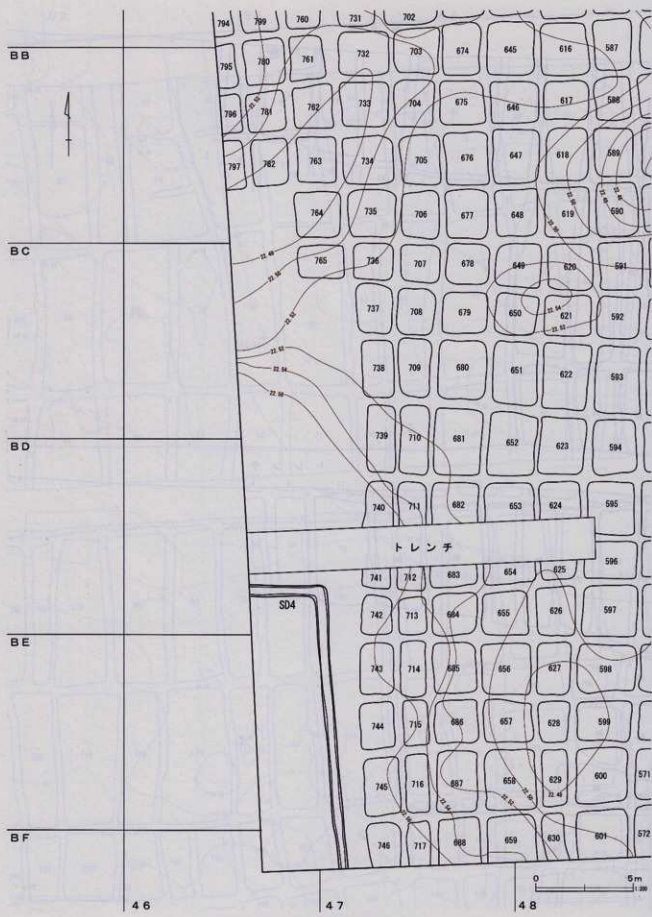
排水溝



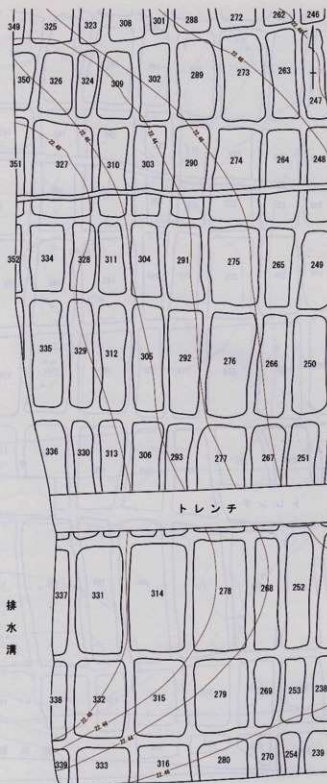
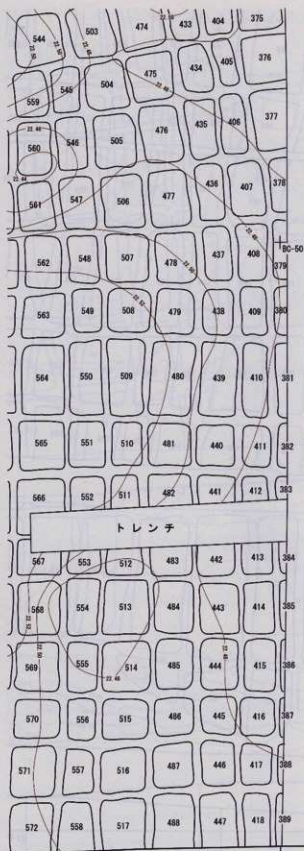
トレンチ



第301図 溝跡水田跡 (6)



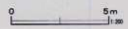
第302図 溝跡水田跡 (7)



49

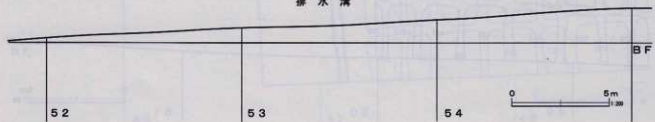
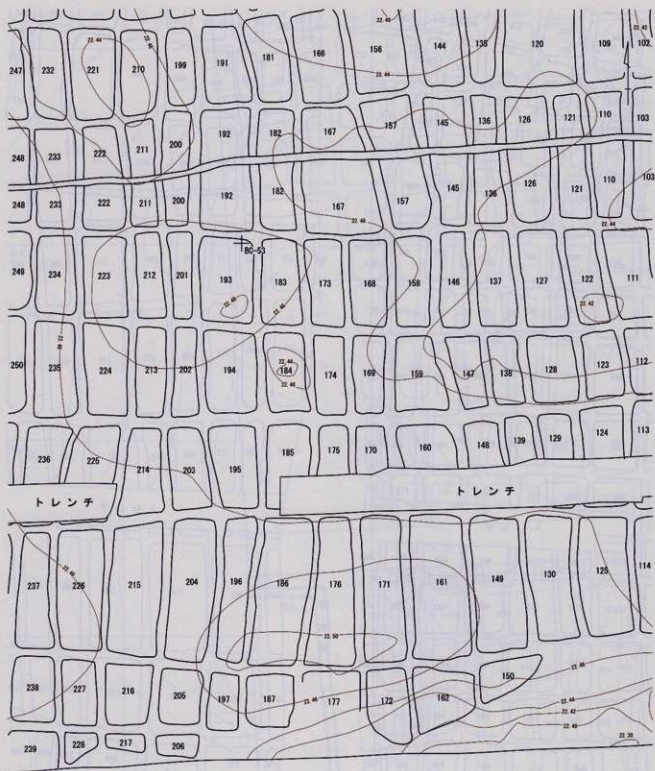
50

51

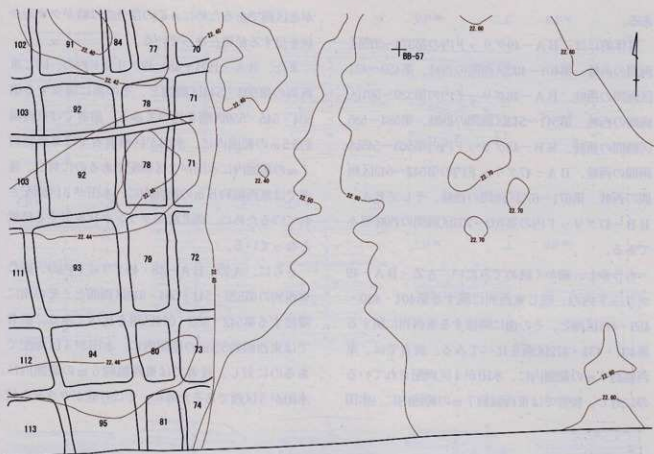


第303図 溝跡水田跡 (8)

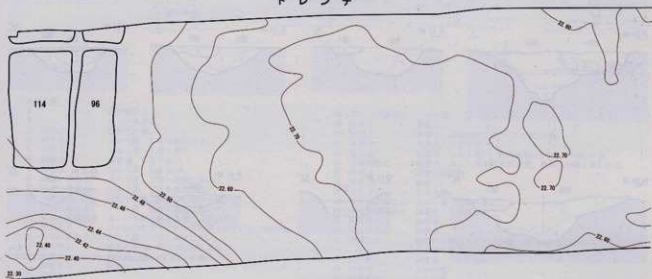




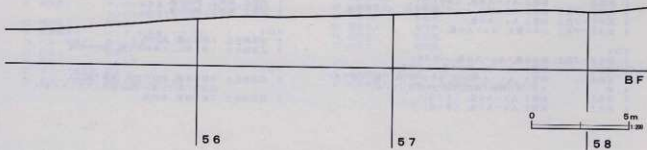
第304図 溝跡水田跡 (9)



トレンチ



排水溝



第305図 溝跡水田跡 (10)

ある。

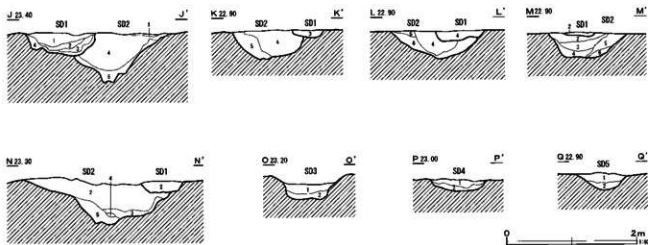
具体的には、B A - 49グリッド内の第374~375区画間の西畦、第401~402区画間の西畦、第459~431区画間の西畦、B A - 48グリッド内の第529~501区画間の西畦、第541~542区画間の西畦、第584~585区画間の西畦、B B - 48グリッド内の第503~545区画間の西畦、B A - 47グリッド内の第642~643区画間の西畦、第671~672区画間の西畦、そしてB A - B B - 47グリッド内の第702~703区画間の西畦等々である。

もう少し、細かく眺めてみたい。A Z - B A - 49グリッド内の、同じ東西列に属する第401・430・459・471区画と、その南に隣接する東西列に属する第402・431・472区画を比べてみる。前者では、東西幅約7mの範囲内に、水田が4区画配されているのに対し、後者では東西幅約7mの範囲内に、水田

が3区画であるために、この部分では畦がクランク状を呈する結果となっている。

また、B A・B B - 48・49グリッド内の、同じ東西列の第503・544区画間と、その南に隣接する第504・545・559区画を比べてみる。前者では東西幅約5.5mの範囲内に、水田が2区画配であるのに対し、後者では東西幅約6mの範囲内に、水田が3区画配されているために、南北畦がクランク状を呈する結果となっている。

さらに、A Z・B A - 48・49グリッド内の、同じ東西列の第529・541・584・613区画間と、その南に隣接する第542・585・614区画を比べてみる。前者では東西幅約5.5mの範囲内に、水田が4区画配であるのに対し、後者では東西幅約6mの範囲内に、水田が3区画であるために、やはり畦がクランク状



#### SD 1

- 1 灰色土 粘質土 A s - A 多量、しまりわるい。
- 2 灰オリーブ色土 粘質土 全体に鉄分・マンガンを含む。A s - A 多量。
- 3 灰オリーブ色土 粘質土 A s - A 少量。
- 4 灰オリーブ色土 シルト質土 A s - A 少量。

#### SD 2

- 1 灰オリーブ色土 鉄分多量。A s - A 少量、バサバサ
- 2 灰色土 粘質土 A s - A・鉄分少量、しまり良い。
- 3 灰色土 粘質土 A s - A・炭化粒(φ0.2~0.5cm)少量、しまり良い。
- 4 砂 A s - A の輪層 底部には鉄分が分布している。
- 5 灰黄色土 粘質土 A s - A 少量、しまり良い。
- 6 灰黄色土 粘質土 A s - A 少量、しまり良い。

#### SD 3

- 1 灰黄色土 粘質土 鉄分少量。
- 2 灰黄色土 粘質土 鉄分少量。

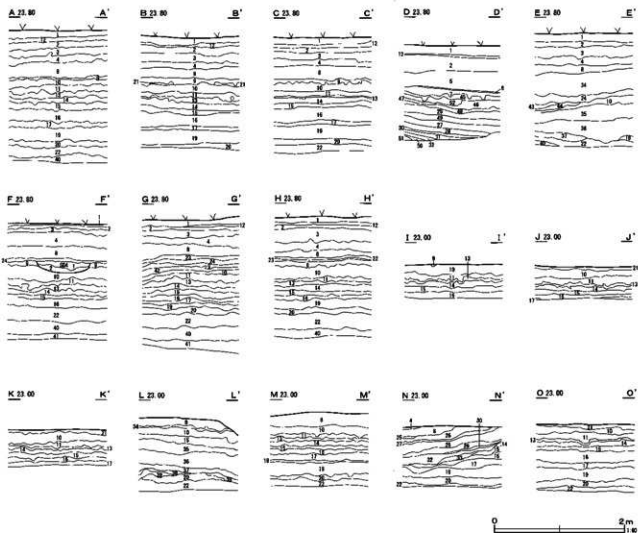
#### SD 4

- 1 灰茶褐色土 B 軽石少量、粘性弱。
- 2 灰茶褐色土 1層と地山との漸移的な層、粘性やや強。

#### SD 5

- 1 灰茶褐色土 B 軽石多量、粘性やや弱、本層下面には、灰黄色の粘土が薄い(数cm)層状に入ることが多い。
- 2 灰茶褐色土 B 軽石多量、粘性強。

第306図 第18地点溝跡断面図



基本土層

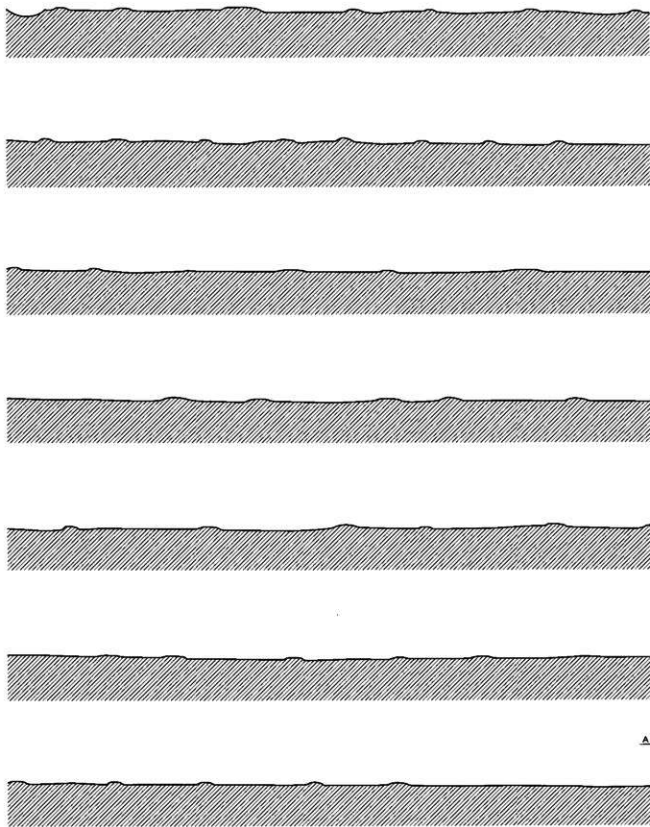
- 1 現代耕作土
- 2 A s - A 多量
- 3 粘性や中強
- 4 灰白色土 シルト質 しまり非常に良い
- 5 灰色土 シルト質 しまり悪い
- 6 灰色土 粘質 しまり悪い
- 7 灰色土 シルト質 しまり悪い
- 8 にがい黄褐色土 シルト質 しまり非常に良い
- 9 にがい黄褐色土 シルト質 しまり非常に良い
- 10 緑灰色土 粘性や中強、鉄分(珪状鉄)多量
- 11 にがい黄褐色土 シルト質 しまり非常に良い
- 12 にがい黄褐色土 A s - A 粘・鉄分多量、バサバサ
- 13 灰白色土 11と14の間でマール状に含まれている、粘性強
- 14 にがい黄褐色土 シルト質 しまり非常に良い
- 15 緑灰色土 粘性や中強、鉄分(珪状鉄)多量
- 16 灰色土 粘性質、鉄分(珪状鉄)少量
- 17 緑灰色土 粘性質
- 18 灰色土
- 19 緑灰色土 粘性質、水の浸透の補助機構を所々に含む
- 20 緑灰色土 粘性質
- 21 緑灰色土 マンガン粘多量、水田に水を張っていた際にマンガンが沈着したと思われる
- 22 緑灰色土 粘性質
- 23 灰黄褐色土 マンガン粘多量、バサバサ
- 24 にがい黄褐色土 鉄分を多量、バサバサ
- 25 灰色土 粘性質
- 26 灰色土 シルト質
- 27 オリーブ黒色土 粘質
- 28 オリーブ黒色土 非常に細いシルト質

- 29 オリーブ黒色土 シルト質
- 30 灰色土 粘質上
- 31 灰色土 粘質土 灰白色粘土(マール状)少量
- 32 灰色土 粘質土 しまり悪い
- 33 灰色土 粘質土 しまり悪い、灰白色粘土(マール状)少量
- 34 灰黄褐色土 粘質土 A s - B を所々に少量、鉄分24層と思われる
- 35 灰色土 非常に粘性質
- 36 灰色土 粘性質
- 37 灰色土 シルト質
- 38 オリーブ灰色土 シルト質 しまり悪い
- 39 オリーブ灰色土 粘質土 しまり悪い
- 40 緑灰色土 粘性質
- 41 緑灰色土 粘性や中強、A s - B 少量、24-25層が人為的にかけられた層、耕作の痕跡
- 42 緑褐色土 粘性質、しまり悪い
- 43 緑灰色土 粘性質
- 44 灰色土 シルト質
- 45 灰黄褐色土 シルト質
- 46 灰黄褐色土 粘性質、シルト(マール状)少量
- 47 灰黄褐色土 シルト質
- 48 灰黄褐色土 粘性質
- 49 灰色土 粘性質
- 50 暗灰色土 粘性質
- 51 灰色土 粘性質
- 52 灰色土 粘性質

- SD 4
- 1 灰黄褐色土 粘性質、A s - B 少量
- 2 灰黄褐色土 1と地山との断層的な層、粘性や中強

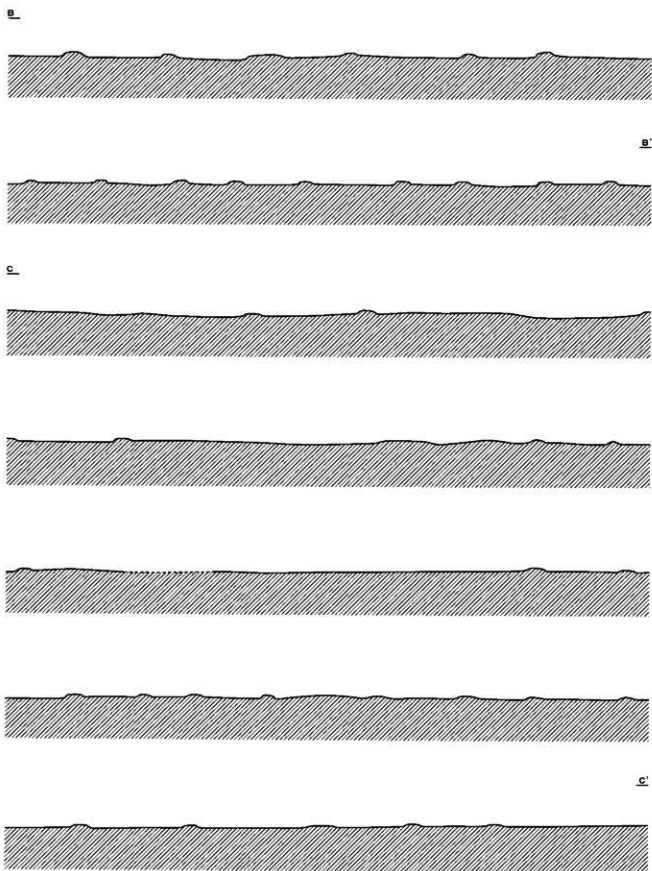
第307図 第18地点基本土層図

A



第308図 溝跡・水田跡エレベーション図 (1)

0 L = 23.50 2.5m  
1:100



第309図 溝跡・水田跡工レベルシヨン図 (2)

D



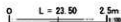
D'



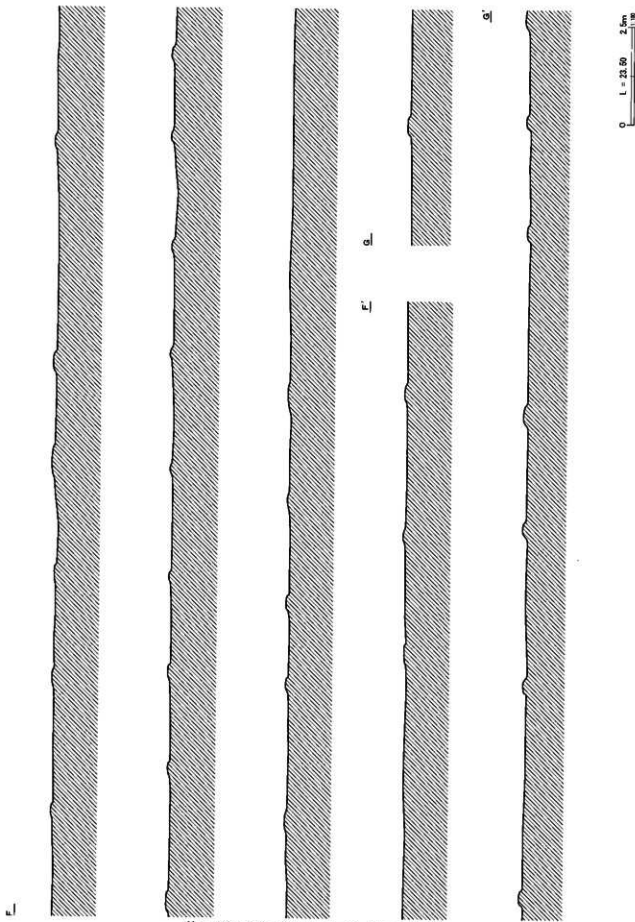
E



E'

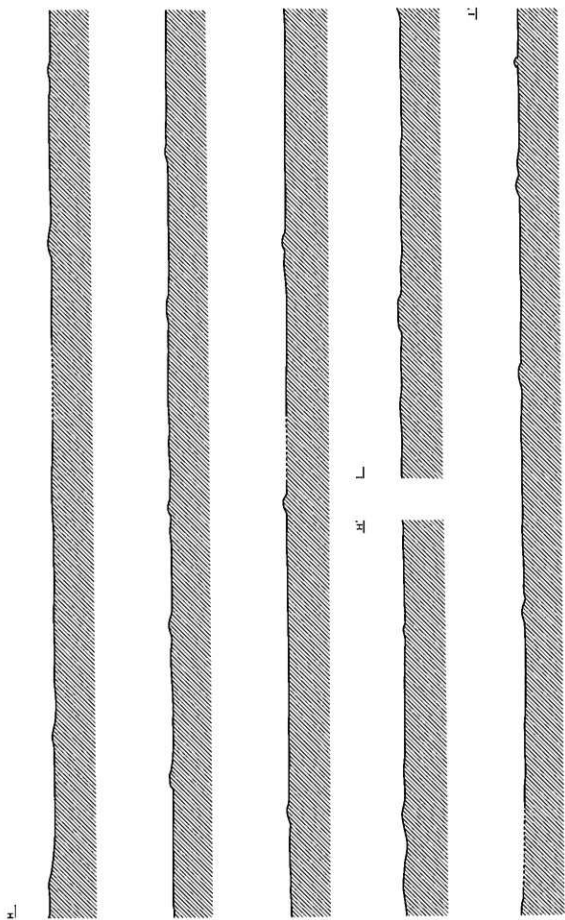


第310図 溝跡・水田跡エレベーション図 (3)



第311図 清跡・水田跡エレベーション図(4)





第312図 清跡・水田跡エレベーション図 (5)

を呈する結果となっている。

これらとは別に、また、BA-47・48グリッド内の同じ東西列の第642・671・700区画間と、その南に隣接する第643・672・701区画を比べてみる。

前者では東西幅約8.5mの範囲内に、水田が3区画であり、後者では東西幅約8mの範囲内に、水田が同じく3区画であるが、各々の東西列において、水田区画の東西規模が異なることから、やはり南北畦がクランク状を呈する結果となっている例も存在する。

以上にみたように、南北畦がクランク状を呈するのは、BA・BB-47~49グリッド辺りであり、比較的接近している。調査時点での、水田確認面をみる限り、水田面の高低差に起因するものとは思われない。

また、こういった水田区画の東側、AW~BF-49グリッド辺りには、他の水田区画よりも東西規模の小さな短冊形を呈するものが南北に並んでいることが分かる。しかも、BW~BCグリッドにかけてはやや蛇行している。

あたかも、幅約3mの南北方向の流路があり、これを耕地化したため、その微地形が水田区画に反映されているかのような印象を受ける。

畦の幅については、幅30~50cm程のものが多く、AW~BC-46・47グリッド内の南北畦の中には、幅広な部分では80~110cmの規模をもつ畦が検出されている。その位置・規模からみて、坪界（第9・10坪界区画）境の大畦と推定される。因みにこの大畦の方位は、N-3°-Wを指す。

この大畦と考えられる畦は、第17地点A区で検出された、同じく大畦と考えられる畦と直行する位置関係にあるといえる。なお、この第17地点A区の大畦の幅は、110~250cmである。

続いて、水田区画の規模についてみていきたい。全体的に、規模の小さいものが多く、これは第17地点で確認された水田区画の面積と比べても明らかである。水田区画の面積が10㎡を超えるのは第701区

画のみであり、2㎡を切るのは第468区画のみである。水田区画の形状に関しては、3つのタイプがあるといえる。

- 1：短冊形を呈するもの。
- 2：短冊形とまではないえないが、長方形を呈するもの。
- 3：ほぼ正方形を呈するもの。

1のタイプのものは、第369区画を唯一の例外として、いずれも南北方向に主軸をもつ水田区画である。南北規模は、2.4~4.4mと幅があるが、2.5~3.5m前後のものが多いといえる。東西規模については、0.8~2.2mと幅があるが、1.5~2m前後のものが多いといえる。なお、東西規模がこれ以上大きくなった場合、短冊形ではなく、2のタイプの水田区画となる。

2のタイプの水田区画の中にも、南北規模が3.5~4m前後のものが少なからず存在するが、それはいずれも東西規模もある程度大きいため、長短比率が小さくなり、短冊形を呈するに至っていない。換言するならば、短冊形よりも面積を大きくした水田区画といえよう。

短冊形を呈する水田区画の面積は、1.9~8.8㎡といったように大きな差があるが、2・3のタイプと同様に、4~6㎡のものが多い。

西区を一瞥してみると、2のタイプのものが、3つのタイプの中で最も数が多いと思われる。

南北規模は、2.2~3.4mと幅があるが、2.5~3m前後のものが多いといえる。東西規模については、2.4~2.9mとこちらも幅があるが、2~2.5m前後のものが多いといえる。これ以上東西規模が小さくなった場合に短冊形を呈する水田区画となる。面積は、2.6~8.8㎡と幅があるが、1・3のタイプと同様に、4~6㎡に納まるものが多いといえよう。

3のタイプでは、南北規模は、1.2~3.2mと幅があるが、2~3m前後のものが多いといえる。東西規模については、1.3~3.3mとこちらも幅があるが、2~2.5m前後のものが多いといえる。これ以上東

西規模が小さくなった場合には2のタイプの水田区画となる。面積的には、3.2～10.9㎡と幅があるが、1・2のタイプと同様に、4～6㎡に納まるものが多いといえよう。

3つタイプの水田区画について、幾つか個別に眺めてみることにする。まず1のタイプから始める。なお、水口と推定される切れ間は、いずれの水田区画においても確認されなかった。

第562区画：規模は、東西2.0m、南北2.5m、面積5.0㎡である。このタイプの水田区画の中で、形状・規模共に典型的なものといえる。

第468区画：規模は、東西1.0m、南北1.9m、面積1.9㎡である。このタイプの水田区画の中で、面積が最も小さな水田区画である。

第751区画：規模は、東西2.0m、南北4.4m、面積8.8㎡である。このタイプの水田区画の中で、面積が最も大きな水田区画である。

次いで、2のタイプをみる。

第676区画：規模は、東西2.1m、南北2.4m、面積5.04㎡である。このタイプの水田区画の中で、形状・規模共に典型的なものといえる。

第726区画：規模は、東西1.5m、南北1.9m、面積2.9㎡である。このタイプの水田区画の中で、面積が最も小さな水田区画である。坪境界の大畦の東に隣接する位置にある。

第748区画：規模は、東西2.5m、南北3.2m、面積8.0㎡である。このタイプの水田区画の中で、面積が最も大きな水田区画である。坪境界の大畦の西に隣接する位置にある。

最後に、3のタイプをみる。

第507区画：規模は、東西2.2m、南北2.4m、面積5.28㎡である。このタイプの水田区画の中で、形状・規模共に典型的なものといえる。

第417区画：規模は、東西1.6m、南北2.0m、面積3.2㎡である。このタイプの水田区画の中で、面積が最も小さな水田区画である。

第701区画：規模は、東西3.3m、南北3.3m、面積10.89㎡である。このタイプの内だけではなく、西区の水田区画の中で、面積が最も大きな水田区画である。

#### 東区水田跡（第299～301・303～306区画）

微地形的にみると、水田跡が失われている東区の南東部付近が、標高的に最も高いといえる。水田面の確認標高は22.42～22.52mである。標高の最高地点と最低地点の距離は12m、高低差は10cm、傾斜率は0.83％で、第17地点に比べ、傾斜率は低いといえよう。第18地点の水田面の傾斜率は低く、高低差は小さいといえよう。東区では、東西72mの範囲内に、水田区画の南北列が26列、南北79mの範囲内に、水田区画の東西列が16列（352区画）検出された。

水田区画の東西規模は、0.7～3.7mと幅があるが、2.5m前後のものが多い。この規模は、西区と共通しているといえよう。

東区の水田区画の形状・規模を、西区のものと比較すると、南北規模については、西区水田区画の2ないし3区画（大部分は2区画）分、1区画になっていると考えられる。そしてこれは、東区では、東西方向の畦が失われているものが非常に多いことによっていると思われる。

第41表 第18地点水田跡計測表 (第294・295・300・301・304・305・307~312区)

水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(m <sup>2</sup> )	水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(m <sup>2</sup> )	水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(m <sup>2</sup> )
1	-	-	-	68	5.3	2.4	12.7	135	4.4	1.4	6.2
2	-	-	-	69	5.6	2.9	16.2	136	6.4	1.4	9.0
3	(1.6)	-	-	70	-	-	-	137	4.8	2.0	9.6
4	(1.5)	-	-	71	6.6	-	-	138	3.4	1.5	5.1
5	(1.2)	-	-	72	5.0	-	-	139	(4.6)	(1.4)	(6.4)
6	(2.4)	-	-	73	3.0	-	-	140	7.3	2.0	14.6
7	(2.4)	-	-	74	-	-	-	141	5.8	2.0	11.6
8	(1.6)	-	-	75	6.0	1.4	8.4	142	2.3	0.4	0.9
9	(2.0)	-	-	76	-	-	-	143	2.6	2.4	6.2
10	(2.0)	-	-	77	4.0	(1.8)	(7.2)	144	4.4	2.0	8.8
11	(2.8)	-	-	78	6.0	2.2	13.2	145	6.4	1.8	11.5
12	(2.2)	-	-	79	5.0	2.0	10.0	146	4.8	1.4	6.7
13	(2.0)	-	-	80	3.0	1.6	4.8	147	3.6	1.4	5.0
14	(1.6)	-	-	81	(1.7)	-	-	148	(4.4)	(1.7)	(7.5)
15	(4.0)	-	-	82	6.2	1.6	9.9	149	6.8	2.6	17.7
16	(4.0)	-	-	83	(2.4)	(0.7)	(1.7)	150	2.8	1.4	3.9
17	(2.0)	-	-	84	4.0	1.0	4.0	151	7.3	0.7	5.1
18	(1.6)	-	-	85	6.0	1.6	9.6	152	5.8	0.5	2.9
19	(8.4)	(1.6)	(13.4)	86	6.6	1.6	10.6	153	7.3	3.4	24.8
20	(2.0)	-	-	87	2.6	2.2	5.7	154	6.0	3.3	19.8
21	(6.8)	(1.2)	(8.2)	88	2.6	2.4	6.2	155	3.5	3.0	10.5
22	(2.2)	-	-	89	3.6	2.0	7.2	156	4.5	2.6	11.7
23	8.6	2.5	21.5	90	3.3	2.2	7.3	157	6.4	2.2	14.1
24	(6.6)	2.4	(15.8)	91	4.2	3.3	13.9	158	4.4	1.9	8.4
25	(2.4)	-	-	92	6.6	3.6	23.8	159	3.8	2.4	9.1
26	8.8	2.0	17.6	93	4.6	4.2	19.3	160	(4.2)	(2.8)	(11.8)
27	(6.6)	2.0	(13.2)	94	3.8	3.0	11.4	161	7.4	2.8	20.7
28	8.8	1.4	12.3	95	(5.6)	3.2	(17.9)	162	3.2	2.8	9.0
29	(7.0)	2.0	(14.0)	96	6.0	2.0	12.0	163	7.4	2.0	14.8
30	(1.4)	-	-	97	6.2	2.1	13.0	164	6.3	2.0	12.6
31	8.4	1.2	10.1	98	2.0	1.8	3.6	165	3.4	2.2	7.5
32	(6.6)	0.8	(5.3)	99	3.6	1.4	5.0	166	4.4	2.4	10.6
33	(2.2)	-	-	100	1.4	1.0	1.4	167	6.0	3.6	21.6
34	8.6	2.0	17.2	101	2.2	1.0	2.2	168	4.2	1.8	7.6
35	(6.8)	1.2	(8.2)	102	4.5	1.0	4.5	169	4.0	1.6	6.4
36	(2.2)	-	-	103	6.7	1.3	8.7	170	(4.0)	(1.6)	(6.4)
37	8.5	2.4	20.4	104	7.4	1.8	13.3	171	7.4	2.0	14.8
38	(6.6)	2.5	(16.5)	105	1.8	1.7	3.1	172	3.8	1.8	6.8
39	(2.8)	-	-	106	4.0	2.0	8.0	173	4.2	1.8	7.6
40	8.0	3.4	27.2	107	2.1	0.8	1.7	174	4.0	1.6	6.4
41	(6.6)	3.4	(22.4)	108	2.2	2.1	4.6	175	(4.0)	(1.4)	(5.6)
42	(1.6)	-	-	109	4.7	2.0	9.4	176	7.6	2.2	16.7
43	5.2	2.0	10.4	110	6.2	1.6	9.9	177	-	-	-
44	8.0	2.4	19.2	111	4.4	2.1	9.2	178	7.6	1.7	12.9
45	(6.4)	2.0	(12.8)	112	3.2	2.2	7.3	179	6.4	1.8	11.5
46	(3.0)	-	-	113	(5.3)	3.0	(15.9)	180	3.4	1.8	6.1
47	8.2	1.4	11.5	114	6.0	3.0	18.0	181	4.4	1.9	8.4
48	(6.4)	1.4	(9.0)	115	7.3	2.5	18.3	182	6.0	1.8	10.8
49	(3.2)	-	-	116	3.0	1.8	5.4	183	4.2	1.9	8.0
50	8.0	3.2	25.6	117	4.0	3.0	12.0	184	4.0	2.0	8.0
51	(6.4)	3.2	(20.5)	118	3.2	0.5	1.6	185	4.3	(2.0)	(8.6)
52	(3.0)	-	-	119	3.5	2.8	9.8	186	7.4	2.6	19.2
53	7.6	2.0	15.2	120	4.5	3.6	16.2	187	2.7	2.4	6.5
54	(6.6)	2.3	(15.2)	121	6.2	1.4	8.7	188	7.6	2.2	16.7
55	(2.8)	-	-	122	4.8	1.5	7.2	189	7.0	3.4	23.8
56	7.4	2.4	17.8	123	3.2	1.9	6.1	190	3.6	1.8	6.5
57	(6.6)	2.4	(15.8)	124	(5.0)	2.1	(10.5)	191	4.0	2.2	8.8
58	(1.2)	-	-	125	6.0	2.5	15.0	192	6.0	2.6	15.6
59	6.6	3.4	22.4	126	6.3	2.2	13.9	193	4.2	2.7	11.3
60	(6.6)	3.0	(19.8)	127	5.0	2.0	10.0	194	4.0	2.6	10.4
61	(2.8)	-	-	128	3.0	2.3	6.9	195	4.2	2.2	9.2
62	6.2	2.3	14.3	129	(4.6)	(1.4)	(6.4)	196	7.2	1.5	10.8
63	6.6	2.4	15.8	130	6.4	2.2	14.1	197	3.0	1.6	4.8
64	6.8	2.6	17.7	131	7.4	2.4	17.8	198	3.6	1.4	5.0
65	4.8	1.0	4.8	132	6.0	2.1	12.6	199	4.0	1.4	5.6
66	5.0	1.6	8.0	133	1.7	0.4	0.7	200	5.8	1.3	7.5
67	5.3	3.6	19.1	134	2.7	1.6	4.3	201	4.3	1.1	4.7

第42表 第18地点水田跡計測表 (第294・295・299・300・303・304・307~312段)

水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(m <sup>2</sup> )	水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(m <sup>2</sup> )	水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(m <sup>2</sup> )
202	4.5	1.2	5.4	269	3.5	0.8	2.8	336	6.0	-	-
203	4.0	2.0	8.0	270	(1.1)	-	-	337	5.2	-	-
204	7.2	2.2	15.8	271	6.5	1.3	8.5	338	4.0	-	-
205	2.8	2.0	5.6	272	3.9	1.8	7.0	339	-	-	-
206	2.2	1.2	2.6	273	4.4	1.9	8.4	340	-	-	-
207	7.4	2.8	20.7	274	4.7	1.9	8.9	341	(2.8)	(2.0)	(5.6)
208	6.8	1.8	12.2	275	3.9	2.2	8.6	342	(3.0)	(2.4)	(7.2)
209	3.6	2.0	7.2	276	5.2	2.0	10.4	343	5.4	2.4	13.0
210	4.4	1.8	7.9	277	5.4	2.3	12.4	344	7.6	1.5	11.4
211	5.4	1.3	7.0	278	5.6	2.5	14.0	345	7.6	1.0	7.6
212	4.2	1.3	5.5	279	3.6	2.8	10.1	346	6.0	1.0	6.0
213	4.6	1.5	6.9	280	(2.0)	-	-	347	7.5	-	-
214	4.2	1.8	7.6	281	(2.6)	-	-	348	5.8	-	-
215	6.6	2.6	17.2	282	(2.8)	(1.4)	(3.9)	349	4.0	-	-
216	3.0	2.2	6.6	283	(4.2)	(2.1)	(8.8)	350	2.8	-	-
217	2.0	0.8	1.6	284	5.7	2.6	14.8	351	3.8	-	-
218	7.2	1.8	13.0	285	7.2	2.4	17.3	352	3.4	-	-
219	6.6	2.8	18.5	286	7.0	2.0	14.0	353	-	-	-
220	3.4	2.6	8.8	287	6.5	1.0	6.5	354	2.8	-	-
221	4.6	2.2	10.1	288	3.9	1.3	5.1	355	2.2	-	-
222	5.2	2.0	10.4	289	4.0	1.8	7.2	356	3.4	-	-
223	4.1	2.2	9.0	290	4.8	1.6	7.7	357	2.8	-	-
224	4.5	2.2	9.9	291	3.8	1.8	6.8	358	3.4	-	-
225	(4.9)	2.5	(12.3)	292	5.2	1.3	6.8	359	2.8	-	-
226	6.0	2.5	15.0	293	5.8	1.0	5.8	360	3.0	-	-
227	3.4	1.8	6.1	294	-	-	-	361	-	1.7	-
228	1.8	1.2	2.2	295	(3.0)	(1.3)	(3.9)	362	2.8	1.8	5.0
229	7.0	0.7	4.9	296	(4.8)	(3.0)	(14.4)	363	2.2	1.8	4.0
230	6.8	1.3	8.8	297	5.8	2.2	12.8	364	3.4	1.6	5.4
231	3.4	1.3	4.4	298	7.5	2.4	18.0	365	2.6	1.6	4.2
232	4.6	1.5	6.9	299	7.4	2.0	14.8	366	3.2	1.8	5.8
233	5.0	1.8	9.0	300	6.4	0.8	5.1	367	3.0	2.1	6.3
234	4.0	1.6	6.4	301	3.8	0.6	2.3	368	3.0	2.2	6.6
235	4.7	2.0	9.4	302	3.8	1.4	5.3	369	2.2	1.2	2.6
236	5.0	1.6	8.0	303	4.7	1.4	6.6	370	2.4	2.4	5.8
237	5.8	1.3	7.5	304	3.8	1.3	4.9	371	2.8	2.1	5.9
238	3.2	2.0	6.4	305	5.4	1.4	7.6	372	2.6	2.5	6.5
239	(2.6)	-	-	306	5.8	1.3	7.5	373	2.5	2.2	5.5
240	(0.9)	-	-	307	6.3	0.8	5.0	374	2.2	1.8	4.0
241	6.8	0.9	6.1	308	4.0	1.2	4.8	375	2.8	2.3	6.4
242	6.4	2.4	15.3	309	3.9	1.2	3.8	376	2.4	-	-
243	4.6	1.1	5.1	310	4.5	1.2	5.4	377	3.0	-	-
244	6.8	1.2	8.2	311	3.6	1.2	4.3	378	2.9	-	-
245	6.7	1.0	6.7	312	5.4	1.0	5.4	379	3.0	-	-
246	3.8	1.2	4.6	313	6.0	0.7	4.2	380	2.6	-	-
247	4.4	0.8	3.5	314	5.4	2.7	14.6	381	3.9	-	-
248	4.8	1.1	5.3	315	4.0	2.5	10.0	382	2.4	-	-
249	3.9	1.4	5.5	316	(2.4)	-	-	383	-	-	-
250	4.9	1.6	7.8	317	(2.5)	-	-	384	-	-	-
251	3.2	1.4	4.5	318	(6.0)	(1.8)	(10.8)	385	2.6	-	-
252	5.9	1.1	6.5	319	5.5	1.4	7.7	386	2.6	-	-
253	3.2	0.9	2.9	320	7.6	1.6	12.2	387	2.0	-	-
254	(0.6)	-	-	321	7.6	2.4	18.2	388	2.0	-	-
255	-	-	-	322	6.2	2.1	13.0	389	-	-	-
256	(3.8)	(2.6)	(9.9)	323	4.2	1.0	4.2	390	-	1.8	-
257	(4.5)	(3.2)	(14.4)	324	3.3	0.6	2.0	391	2.9	1.8	5.2
258	5.6	2.8	15.7	325	4.0	2.0	8.0	392	2.6	2.0	5.2
259	4.9	2.5	12.3	326	3.0	1.4	4.2	393	3.0	2.3	6.9
260	7.0	2.0	14.0	327	4.8	3.9	18.7	394	3.0	2.0	6.0
261	6.5	1.3	8.5	328	3.4	1.0	3.4	395	2.8	1.9	5.3
262	3.8	1.5	5.7	329	5.3	1.1	5.8	396	2.8	1.6	4.5
263	4.4	1.2	5.3	330	6.0	0.8	4.8	397	2.5	1.8	4.5
264	4.8	1.6	7.7	331	5.4	2.2	11.9	398	1.8	1.8	3.2
265	3.9	1.2	4.7	332	3.8	2.4	9.1	399	2.0	1.6	3.2
266	5.1	1.1	5.6	333	(2.6)	-	-	400	2.7	1.4	3.8
267	5.6	1.2	6.7	334	3.3	1.6	5.3	401	2.8	1.2	3.4
268	5.6	1.2	6.7	335	5.4	1.4	7.6	402	2.4	2.0	4.8

第43表 第18地点水田跡計測表 (第294・295・298・299・302・303・307~312区)

水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(㎡)	水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(㎡)	水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(㎡)
403	2.2	1.9	4.2	470	2.7	1.2	3.2	537	2.0	1.4	2.8
404	3.0	1.5	4.5	471	3.1	1.2	3.7	538	2.5	1.2	3.0
405	2.6	1.2	3.1	472	2.4	2.3	5.5	539	2.0	1.2	2.4
406	3.0	1.3	3.9	473	2.4	2.4	5.8	540	2.2	1.2	2.6
407	2.8	1.8	5.0	474	2.9	2.2	6.9	541	3.1	1.4	4.3
408	2.8	1.4	3.9	475	2.4	2.3	5.5	542	2.8	2.1	5.9
409	2.7	1.4	3.8	476	3.0	2.0	6.0	543	2.5	2.4	6.0
410	3.8	1.2	4.6	477	2.9	2.0	5.8	544	2.5	2.4	6.0
411	2.0	1.4	2.8	478	2.8	2.4	6.7	545	2.4	1.2	2.9
412	-	1.2	-	479	2.5	2.0	5.0	546	2.7	1.2	3.2
413	-	1.5	-	480	3.9	2.2	8.6	547	2.6	1.6	4.2
414	2.8	1.6	4.5	481	2.2	2.2	4.8	548	2.3	1.5	3.5
415	2.6	1.6	4.2	482	-	2.2	-	549	2.0	1.6	3.2
416	2.0	1.8	3.6	483	-	2.1	-	550	3.8	1.8	6.8
417	2.0	1.6	3.2	484	2.7	2.0	5.4	551	2.3	2.0	4.6
418	-	1.4	-	485	2.5	2.0	5.0	552	-	1.8	-
419	-	1.4	-	486	2.1	2.0	4.2	553	-	1.8	-
420	3.0	1.5	4.5	487	2.2	2.0	4.4	554	2.9	1.8	5.2
421	2.8	1.4	3.9	488	-	2.1	-	555	2.5	1.5	3.8
422	3.0	1.5	4.5	489	-	1.5	-	556	2.2	1.5	3.3
423	3.2	1.8	5.8	490	3.1	1.0	3.1	557	2.4	1.6	3.8
424	2.5	1.7	4.3	491	2.8	1.0	2.8	558	-	1.8	-
425	3.0	1.6	4.8	492	2.7	1.0	2.7	559	2.4	1.7	4.1
426	2.2	1.5	3.3	493	3.8	1.5	5.7	560	2.6	1.9	4.9
427	1.6	1.6	2.6	494	2.5	1.8	4.5	561	2.5	1.8	4.5
428	2.4	1.4	3.4	495	2.4	1.8	4.3	562	2.5	2.0	5.0
429	2.9	1.2	3.5	496	2.5	2.0	5.0	563	2.2	2.1	4.6
430	2.8	1.2	3.4	497	2.0	2.0	4.0	564	3.5	2.1	7.4
431	2.2	1.6	3.5	498	2.3	2.2	5.1	565	2.6	2.5	6.5
432	2.3	1.8	4.1	499	2.9	1.4	4.1	566	(3.0)	(2.4)	(7.2)
433	2.9	2.5	7.3	500	3.2	1.5	4.8	567	(2.0)	(2.0)	(4.0)
434	2.6	1.6	4.2	501	2.7	2.0	5.4	568	2.5	2.0	5.0
435	3.1	1.6	5.0	502	2.5	2.4	6.0	569	2.3	2.2	5.1
436	2.8	1.4	3.9	503	2.6	2.5	6.5	570	2.2	2.1	4.6
437	2.7	1.2	3.2	504	2.5	2.2	5.5	571	2.5	2.3	5.8
438	2.3	1.8	4.1	505	2.8	2.2	6.2	572	-	2.5	-
439	3.7	1.8	6.7	506	2.7	2.0	5.4	573	-	1.0	-
440	2.2	2.2	4.8	507	2.4	2.2	5.3	574	3.0	1.1	3.3
441	-	1.8	-	508	2.3	2.2	5.1	575	2.6	1.6	4.2
442	-	1.9	-	509	4.0	1.9	7.6	576	2.8	1.6	4.5
443	2.5	2.0	5.0	510	2.2	1.5	3.3	577	4.4	1.5	6.6
444	2.6	1.9	4.9	511	-	1.5	-	578	2.5	2.0	5.0
445	2.0	1.8	3.6	512	-	2.0	-	579	2.3	2.1	4.8
446	2.5	1.8	4.5	513	2.6	2.3	6.0	580	2.1	2.0	4.2
447	-	1.8	-	514	2.6	2.5	6.5	581	2.5	2.0	5.0
448	-	1.8	-	515	2.2	2.0	4.4	582	2.2	1.8	4.0
449	3.1	1.4	4.3	516	2.3	2.2	5.1	583	2.1	1.8	3.8
450	3.0	1.3	3.9	517	-	2.2	-	584	3.1	2.2	6.8
451	3.1	1.4	4.3	518	-	1.6	-	585	2.6	2.2	5.7
452	3.4	1.9	6.5	519	3.2	1.7	5.4	586	2.6	2.1	5.5
453	2.5	2.2	5.5	520	2.9	1.8	5.2	587	2.8	2.0	5.6
454	2.8	2.1	5.9	521	2.6	1.8	4.7	588	2.4	2.0	4.8
455	2.2	2.1	4.6	522	4.0	1.5	6.0	589	2.4	2.2	5.3
456	2.0	1.8	3.6	523	2.4	1.4	3.4	590	2.8	2.3	6.4
457	2.4	1.6	3.8	524	2.1	1.3	2.7	591	2.5	2.2	5.5
458	2.6	1.9	4.9	525	2.4	1.4	3.4	592	2.3	2.2	5.1
459	2.9	1.8	5.2	526	2.2	1.5	3.3	593	3.3	2.4	7.9
460	-	1.5	-	527	2.0	1.5	3.0	594	2.9	2.2	6.4
461	3.2	1.6	5.1	528	2.5	1.6	4.0	595	(2.6)	(2.5)	(6.5)
462	3.0	1.6	4.8	529	3.2	1.4	4.5	596	(2.6)	(2.2)	(5.7)
463	2.7	1.4	3.8	530	-	1.4	-	597	2.9	2.6	7.5
464	3.8	1.3	4.9	531	3.0	1.5	4.5	598	3.2	2.5	8.0
465	2.3	1.5	3.5	532	1.9	1.4	2.7	599	2.7	2.1	5.7
466	2.5	1.0	2.5	533	2.5	1.8	4.5	600	2.8	2.6	7.3
467	2.0	1.0	2.0	534	4.1	1.8	7.4	601	-	2.6	-
468	1.9	1.0	1.9	535	2.4	1.6	3.8	602	-	1.4	-
469	2.0	1.2	2.4	536	2.2	1.5	3.3	603	3.1	1.2	3.7

第44表 第18地点水田跡計測表 (第294・295・298・302・307~312図)

水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(m <sup>2</sup> )	水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(m <sup>2</sup> )	水田番号	長辺(m)	短辺(m)	面積(m <sup>2</sup> )
604	2.7	1.3	3.5	669	2.2	1.6	3.5	734	2.5	2.4	6.0
605	3.0	1.6	4.8	670	1.9	1.9	3.6	735	2.5	2.5	6.3
606	3.9	1.8	7.0	671	3.2	2.0	6.4	736	2.0	2.0	4.0
607	2.8	1.8	5.0	672	3.2	1.8	5.8	737	2.5	1.8	4.5
608	2.6	2.0	5.2	673	2.1	1.9	4.0	738	2.9	1.7	4.9
609	2.4	1.7	4.1	674	2.6	1.9	4.9	739	3.5	1.4	4.9
610	2.5	1.4	3.5	675	2.2	2.1	4.6	740	-	1.4	-
611	2.2	1.3	2.9	676	2.4	2.1	5.0	741	-	1.4	-
612	2.0	1.4	2.8	677	2.6	2.2	5.7	742	2.0	1.6	3.2
613	3.1	1.2	3.7	678	2.2	2.2	4.8	743	2.5	1.7	4.3
614	2.7	2.1	5.7	679	2.2	2.1	4.6	744	2.2	1.7	3.7
615	2.4	2.3	5.5	680	3.0	2.4	7.2	745	3.0	1.7	5.1
616	2.6	2.4	6.2	681	3.4	2.3	7.8	746	-	1.8	-
617	2.2	2.0	4.4	682	-	2.4	-	747	-	2.7	-
618	2.6	2.0	5.2	683	-	2.3	-	748	3.2	2.5	8.0
619	2.5	2.3	5.8	684	2.3	2.2	5.1	749	2.6	2.3	6.0
620	2.2	2.2	4.8	685	2.6	2.2	5.7	750	3.5	2.3	8.1
621	2.0	2.1	4.2	686	2.2	2.2	4.8	751	4.4	2.0	8.8
622	3.2	2.3	7.4	687	3.1	2.1	6.5	752	2.6	2.1	5.5
623	2.9	2.2	6.4	688	-	2.2	-	753	3.1	2.0	6.2
624	-	2.1	-	689	-	2.4	-	754	2.1	2.0	4.2
625	-	1.9	-	690	3.0	2.5	7.5	755	2.2	2.0	4.4
626	2.3	1.9	4.4	691	2.4	1.5	3.6	756	2.2	2.0	4.4
627	2.6	1.7	4.4	692	3.6	1.6	5.8	757	2.2	1.8	4.0
628	2.1	1.5	3.2	693	3.8	2.0	7.6	758	3.1	2.4	7.4
629	2.9	1.3	3.8	694	2.6	2.2	5.7	759	3.0	2.4	7.2
630	-	1.2	-	695	2.8	2.3	6.4	760	2.4	1.9	4.6
631	-	2.2	-	696	2.3	2.2	5.1	761	2.2	1.8	4.0
632	3.0	2.2	6.6	697	2.8	1.9	5.3	762	2.1	2.0	4.2
633	2.8	2.2	6.2	698	2.6	1.9	4.9	763	2.3	1.8	4.1
634	3.1	2.3	7.1	699	2.8	1.9	5.3	764	2.3	2.2	5.1
635	3.6	2.4	8.6	700	3.0	2.6	7.8	765	2.2	1.8	4.0
636	2.8	2.6	7.3	701	3.3	3.3	10.9	766	-	-	-
637	2.8	2.5	7.0	702	2.8	2.4	6.7	767	3.4	-	-
638	2.7	2.2	5.9	703	2.3	2.2	5.1	768	(2.3)	(1.2)	(2.8)
639	2.6	2.3	6.0	704	2.4	2.0	4.8	769	3.4	1.6	5.4
640	2.8	2.2	6.2	705	2.6	2.1	5.5	770	(4.4)	(1.8)	(7.9)
641	3.0	1.9	5.7	706	2.5	1.9	4.8	771	2.5	1.7	4.3
642	3.4	2.8	9.5	707	1.9	1.9	3.6	772	3.4	1.8	6.1
643	3.2	1.8	5.8	708	2.3	1.8	4.1	773	2.1	1.6	3.4
644	2.2	1.8	4.0	709	2.8	1.7	4.8	774	2.0	1.8	3.6
645	2.8	2.3	6.4	710	3.5	1.4	4.9	775	2.4	1.8	4.3
646	2.4	2.1	5.0	711	-	1.4	-	776	1.9	1.8	3.4
647	2.7	2.4	6.5	712	-	1.4	-	777	3.1	1.8	5.6
648	2.4	2.1	5.0	713	1.9	1.4	2.7	778	2.8	1.7	4.8
649	2.3	2.3	5.3	714	2.8	1.4	3.9	779	2.5	1.8	4.5
650	2.4	2.2	5.3	715	2.4	1.3	3.1	780	2.3	2.0	4.6
651	3.1	2.2	6.8	716	3.0	1.0	3.0	781	2.0	1.9	3.8
652	3.2	2.3	7.4	717	-	1.0	-	782	2.4	1.8	4.3
653	-	2.3	-	718	-	2.4	-	783	2.7	-	-
654	-	2.6	-	719	2.9	1.0	2.9	784	3.6	-	-
655	2.3	2.3	5.3	720	2.3	2.2	5.1	785	4.1	-	-
656	2.5	2.4	6.0	721	4.0	2.0	8.0	786	2.6	-	-
657	2.4	2.2	5.3	722	4.2	1.4	5.9	787	3.5	-	-
658	3.0	2.6	7.8	723	2.4	1.4	3.4	788	1.7	-	-
659	-	2.4	-	724	2.8	1.6	4.5	789	2.0	-	-
660	-	2.1	-	725	2.2	1.3	2.9	790	2.2	-	-
661	3.1	2.1	6.5	726	1.9	1.5	2.9	791	1.8	-	-
662	2.6	2.0	5.2	727	2.0	1.5	3.0	792	2.7	-	-
663	3.4	2.1	7.1	728	2.0	1.3	2.6	793	3.0	-	-
664	3.5	1.8	6.3	729	3.0	1.4	4.2	794	2.5	-	-
665	2.7	1.4	3.8	730	3.3	1.6	5.3	795	2.3	-	-
666	3.0	1.4	4.2	731	2.2	1.8	4.0	796	1.9	-	-
667	2.0	1.3	2.6	732	2.6	2.2	5.7	797	2.4	-	-
668	2.2	1.5	3.5	733	2.4	2.3	5.5	-	-	-	-

## VI 附編

### 1. 第19地点出土遺物 (補遺)

#### 1 笠と笠出土土壙 (第313図)

北島遺跡第19地点の、古代の資料については、事業団報告書第278・293集で報告がなされている。

そこに掲載する予定であった資料1点を、ここに報告する。便宜上、遺構名をQ-16・ピット1と呼称しておく。

古代の遺構を調査している過程で、確認された遺物である。出土した地点は、遺構が密集している範囲内の一画にあたり、周囲には掘立柱建物跡や溝跡が多数検出されている。そうした中で、周辺に散在している、土壙やピットの内の1つとして検出された。検出された際、土壙内の覆土の色調や土質は、周囲の土壙やピットと変わりがなく、一土壙として着手した。移植ゴテの最初の一掘りで、掘り上げた覆土に付着した状態で、植物繊維が出土した。因みに調査地点全体の土質が硬いため、この時点でも最初の掘り掘り下げ得たのは3~4cm程であった。

そこで、植物繊維を、覆土ごと土壙に戻し、土壙およびその周囲に散水して、その上に人型のポリ袋を何層にもわたって重ね、さらにその上面にビニールシートを幾重にも折りたたんで覆った。

樹脂で表面を覆い、遺物を取り上げる準備が整った段階で、覆土を掘り上げ、表面を樹脂で覆った。その際、笠以外の遺物は確認されなかった。笠は上(表)面を上に向け、土圧で押し潰されたためか、ほぼ水平になった状態で確認された。

次いで、土壙周辺の土を取り除き、表面(上面)を樹脂で覆われた遺物を、土壙ごと取り上げた。土壙が深い場合を想定して、深さ60cmで、縦80cm、横100cm程の土のブロックとしての取り上げであった。遺物表面図は、発掘調査事務所内に持ち帰り、樹脂で覆われていない側(笠の内側)の土を取り除き、これを図化したものであり、反転された状態での図である。

本来、笠の下の覆土が、ここでは笠の上面となっていることから、土壙の深さを確認するため、土色や土質に注意を払いながら、上の取り除き作業を行ったが、変化はみられなかった。

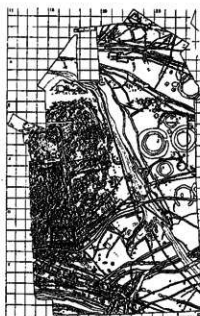
言い換えるならば、このブロックの大部分は地山であり、笠は浅い土壙の直上に位置していたと推定される。しかし、土壙ではなく、窪地に埋没していたとする可能性も否定できない。ここでは、調査時点での所見から、土壙として扱っておく。なお、笠の下面に当る位置から、土師器の小破片が1点検出された。

土壙は、下径は57.3cm×50.7cmで、上径はそれより若干規模が大きくなると考えられる。平面形は楕円形を呈する。深さは8~9cm程で、断面形は、底面が平坦な皿状を呈すると考えられる。

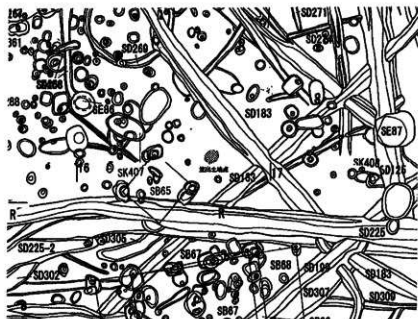
笠は、放射状に開く骨枠からみて、半径22.5cmまでは確認できるが、本来の規模ではないと思われる。この10本の骨組みに使用されている材の種類は不明であるが、太さが8mm程で、節もみられることから、葦や藁などの茎を、半分に裂いたものであろうか。材は、等間隔に配されている。また、円弧を描く部分は、茎をさらに細く裂いたものと思われ、骨枠を越えているものと潜っているものがある。このことから、製作的には縫笠といえよう。この茎をみると、2cm程の間隔で、こちらも規則的に配置されている。このことから、比較的原形を保っていると考えられる。遺存しているのは、これらの骨枠部分のみであり、中心から縁辺部へと替かれる日除け・雨除けのための部分は、材質が軟質であったためか残ってはいなかった。放射状に広がる骨枠部分は、中心部で連結したまま広がっていることから、市女笠のように頂上部が突起状を呈する構造ではなく、円錐形を呈するものと考えられる。

材質は不明であるが、葦笠と同じ形状・構造をもった笠と推定される。

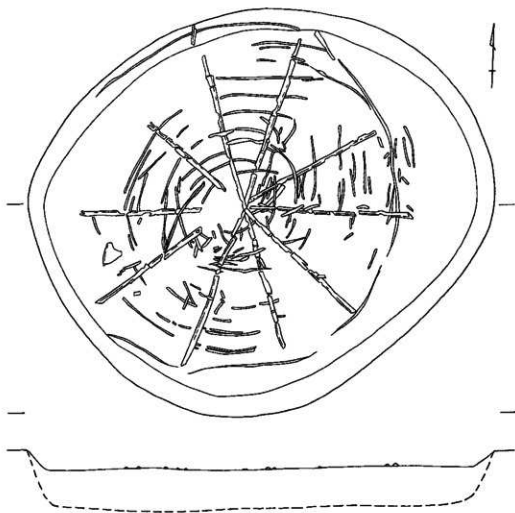




第 19 地点全体图



笠出土位置图



笠出土状况图 (反転)

L = 26.0m

0 10cm  
1:5

第313图 第19地点

## 2. 工事立合い関係

スポーツ文化公園は、北島遺跡の遺跡範囲内に位置している。当事業団による北島遺跡の発掘調査中、この公園内においては、排水溝建設や照明灯設置などを始めとして、さまざまな工事が行われた。

こういった工事は、用地幅や用地面積自体が小さいため、発掘調査に至らず、当事業団による工事立合いで、対応することとなった。

具体的な方法としては、掘削工事において、用地内のまず遺構の有無を確認した。存在する場合は、遺構の検出されるレベルで一旦掘削を止め、その面である程度広げた状態で、遺構確認をし、略図作成・写真撮影を行い、続いて掘削予定面まで掘り下げる過程で遺物取り上げをし、これを順次繰り返すというものであった。

工事内容によっては、掘削幅がきわめて小さく、さらに期間的にも、急がれるものが少なからずあった。そのため、平面や断面の図化については、スケールを使つての、メモ描きに終わらざるを得ない例もあった。

またこれらは、第18・19地点を始めとして、複数の地点を並行して発掘調査を行う中での、工事立合いであった。こうした困難な状況下における、工事立合いという記録保存であったが、結果的には北島遺跡における試掘調査という意味合いもある。

しかし、残念ながら紙数に限りがあるため、実測遺物の出土地点を地図上に示し、気づいた点を記すにとどめたいと思う(第314～316図)。

A-B間：工事の掘削予定レベルまでは、大部分が攪乱を受けており、ごく部分的に住居跡や土壌の覆土と覚しき箇所がみられる程度であったが、広範囲にわたるものであった。しかしこの結果は、第19地点で姿を現した大規模集落が、さらに西に続いていることを物語る。

なお、第19地点において検出された古墳時代前期の大溝の、続き部分と思われる幅広の溝跡が攪乱のさらに下層で確認された。

B-C間：古墳時代以降の溝跡が検出されている。

C-D間：第315図14は、D地点寄りの位置から出土した遺物である。この地点は、北大溝と仮称した遺構内にあるが、位置的(第5・314図)にみて、南北方向に走る第2・3号坪型区画跡の坪界溝に相当する地点であると考えられる。

同図15が出土した地点は、西大溝と仮称した遺構内であるが、位置的にみて、こちらは第3号坪型区画跡の北側を、東西方向に走る坪界溝に相当すると思われる。

言い換えるならば、同図14・15は、古代における条里の坪界溝跡からの出土といえるものである。

D-E間：第19地点から続く、弥生時代の溝跡(第7～11号溝跡)が、検出されている。

E-F間：古墳時代前期の住居跡3軒のほか、溝跡が検出されている。同図11～13は、この範囲内から出土したものである。

F-G間：古墳時代前期や、平安時代の住居跡が検出されている。

H-I間：古墳時代前期や平安時代の住居跡が検出されている。

J-K間：溝跡や土壌がみられたが、集落域からは外れていると思われる。

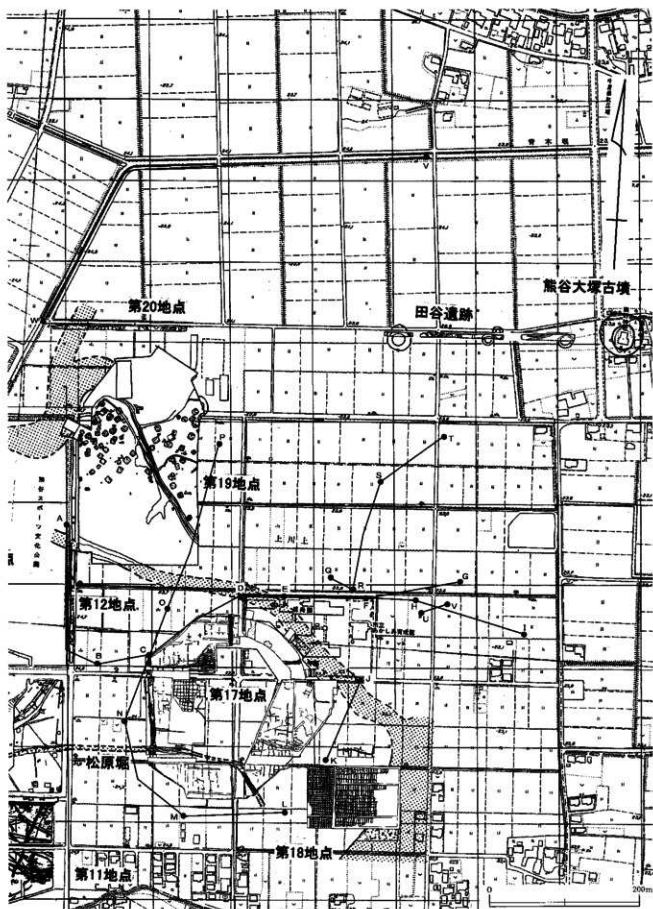
L-M間：中央で弥生時代中期の溝跡ないしは、谷地形が検出されている。

M-N間：松原堀が土層断面に確認されたほかは、とくに遺構はなく、第17地点ののり自然堤防の、西端部とも思われる。

O-P間：第19地点から続くと思われる溝跡が多数検出されたほか、古墳の周溝が検出されている。土層断面には、墳丘の盛土が20～30cm程遺存しているのが確認された。

第19地点で検出された、集落域や古墳の分布範囲は、まだ東へと続くと考えられる。

Q-R間：長さ約155m、幅6～9mの範囲内に、古墳時代前期の住居跡10軒、平安時代の住居跡2軒の計12軒の住居跡、および溝跡や土壌等が確認され



第314区 工事立会い位置図

SJ1



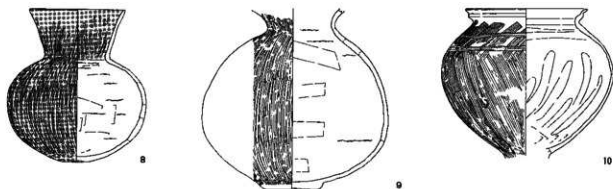
SJ2



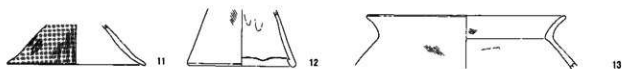
SJ8



SJ12



SJ13



北大溝

西大溝

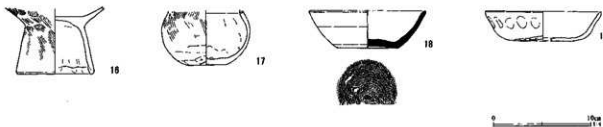
RE6~RE7



1~4 SJ1  
 5 SJ2  
 6~7 SJ8  
 8~10 SJ12  
 11~13 SJ13  
 14 北大溝  
 15 西大溝  
 16 SD1  
 17~19 SD2  
 20 RE6~RE7

SD1

SD2

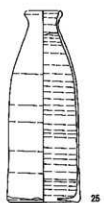


第315図 工事立会い関係出土遺物 (1)

天神東遺跡



板島工区水路砂層中



中島青木瀬前浦工区



RE7~RE5-2



RE6~RE7



RE7~RE5-2



RE6~RE7



- 21~24 天神東遺跡
- 25 板島工区水路砂層中
- 26 中島青木瀬前浦工区
- 27・28 RE7~RE5-2
- 29・30 RE6~RE7

第316図 工事立会い関係出土遺物 (2)

第45表 工事立会い関係出土遺物観察表 (第315・316図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師壺		3.4	(6.0)	DH	Ⅱ	暗褐色	50	内外面とも赤彩 器面は荒れている
2	土師台付甕	(6.4)	2.4		DEH	Ⅱ	黒灰褐色	15	内外面とも赤彩 器面は荒れている
3	土師台付甕		5.8	(10.6)	DEH	Ⅱ	黒灰褐色	20	内外面とも赤彩 器面は荒れている
4	土師台付甕		6.8	(11.2)	DEH	Ⅱ	黒灰褐色	15	内外面とも赤彩 器面は荒れている
5	須恵甕		6.4		EH	Ⅱ	暗灰色	15	未野産
6	須恵蓋	(18.4)	3.0		EH	Ⅱ	暗灰色	25	南比企産
7	須恵蓋	(13.6)	(1.2)		EI	Ⅱ	明灰色	25	南比企産
8	土師埴	(10.1)	15.2	2.7	ADH	Ⅱ	明赤褐	75	赤彩
9	土師壺		18.4	6.0	ADH	Ⅱ	暗灰色	85	赤彩か
10	土師台付甕	12.4	14.8		ADH	Ⅱ	暗灰色	85	外面に煤付着
11	土師器台		4.0	14.4	ADI	Ⅱ	明褐色	30	赤彩か
12	土師台付甕		5.6	(10.8)	AHI	Ⅱ	明褐色	15	器面は荒れている
13	土師甕	(20.4)	5.4		AHI	Ⅱ	暗褐色	20	器面は荒れている
14	土師壺	(14.1)	4.7		ABH	Ⅱ	褐灰色	15	外面に煤付着
15	須恵甕		1.8	6.0	CEF	I	青灰色	75	南比企産
16	土師台付甕		6.7	(7.8)	CEH	Ⅱ	灰黄色	30	外面に煤付着
17	土師埴		5.6	3.7	CHI	I	黄褐色	45	赤彩か
18	須恵环	(11.9)	3.9	6.3	EH	Ⅱ	黄灰色	40	未野産か 外面に墨痕
19	土師环	(11.9)	3.0		ADI	I	にぶい赤褐色	35	南比企産
21	須恵环		2.0	6.0	DH	Ⅲ	明褐色	60	未野産
22	須恵环	(12.4)	3.3	6.4	DH	Ⅲ	暗灰色	35	未野産
23	磁器小碗	(6.0)	2.9	(2.3)			白灰色	40	
25	磁器徳利	(3.5)	19.6	(7.0)			灰白色	55	
26	土師壺		2.6	5.3	ADH	Ⅱ	赤褐色	55	内外面とも赤彩か
27	土師环	(12.5)	2.7		ADE	Ⅱ	褐灰色	35	
28	土師埴か	(9.5)	3.6		ADI	Ⅱ	灰黄色	30	
29	須恵高台付环		2.3	(8.6)	DEH	I	灰色	15	南比企産
30	須恵环		1.0	(5.6)	DEH	Ⅱ	白灰色	45	未野産か

た。第315図1～10、16～20、27～30の出土範囲である。遺構の分布密度は濃く、遺存状況も比較的良好で、土層断面をみると、壁面の立ち上がりが40cmに達する住居跡がある程に、遺存度が良好なものがあつた。こういった遺構の他に、焼土や炭化物などが密集し、その近くに材木片が出土している箇所があるなど、この地点付近には多数の遺構が存在していると考えられる。

なお、この出土地点より東側では、古墳時代前期と、平安時代と考えられる住居跡が各々2軒ずつ確認された。第17地点がのる東西方向に展開した自然堤防の、北端部に近いと考えられる。

R-S間：遺構の分布密度は低く、僅かに溝跡が検出される程度であつた。第17・19地点に展開する集落城からは外れると思われる。同図21・22はこの範囲内からの出土である。

S-T間：特に遺構の痕跡はなく、集落城からは外れていると推測される。

U-V間：古墳時代前期の、住居跡と思われる覆土が検出された。北に位置する天神東遺跡の、集落城内と判断される。同図21～24が出土した地点である。

V-W間：北島遺跡と、その北東約500mに位置する中島遺跡との間を東流する水路の、関連工事に伴う立合いで出土したが、残念ながら、出土地点は明確ではない。

この周辺は、砂層が厚く堆積した部分が多いと思われる、両遺跡の中間地点と推定される。

なお、「く」字状を呈する水路の、南西から北東に走る部分は、これまでに行われてきた北島遺跡の発掘調査の成果から推定されている、旧河川の流路内に相当する可能性もある。

第46表 第17地点新旧対照表（竪穴状遺構）

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
第2号竪穴状遺構	S X 2	第17号竪穴状遺構	S J 27	第31号竪穴状遺構	S J 39
第3号 "	SX5→SJ77→SX3	第18号 "	S J 16	第32号 "	S J 41
第4号 "	S J 60	第19号 "	S J 18	第33号 "	S J 42
第5号 "	S J 8	第20号 "	S J 19	第34号 "	S J 44
第6号 "	S J 9	第21号 "	S J 20	第35号 "	S J 34
第7号 "	S J 10	第22号 "	S J 17	第36号 "	S J 35
第8号 "	S J 11	第23号 "	S J 17	第37号 "	S J 36
第10号 "	S J 29	第24号 "	S J 25	第38号 "	S J 43
第11号 "	S J 13	第25号 "	S J 31	第39号 "	S J 37
第12号 "	S J 4	第26号 "	S J 38	第40号 "	S J 33
第13号 "	S J 15	第27号 "	S J 24	第41号 "	S J 32
第14号 "	S J 26	第28号 "	S J 30	第42号 "	S X 3
第15号 "	S J 28	第29号 "	S J 40	第43号 "	S X 4
第16号 "	S J 22	第30号 "	S J 45		

第47表 第17地点新旧对照表(水田跡)

## A区一面

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
1	-	20	-	39	-	58	-
2	-	21	-	40	-	59	86
3	-	22	-	41	-	60	96
4	-	23	73	42	79	61	101
5	-	24	74	43	87	62	95
6	-	25	-	44	104	63	95
7	-	26	80	45	-	64	100
8	-	27	84	46	-	65	85
9	-	28	88	47	72	66	93
10	-	29	107	48	-	67	94
11	-	30	106	49	81	68	99
12	-	31	-	50	82	69	91
13	-	32	75	51	97	70	92
14	-	33	76	52	102	71	89
15	-	34	-	53	103	72	90
16	-	35	77	54	-	73	98
17	-	36	78	55	-	-	-
18	-	37	83	56	-	-	-
19	-	38	105	57	-	-	-

## B区一面

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
1	-	19	-	37	-	55	-
2	-	20	-	38	-	56	-
3	-	21	-	39	-	57	-
4	-	22	-	40	-	58	-
5	-	23	-	41	-	59	-
6	-	24	-	42	-	60	-
7	-	25	-	43	-	61	-
8	-	26	-	44	-	62	-
9	-	27	-	45	-	63	-
10	-	28	-	46	-	64	-
11	-	29	-	47	-	65	-
12	-	30	-	48	-	66	-
13	-	31	-	49	-	67	-
14	-	32	-	50	-	68	-
15	-	33	-	51	-	69	-
16	-	34	-	52	-	70	-
17	-	35	-	53	-	71	-
18	-	36	-	54	-	72	-
						73	-
						74	-
						75	-
						76	-
						77	-
						78	-
						79	-
						80	-
						81	-
						82	37
						83	35
						84	34
						85	-
						86	39
						87	36
						88	33
						89	30
						90	38

## C区一面

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
1	67	20	-	39	-	58	-
2	68	21	-	40	53	59	-
3	69	22	-	41	58	60	-
4	-	23	64	42	60	61	-
5	70	24	-	43	56	62	-
6	-	25	63	44	57	63	-
7	-	26	-	45	59	64	-
8	-	27	-	46	54	65	-
9	-	28	-	47	55	66	-
10	-	29	-	48	-	67	-
11	-	30	-	49	-	68	-
12	-	31	-	50	-	69	-
13	-	32	-	51	-	70	-
14	66	33	61	52	-	71	-
15	65	34	62	53	-	72	-
16	-	35	-	54	-	73	-
17	-	36	-	55	-	74	-
18	-	37	-	56	-	75	-
19	-	38	-	57	-	76	-

## D区一面

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
1	-	1	-	16	17		
2	1	2	9	17	18		
3	2	3	10	18	19		
4	3	4	11	19	20		
5	4	5	-	20	21		
6	5	6	12	21	-		
7	6	7	13	22	-		
8	-	8	14	23	-		
9	8	9	-	24	25		
10	-	10	-	25	24		
11	7	11	-	26	26		
12	-	12	15	27	27		
13	-	13	-	28	28		
14	-	14	22	29	-		
15	-	15	16	30	-		
16	-	-	-	-	-		
17	-	-	-	-	-		
18	-	-	-	-	-		

## E区一面

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
1	-	1	-	16	17		
2	1	2	9	17	18		
3	2	3	10	18	19		
4	3	4	11	19	20		
5	4	5	-	20	21		
6	5	6	12	21	-		
7	6	7	13	22	-		
8	-	8	14	23	-		
9	8	9	-	24	25		
10	-	10	-	25	24		
11	7	11	-	26	26		
12	-	12	15	27	27		
13	-	13	-	28	28		
14	-	14	22	29	-		
15	-	15	16	30	-		
16	-	-	-	-	-		
17	-	-	-	-	-		
18	-	-	-	-	-		

## Ⅶ 小結

### 1. 北島遺跡で検出された笠について

北島遺跡第19地点において、「笠」と考えられる遺物が検出された。この笠について、小考してみたと思う。

この笠は、古代の遺構検出面において確認されたものである。笠が検出された土層は、第19地点内の遺構密集範囲の一面に位置している。

笠は表面を上にして、土圧で押し潰されたためか、平らになった状態であった。この笠の上面から樹脂をかけて固め、周囲を70cm程掘り下げて、上層ごと土のブロックとして取り上げた。

この笠の表面には、樹脂が固まった状態で密着しているため、反対側から裏面の上を取り除き、笠を検出することになる。つまり実測図は、土層の底面の方から、笠の内面をみている図ということになる。

まず始めに、この笠の出土した土層と、笠の出土状況についてみていく。この土層の検出時点では、覆土の土色・土質は、他の土層やピットとの違いはみられず、堅固な暗灰褐色の粘質土であった。笠は、遺構確認面から3～4cm程、掘り下げた段階で確認された。笠より上面には、土器などの遺物はみられなかった。

この上層は、57.3×43.7cmの楕円形を呈しているが、これはあくまでも、裏側からみた数値である。笠の取り上げにあたっては、遺物の性格上、笠のみを単体で取り上げることは不可能である。そこで、笠の上面に樹脂をかけて固め、調査地点から土層ごと切り取る方法がとられた。

そのため、笠を現地で取り上げ、その下を完掘して、底面を検出するのは断念せざるを得ない。土層がある程度深い場合も想定して、笠の位置から60cm程下までを残し、ブロック状にして取り上げを行った。

この裏面の上を取り除いて行くに際して、まず現地に残された上層断面を観察し、明らかに地山であ

る上層を確定した。続いて、取り上げた土のブロックに含まれている地山部分を取り除いた。そして、残された、土層の覆土の可能性をもつブロックを、スライスするようにして、徐々に取り除いていった。

土層の厚みが、かなり残り少なくなった段階で、土層のプランと思われる楕円形が識別できた。それ以前は、平面形が長方形の、ブロック全体をスライスしていたが、この時点からは、この楕円形の内側のみを掘り下げて(理論上は、掘り上げていることになる)行くことにした。その結果、土層の覆土を5cm程取り除いた位置で、笠の裏面が現れた。

裏側で土層のプランが確認されてから、笠が検出されるまでの上は、この土層の覆土ということになるが、堅固な暗灰褐色の粘質土であった。

以上を総合すると、この土層の上層は、57.3×43.7cmよりも大きな楕円形を呈し、確認面からの深さは8～9cmの規模と推定される。

笠は、土層が5cm程埋まった時点でここに入った、もしくは入れられたと思われる。今回検出された時点では、笠は平らな状態であり、この笠が立体的な形状を呈する場合、それは上圧によるものと思われる。潰れて広がった分だけ、本来の径よりも少し大きくなっていると考えられる。この笠の出土した土層は、笠よりも一回りから一回り半ほど大きなものであったことになろう。

土層の覆土を取り除いている際に、笠の直上から、土師器の破片が1点出土した。つまり、笠の直下に存在していたことになる。それ以外の遺物は出土しなかった。

この土層と、周囲の様々で、なおかつ多数の遺構との関連については、残念ながら不明であるといわざるを得ない。

次に、笠の構造について、気づいた点を箇条書きにしてみる。なお、笠には各部位に名称があると思



われるが、ここでは仮称していきいたいと思う。まず、笠の頂点を頂上部、ここから放射状に広がる骨組みを骨棒、骨棒を桁とすれば梁にあたる部分を横棒、周縁部を縁棒と呼びたい。

なお、検出段階でも、等の遺存状況は決して良いものではなく、整理段階ではさらに劣化している状態である。以下に記す事柄は、主に遺物実測図と発掘調査現場で撮影された遺物写真を基にしたものである。

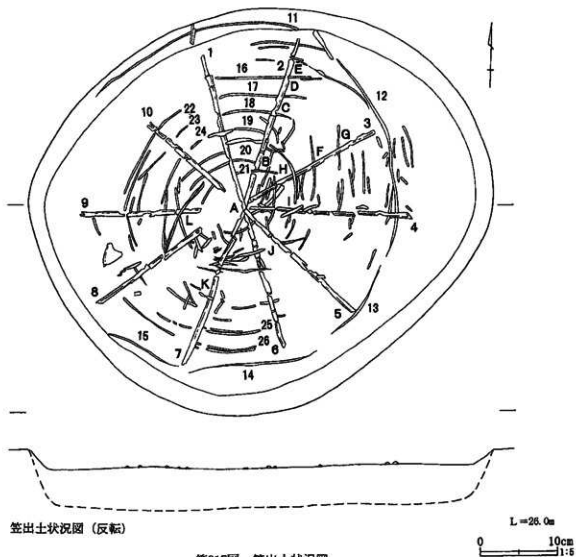
1：Aの位置を中心として、10本の骨棒（1～10）が放射状に広がっている。つまり、Aの部分が、笠の頂上部と思われる。

骨棒の開く角度は骨棒1から時計回りに、 $35^{\circ} \cdot 34^{\circ} \cdot 31^{\circ} \cdot 42^{\circ} \cdot 32^{\circ} \cdot 38^{\circ} \cdot 34^{\circ} \cdot 33^{\circ} \cdot 46^{\circ} \cdot 35^{\circ}$ で

あり、最大 $15^{\circ}$ の角度差がある。元々、これだけのばらつきがあったとは考えにくい。真上からの圧力であれば、骨棒はほぼ均等に開くと思われるが、斜め方向からの圧力の場合は、歪みながら潰れると推定される。この笠の、骨棒の角度に見られるばらつきは、笠が土圧で潰れる際に歪んだ結果であろうか。

2：骨棒の現存最大長は、骨棒2の22.5cmであるが、骨棒10では12.9cm、骨棒9では15.5cmである。

本来、同じ長さであったと思われる骨棒であるが、同じ遺構内にあって、ここまで数値が異なっている。これは、遺存状況が異なっているのか、あるいは自然的または人為的の別は不明ながら、埋まった時点ですでに長さが異なっていたのであろうか。その場合は、笠が破損したため、廃棄されたというであ



第317図 笠出土状況図

ろうか。

骨棒全体をみると、長短だけではなく、分断されている箇所が多数みられる。これらすべてが使用されている時点で分断されたとは考えづらい。検出されるまでの期間内で、劣化したと推定される。これは縁棒や横棒についても同様であろう。

いずれにしても、遺物の遺存状況から推して、本来の長さを示す数値ではないと考えられる。なお、骨棒の現存最大幅は8mmであり、こちらも劣化の影響を受けていると思われる。

3：骨棒には節がみられることから、材質は不明であるが、竹や葦などの類の茎を使用していると推定される。

4：その茎は、縦方向に半分に断ち割ったもので、割られて平らになった方の面を、笠の日除け・雨除けのための材に向けていると考えられる。

5：笠の、日除け・雨除けのための材は軟質なため消滅しており、比較的堅固な材のみが遺存したといえる。

6：骨棒1～3・5～7は、Aの部分で接していることから、本来の構造は、頂上部から周縁部(11～15)の縁棒へと、直線的または湾曲して、広がっていたと思われる。

7：11～15の材は、笠周縁部の縁棒であると思われる。いずれも、骨棒から外れた状態であり、骨棒8・9の部分では、縁棒は失われている。それとも、骨棒のところで述べたような状況で、「破れ笠」状態であったのか。

8：しかし、これらの縁棒は、骨棒の先端部から比較的近い位置にあり、ある程度、当時の規模を反映していると考えられる。

9：この骨棒と、縁棒の位置関係から推して、中心から周縁部までの規模は、22～24cm前後と想定される。

10：縁棒は、骨棒より細く、横木よりは材が太いと思われる。材は、骨棒で使用したのと同じ植物で、さらに細くしたものであるのか、あるいは別の

植物であるのかについては、判断することができなかった。

11：横棒16～21、22～24、25～26の間隔は、それぞれ約2cmでほぼ同じである。横棒についても、原形のある程度とどめていると思われる。

12：横木の材は、骨棒や縁棒と同じ植物であるか不明であるが、茎をさらに細く断ち割ったものであるか。またあるいは、藁状のものであろうか。笠の遺存状況が悪く、そこまでの判別は残念ながらできなかった。

13：横棒と骨棒の位置関係をみると、B～Gを始めとして、多くの横棒が、骨棒を潜っている。これに対して、H～Lの部分では、横棒が骨棒を越えている。この点から、この笠は編笠や組笠ではなく、縫笠であると推定される。

続いて、北島遺跡第19地点の古代の面から、平らな状態で出土した、笠の形状について考えてみたい。笠の形状には、円盤形・半円球形・円錐形・円錐台形・円筒形・漏斗形・帽子形・襜折形・楕円形ほか、さまざまな形状がある。

6でみたことから、頂上部に突起状の構造をもつ、市女笠(第318図1)の可能性は考えづらい。

13で触れたように、この笠は、編笠や組笠、張笠ではなく縫笠であると考えられる。縫笠の場合、その形状は、円盤形・半円球形・円錐形・円錐台形などが代表的なものである。では、これらの内のどれか。

8・9・11などでみたように、この笠は本来の形状を比較的良くとどめていると思われる。中心部から周縁部までの規模は、直線距離で22～24cm前後と推定される。

この規模で、半円球形や円錐台形を造った場合、きわめて径の小さな笠にならざるを得ず、現実的にあり得ないのではなからうか。そこで、残る可能性として、円盤型(平笠・同図2)または円錐形(尖り笠・同図3)が考えられる。

今回検出された笠について、観察し得たのは以上

の事柄である。これらのみからでは、笠の形状を特定することは困難である。

この時期の笠について、類例は得られなかった。笠の形状は、円盤形または円錐形と推定される、とまでしか表現できないのが現状である。

そこで、試みに絵画資料をあたってみることにした。この項の担当者の怠慢と準備不足のため、平安時代に描かれた絵画資料で、笠を描いた例はごく僅かであった。そのため、時代は下るが鎌倉～室町時代に作成された資料も併せてみていくことにした。つまり、『粉河寺縁起』・『鳥獣人物戯画』（共に平安時代末～鎌倉時代初期）・『一遍聖絵』（鎌倉時代初期）・『一遍上人絵伝』（鎌倉時代後期）・『法然上人絵伝』・『親鸞上人絵伝』・『天狗草子』（共に鎌倉時代末）・『幕州絵詩』（室町時代初頭）

『石山寺縁起』（室町時代初頭～後期）に描かれた笠である。

具体的資料としては、『日本の絵巻』シリーズ（小松茂美（編））と『新版 絵巻物による日本常民生活絵引き』シリーズ（濠澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所（編））であり、ここに掲載された絵画の中に登場する笠の数を数えてみた。その際に、平笠（円盤形）・尖り笠（円錐形）、そして参考までに、市女笠および、その他または不明の、4つの項目に分けて数えた。カッコ付きの数値は、その型の笠である可能性のあるものを意味する。なお、この分類別に数えるにあたって、絵画に描かれた笠を、どの分類にあたるかを判断したのは鈴木自身であるため、見誤りの可能性は否定できないが、参考までに掲げておく。以下の数値は、これら2つのシリ



- 1 市女笠（『粉河寺縁起』）
- 2 平笠（『法然上人絵伝』）
- 3 尖り笠（『幕州絵詩』）

濠澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編  
『新版絵巻物による日本常民生活絵引き』より

ズに掲載された絵図にあたった数値であり、各絵巻に登場する笠の総数ではないことを、予めお断りしておく。

『粉河寺縁起』では、市女笠1、平笠・尖り笠共に無し、その他または不明：1例であり、資料そのものが少なかった。

『一遍聖絵』では、市女笠：57例、平笠（1）例、尖り笠：6例、その他または不明：5例であり、市女笠が最多であった。

『鳥獣人物戯画』では、市女笠：5例、平笠・尖り笠共に無し、その他または不明：7例であり、資料そのものが少なかった。

『法然上人絵伝』では、市女笠：28例、平笠（3）例、尖り笠：3例、その他または不明：7例であり、市女笠が最多であった。

『天狗草子』では、市女笠：4例のみで、他の例はみられなかった。

『親鸞上人絵伝』では、市女笠：8例、平笠・尖り笠共に無し、その他または不明：4例であった。

『一遍上人絵伝』市女笠：180例、平笠（2）・尖り笠1＋（2）、その他または不明：17例であり、9割近くを市女笠が占めている。

『幕繪詩』では、市女笠：1例、平笠：無し、尖り笠2例、その他または不明：2例であり、資料そのものが少なかった。

『石山寺縁起』では、市女笠：11例、平笠・尖り笠共に無し、その他または不明：9例であり、資料そのものが少なかった。

絵画資料の性格にもよるが、以上の資料を見た限りでは、圧倒的に市女笠が多いといえよう。被っているのは、その名が示すように女性が多いとはいえ、男性が被っている例も決して少なくはなく、男性にも普及していたと考えられる。

しかし、これまで眺めてきたように、今回検出された笠の構造からみて、市女笠は考えづらい。市女笠は、外出時の女性の顔を隠す意味もあったのか、絵をみる限り、顔の半分、あるいは顔全体を隠して

しまう程の深さがあり、しかも径の大きな笠と考えられる。

絵画に描かれた笠と、それを被った人物との比率がまったく同じとまでは考えられぬものの、やはり、市女笠の規模は大きかったと思わざるを得ない。これらの点からも、発掘調査によって検出された笠は、市女笠ではないと判断した。

平笠は総計（6）例であり、いずれも平笠の可能性が考えられるものである。これら6例に共通するのは、人物と比較して、非常に大きいという点である。結び紐で、首から背中へ提げている例がほとんどであるが、どれも後頭部から、腰よりも下に及ぶほどの大きさに描かれている。

また、絵によっては編み目が表現されている例があり、藁のような植物で編んでいるようにも見受けられる。絵画の中に描かれている物の規模について、絵としての表現の精度が、どれ程であるかは不明である。しかし、平笠のみが、他の笠に比べてどれも大きく描かれているのは、やはり他の笠よりも相対的に大きいと推定される。

今回検出された笠と同規模（総計22～24cm）の平笠が、絵図に描かれたとしても、第318図2のような規模の笠にはならないのではないだろうか。

また、編み笠では、骨枠・縁枠・横枠をもたないと考えられることから、平笠の可能性はないと推測される。

同図3の尖り笠は、縫い目と覚しき表現がみられる小振りなものである。市女笠や平笠が、今回検出された笠とは、かけ離れて大きなものであるのに対し、図にみるような尖り笠は、規模的に近い。さらに、縫笠と思われる点でも共通している。

根拠としてはきわめて脆弱で、印象に近いものでしかないが、私見として、北島遺跡第19地点で検出された笠は、丈の低い円錐形を呈する尖り笠と考えるべき。言い換えるならば、「菅笠」に近い形状の笠ではないだろうか。

## 2. 北島遺跡で検出された条里関連の遺構について

既にみてきたように、第17地点においては、東西方向または、南北方向に走る溝跡が多数検出されている。これらの溝跡の多くは、ある程度まとまりをもっており、中には重複している例も少なからず見受けられる。試みに、これらの溝跡のまとまりに、「一町」(109m)単位で線を入れてみたのが、第320・321図である。

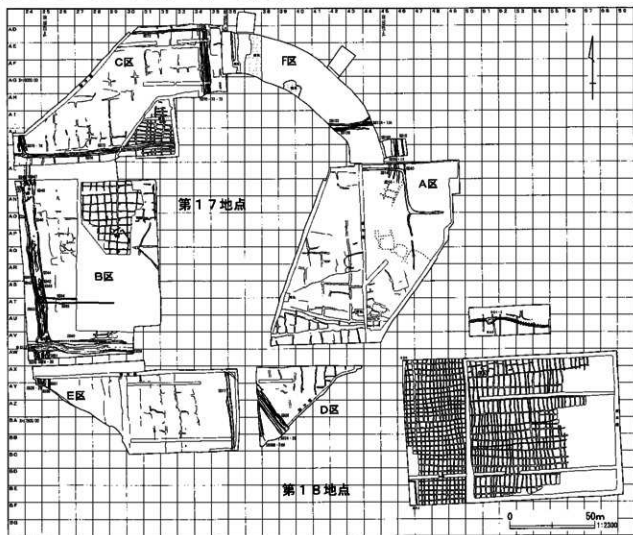
溝跡のまとまりの、どこに「一町」ごとの線を入れるかによって、溝跡から外れるもの、のるものが多少変化するが、概ねこの線の近くに位置していることが観て取れる。溝跡が何条も存在するのは、溝が浚渫や掘り直しが繰り返された結果と思われる。

準備不足のため、これらの溝跡について詳しく検討することができない。気付いた点のみを、覚え書

きとして記しておく。

溝跡の事実記載の際に記した事柄ではあるが、調査面は二面あり、上から一面・二面として全体図を示した。基本的に、一面は1108(天仁元)年、浅間山の噴火に伴う火山灰(浅間B軽石)の降灰を被った水田跡、および降灰以降の水田跡、二面は降灰以前として図化されたものである。

しかし、一面と二面の標高差が小さい上に、浅間B軽石が万遍なく分布しているという程ではないため、明瞭に面を区別することは困難であった。また、溝跡もある程度、深いものが多く、そのために別の面の遺構として、全体図に図化している可能性は、否定できない。しかし、大まかな傾向は窺えるものと思われる。



第319図 第17・18地点位置関係図

今回確認された条里関連溝跡によって、調査区内とこれに隣接する範囲内において、13の坪型区画の痕跡が浮かび上がってきた。これらについて記述する際の便宜上、各坪型区画跡に呼称番号を付した(第320・321図)。

## 二面(第320図)

1町単位で、線を引いてみたのが第320図である。南北方向の溝跡は、概ね109m四方の区画線にのっているといえよう。方位はN-4°-Wを指す。

これらの溝跡は、時期・規模・方位的にみて、古代の条里に関わる坪型区画による、坪界の溝跡と推定される。

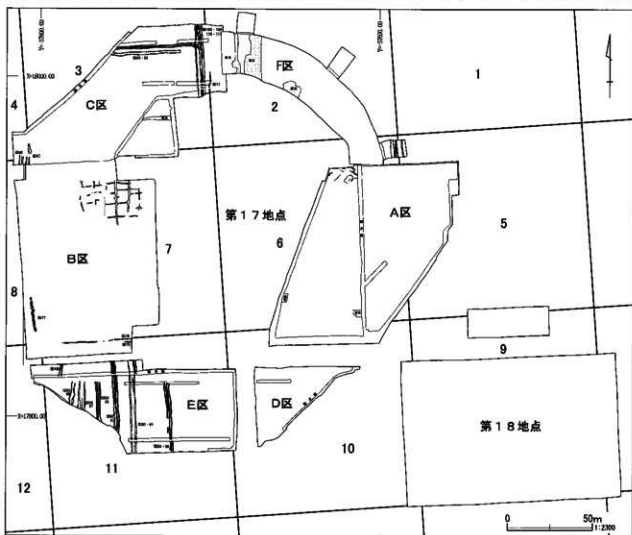
しかし、今回調査した範囲内において、坪界溝がみられない部分が5箇所ある。つまり、A区の東西方向と南北方向の溝跡で、前者は第6・10号坪型区

画跡、後者は第5・6号坪型区画跡の坪界となるものであるが、該当する溝跡は検出されていない。

第6・10号坪型区画跡の坪界については、後代の一面の水田面では、坪界と思われる大畦が位置しているが、溝跡は検出されなかった。これは先行する、二面の水田面においても、同様の状況であったのであろうか。

第5・6号坪型区画跡の坪界溝については、A区内では検出されていないが、F区南東端においては溝跡が検出されており、これが該当すると考えられる。この溝跡は、A区では消滅しているが、かつては存在したものと考えられる。

C区南側では、東西方向の溝跡が、第3・7号坪型区画跡の坪界となるものであるが、該当する溝跡は検出されていない。しかし一面では、この位置に



第320図 第17・18地点集理推定図(1)

溝跡(第74号溝跡)が検出されている。この第74号溝跡は、浅間B軽石降灰以前から存在していると思われることから、二面の水田面にも図化すべきであったかも知れない。

E区東側では、南北方向の溝跡が、第10・11号坪型区画跡の坪界となるものであるが、該当する溝跡は検出されていない。一面では、この位置に溝跡(第27号溝跡)は検出されており、これも二面では溝跡の深度が浅いため消滅した結果であろうか。

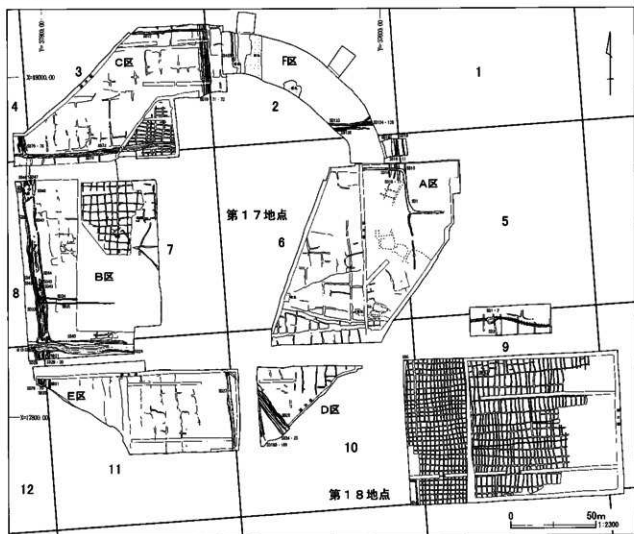
また第27号溝跡は、浅間B軽石降灰前後の時期には存在していたと思われることから、二面の水田面の時点で、すでに南流していた可能性が高い。

なおE区内には、坪型区画推定線から外れる溝跡が、何条か南北方向に走っているが、方位的にみても、南北方向の坪界溝と並行している。これらは坪

界溝の方位を意識した、平安時代の地割溝と思われる。

F区南側では東西方向の溝跡が、第2・6号坪型区画跡の坪界となるものであるが、該当する溝跡は検出されていない。こちらについても、一面の水田面では、同じ位置に坪界と推測される溝跡が検出されている。これも二面の水田跡では、溝跡の深度が浅いために消滅した結果であろうか。

第17・18地点の発掘調査によって、調査区内、および隣接する範囲内に、13の坪型区画跡が検出されたことになる。しかしこの調査面では、A区とB区で僅かに水田跡が検出されたのみである。水田跡の畦の方をみると、B区の水田跡は、坪界溝跡のものに対応していると考えられる。基本的に、浅間B軽石の降灰に先行する時期の、条里水田といえる。



第321図 第17・18地点条里推定図(2)

これに対して、A区の水田区画では、概ねN-36°-Eを指しており、坪界溝とは40°程の開きがある。

一面の水田跡の方位をみても、条里の坪界溝と対応したものであることは明らかである。これらの点から推して、二面A区の水田跡は、条里以前の水田跡と推定される。

#### 一面（第321区）

一面でも、条里の坪界推定線にほぼ一致する位置に、何条もの溝跡が検出されている。溝跡の数は、二面以上であり、重複の仕方についても、一面の溝跡以上であるといえる。これらの現象については、二面で検出された溝跡と同様に、浚渫や掘り直しの結果であると推定される。

A区東側には、第5・6坪界推定線上にのる第1号溝跡がみられる。この溝跡は、L字状を早する近世以降の溝跡であるが、A区の調査区境界線の土層断面には、この溝跡の土層が確認されていることから、L字状ではなくT字状を呈する可能性が高いと考えられる。

また、F区南東部には、坪界推定線にのる南北方向の溝跡が検出されている。これらの点から、この第1号溝跡は、古代からの坪界溝の位置と方位を踏襲した溝跡である可能性がある。

B・C・E区西側の、南北に走る第3・4、第7・8、第11・12坪界推定線は、東西方向の坪界推定線と合流しながら、南流していると思われる。

C区東側では、第2・3坪界推定線上にのる、南北方向に走る溝跡がみられるが、この溝跡はE区東側を南北方向に走る溝跡（第27号溝跡）に繋がるとみられる。この第27号溝跡は、浅間B軽石降灰前後から中世に及ぶ、第10・11号坪型区画跡の坪界溝跡であると考えられる。

B区南側の、第7・11、第8・12坪界推定線付近にも、何条かの東西方向に走る溝跡が検出されているが、これらについても、浚渫や掘り直しが繰り返された結果と考えられる。その中でも、ひときわ幅

広な第24号溝跡は、浚渫を繰り返しながら、奈良・平安時代から継続して用いられた溝跡である。この溝跡は、近世には南東に流れを替え、松原堀と呼ばれる用水となっている。

この東西方向の坪界境を、東に延ばしてA区を眺めてみると、推定線から僅かに外れはするものの、幅広の畦がみられる。この畦の位置・方位・規模等から推して、第6・10坪界区画跡の坪界境となる大畦と推測される。しかし、この大畦中央または脇には、用水路としての溝跡は認められなかった。

この点については、第18地点西側の坪界推定線についても同様で、第9・10坪型区画跡の坪界境となる南北方向の推定線の近くに、坪界境と思われる大畦が存在しているが、その中央もしくは脇にも溝跡はみられなかった。

このことから、B区南側の第7・11、第8・12坪界推定線上の、東流する坪界溝は、第2・3、第6・7、第10・11坪界推定線上にのる南流する坪界溝に合流して、南下すると考えられる。

第18地点北側の第1・2号溝跡は、第5・9坪界推定線上から位置的に若干外れ、やや蛇行して東流する江戸時代の溝跡である。しかし位置・方位からみて、基本的には、古代の坪界溝を踏襲したものと推定される。

第5・6坪界推定線上市を南北方向に走る溝跡は、第18地点第1・2号溝跡の前身と考えられる坪界溝に合流した後、東に流れを移したと想定される。

C区南西側には、第3・4、第3・7坪界推定線上にのる、溝跡（第74号溝跡）が存在している。調査時の遺構番号として、直角に曲がる溝跡として命名されているが、C区以西から東流してきた溝跡と合流するものである。

F区南側の東西方向の溝跡は、第2・6坪界推定線上にのるもので、C区南側の、第3・7坪界推定線上にのる、東西方向に走る溝跡の続き部分といえる。そしてこの溝跡は、C・E区東側のそれぞれ第2・3坪界、第10・11坪界推定線上にのる、南北方



向に走る溝跡と合流すると推定される。

#### 条里推定線から外れる溝

今回の発掘調査で検出された、条里の坪型区画に伴う多くの溝跡は、浚渫や掘り替えなどを経た結果、多少の誤差はあるものの、1町方格に区画されている。

この区画および、区画溝を観て気づいた点を付言しておきたい。坪界溝と推定される東西方向、あるいは南北方向に走る溝跡は、各々重複したり並行したりしているが、検出時点でのずれ幅は、大きいもので7～8mであった。しかもこれは、各溝跡底面の芯・芯の距離であり、溝上面（＝当時の地表面）を想定すれば、もっと接近した位置からの掘り込みであったことになる。つまり、現在、全体図を通して感じる以上に、当時の誤差は小さなものであったと推定されるのである。

しかし、こういった誤差とは別個の原因と推測される、南北方向に走る溝跡がみられる。1例は、F区西側の第155号溝跡であり、もう1例はD区西側の第188・189号溝跡である。F区の第155号溝跡は、第2号坪型区画跡内に、D区の第188・189号溝跡は、第10号坪型区画跡内に位置している。

ともに同じ南北方向に走る溝跡であり、第188と189号溝跡には、時期差があると考えられる。

そして、この第188と189号溝跡のいずれかは、第155号溝跡と繋がる一連の溝跡であると考えられる。これらの溝跡からは、遺物は出していないものの、検出時の状況から、平安時代の条里関連の溝跡と考えられる遺構である。

第155・188・189号溝跡は、第2・3号坪型区画跡、第6・7号坪型区画跡、第10・11号坪型区画跡を区画する、南北方向の条里推定線から、東に18mの距離をおき、条里溝に並行して走っている。

この18mを換算すれば、10歩（間）ということになるが、この数値は偶然ではなく、意図的に設定された結果であろうか。意図的なものである場合、この10歩はどのような意味をもった数値であるのか。

残念ながら、ここではこれ以上、この問題に踏み込むことができない。

なお、10歩の距離を置いて、条里溝に並行している区域がある可能性を想定し、各調査区内の溝跡を観察してみた。しかし類例は見当たらず、本例が例外的に確認されているに過ぎない。この点に関しても、条里推定線から外れる溝跡が存在する、という事実を指摘するに止まざるを得ない。

#### 水田区画の形状・規模

今回の調査で確認された条里に伴う水田区画の内、形状・規模の痕跡が、最もよく残っているのは、第18地点の西区で検出されたものであるといえよう。以下に、この地点の水田区画の形状・規模について少しみておきたい。

水田区画の形状には、概ね3つのタイプがある。

- 1：短冊形を呈するもの。
- 2：短冊形とまではいかないが、長方形を呈するもの。
- 3：ほぼ正方形を呈するもの。

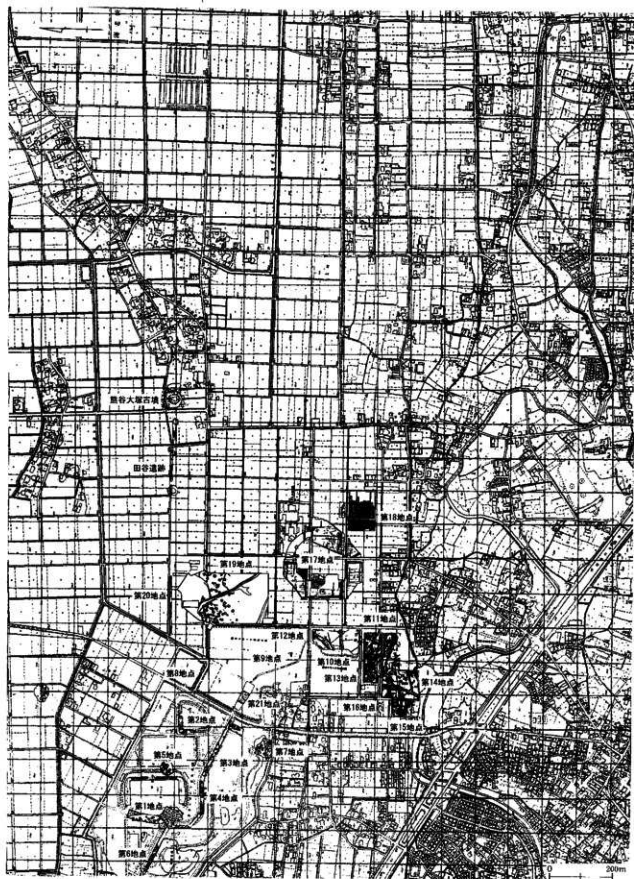
1のタイプの規模は、2.4～4.4m×0.8～2.2mと幅があるが、概ね2.5～3.5m×1.5～2m前後のものが多く、面積的には、1.9～8.8㎡と幅があるが、4～6㎡のものが多く。

2のタイプは、第18地点西区では、最も多い水田区画の形状といえる。

規模は、2.2～3.4m×2.4～2.9mと幅があるが、概ね2.5～3m前後×2～2.5m前後のものが多く、面積的には、2.6～8.8㎡と幅があるが、4～6㎡のものが多く。

3のタイプの規模は、1.2～3.2m×1.3～3.3mと幅があるが、概ね2～3m前後×2～2.5m前後のものが多く、面積的には、3.2～10.9㎡と幅があるが、4～6㎡のものが多く。

水田区画の形状に、多少の差異はあるものの、面積的には4～6㎡の水田区画が多いといえよう。しかし、この水田区画が、他の坪型区画の水田に共通するか否かまでは言及できない。



第322図 北鳥遺跡周辺の条理推定図

水田の畦が失われる原因としては、次の2つの場合が想定されるのではないだろうか。

- 1：後の耕作によって失われた場合。
- 2：土圧によって潰れてしまった場合。

北島遺跡第17・18地点における、古代の水田区画についてはどうか。

1については、田起しによって新たに畦を設けたため、それ以前（昨年か）の畦が失われてしまった、という可能性を想定した。これについては、新たに田起しする水田が、それ以前の水田や畦の面と同じレベルか、もしくはそれに近いレベルである、というのが前提となる。

2については、河川の氾濫によって、水田に土砂が堆積した後、この高くなった地表面から田起しした場合を想定した。因みに、一面の水田面では、浅間B軽石によって、完全ではないものの水田面と畦がバックされ、さらに、後に起こった河川の氾濫によって運ばれた上砂のために、改めてバックされたと考えられる。

北島遺跡およびその周辺の集落域や水田域の多くは、自然堤防やこれに伴う後背湿地に立地している。そのため、河川による影響は、こんにち我々が想像する以上のものがあったと推定される。

発掘調査時点に実感した事柄ではあるが、集落域や水田域の地山の大部分は、砂質・シルト質・粘土質であり、いずれも河川や雨水を始めとする水の作用によって形成されたり、運ばれてきたものである。

そして、各遺構内の覆土についても、ほぼ同じことがいえる状況であった。

そういった土砂の他には、河川の覆土内に層的に混入されている数cm～拳大の礫が、大規模な洪水が何度かあったことを物語っている。

こうして、度々もたらされた河川による氾濫土は、礫以外はいずれも肌理の細かな土質が大部分である。そのため、土砂に埋没した水田や畦は残りはしたものの、土圧によって押し潰される可能性があると思われる。

では、具体的に北島遺跡はどうか。二面の水田区画については、1の可能性もあり得る。二面の水田区画では、畦の痕跡がきわめて少ないが、これが原因の一つであるかも知れない。しかし、2の可能性も否定するだけの根拠が乏しく、いずれとも明言はできない。

次いで一面の水田区画の場合ではどうか。全面とはいえないまでも、浅間B軽石が水田に残った状態で検出されている。

換言するならば、浅間B軽石の降灰以後、この面では水田耕作が、一旦放棄されたと考えられる。後に水田耕作が再開された時点では、浅間B軽石に覆われた水田面はすでに、埋没した状態であったと考えられる。そのため、1は原因として考えにくく、2の可能性の方が、可能性としては高いと考えられる。

この点に関しては、第18地点の水田跡・畦も同様と思われる。

第18地点西区では、水田区画の畦の痕跡が、他の地点よりも原形に近い形状・規模で検出されたといえる。しかしこの畦は、上記の原因から土圧によって押し潰されたと推測される。畦は、あくまでもプリント状態で検出されたものである。

そのため、水口については位置は元より、存在の有無も不明といわざるを得ない。本来、水口をもたない水田区画であるとすれば、この坪型区画内での給水方法は、田から田への掛け流しであったと推定される。

水口を通しての給水である場合、または掛け流しの場合のいずれの場合でも、ここに報告する水田区画での給水は、基本的に、北西方向から南東方向であったと考えられる。

#### 水源について

今回の調査で検出された古代の水田跡と溝跡は、整然と配された坪型区画と、それに伴う水田と溝であるといえる。この水田域で必要とした用水は一体どこから導水されたものであるのか。

根本的な水源として、およそ2点が考えられる。

1：熊谷扇状地扇端部の湧水点を起点とする、複数の中小河川。

2：利根川の支流である複数の中小河川。

荒川が形成する熊谷扇状地の扇端部には、湧水点が数多く存在する。この湧水を起点とする中小の河川は、地形的に東流するが、東に行くに従って利根川の氾濫堆積作用の影響を受けて、南東方向へ流れを変えている（第2図）。

こうした複数の中小河川からの導水で、広大な水田域の用水を賄い切れたのであろうか。また、北東方向への導水も困難である。

利根川の支流である、複数の中小河川を水源とする場合は、南西方向への導水が困難である。

今回の調査で検出された、条里関連の水田区画や、坪型区画は、位置的にみて「中条条里」の一部といっていよいであろう。この条里区画の、北側と西側がどこから始まるのかについては、残念ながら確定できない。この点については、南側と東側についても同様である。

乏しい発想ながら、私見として述べておく。水源として考えた1の場合と、2の場合のいずれか一方を用いたというのではなく、両方の場合があったのではないだろうか。

即ち、各坪型区画に近い中小河川からの導水を、主としたと考えたい。

おわりに

本報告書において、浅間B軽石降灰以前の溝跡と水田跡を図化した全体図（第121・320図）と、浅間B軽石降灰以後の溝跡と水田跡を図化した全体図（第135・321図）を掲げた。しかし、浅間B軽石以前から存在していたと考えられる溝跡が、二面ではなく一面に図化されているものがあり、厳密性に欠けることを、再度お断りしておきたい。

条里関連の溝跡から、僅かに出土した遺物から観る限り、8世紀末以降に開始された可能性が考えられる。そして浅間B軽石の降灰後、一旦放棄された。水田耕作の、空白期間を特定することはできないが、中世段階には、条里を踏襲した水田化が始まったと推定される。

なお、今回の調査で確認された坪型区画を敷衍して、周辺地域にまで推定線を入れてみた（第322図・註1）。局地的に得られた情報を基にしたものであり、あくまでも推定の域を出ない。無論、今後調査例が増すごとに、修正が不可欠となろう。

（鈴木孝之）

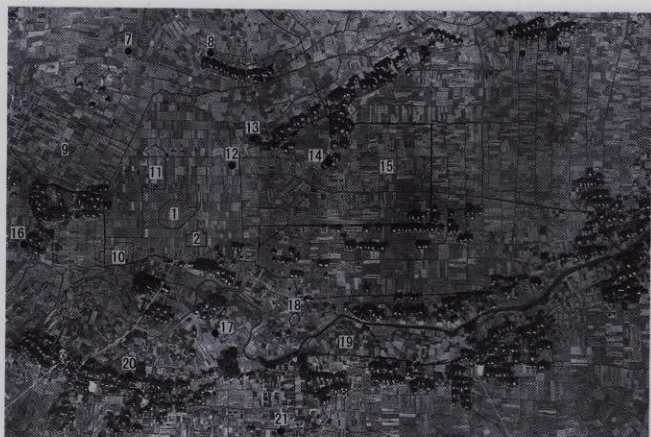
註1：第2図は、当事業団がこれまでに調査を行った北高遺跡内の、各調査地点の位置を示したもので、これまでに刊行されている報告書の図版を踏襲している。今回も、この図に関して手を加えてはいない。そして、この稿に示した第322図は、第5図に線引きした条里推定線とは若干異なった図となっているがそのままとした。

## 引用・参考文献

- 柏京建史・齊藤英敏 2002 「上滝榎町北遺跡」日本道路公団（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第290集  
群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 浅野皓樹 1998 「北高遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 石守 晃 2003 「中内村前遺跡（2）-5~7区-」群馬県（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第322集  
群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大橋 孝 1981 「近世初頭の河川改修と浅間山噴火の影響」アーバンクボタNo.19
- 大谷 徹 1991 「北高遺跡Ⅲ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第103集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 龍瀬良明 1981 「谷地田・台端・自然堤防」アーバンクボタNo.19

- 金子正之 1988 『天神遺跡』熊谷市教育委員会
- 菊地隆男 1981 『先史時代の利根川水系とその変遷』アーバンクボタNo.19
- 金田章裕 1985 『条里と村落的歴史地理学研究』大明堂
- 栗岡 潤 1999 『天神東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第240集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 黒坂祐二 2002 『池上／諏訪木遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小松茂美 1988 『日本の絵巻16 石山寺縁起』中央公論社
- 小松茂美 1990 『日本の絵巻5 粉河寺縁起』中央公論社
- 小松茂美 1990 『日本の絵巻6 鳥獣人物戯画』中央公論社
- 小松茂美 1990 『日本の絵巻19 西行物語絵巻』中央公論社
- 小松茂美 1990 『日本の絵巻20 一瀬上人絵伝』中央公論社
- 斉藤利昭 2003 『宿横手三波川遺跡西横手遺跡群』群馬県 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第310集  
群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 滝澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所(編) 1990 『新版絵巻物による日本常民生活絵引』東京印書館
- 寺社下博 1980 『中条遺跡群・中島遺跡』熊谷市教育委員会
- 寺社下博 1982 『中条遺跡群Ⅲ・権現山遺跡・常光院東遺跡』熊谷市教育委員会
- 寺社下博 1984 『中条遺跡群 昭和52年度～昭和56年度調査遺跡概略 昭和58年度調査・光屋敷遺跡』熊谷市教育委員会
- 寺社下博 2004 『一本木前遺跡Ⅴ』平成15年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会
- 鈴木孝之 1998 『北島遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第195集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中弘明 2002 『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第278集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中弘明 2004 『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第293集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 並木 隆 1979 『中条条里遺跡調査報告書』熊谷市教育委員会
- 宮村 忠 1981 『利根川治水の成立過程とその特徴』アーバンクボタNo.19
- 古田 聡 2003 『北島遺跡Ⅶ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 古田 聡・富田和夫・久保田睦子 2004 『北島遺跡Ⅷ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集  
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

## 写真図版



遺跡周辺 (昭和24年撮影米軍写真)



遺跡遠景 (南西から)



第17地点全景（南から）



第18地点全景（西から）





A区・B区全景



A区全景



A区全景



A区全景



A区北西部遠景



A区AN・AOグリッド遺構群



A区AN45グリッド遺構群



A区AN47・48グリッド遺構群





C区全景



C区一面



D区·E区全景



17地点全景 (D·E区)